

福岡市
学校建設地内遺跡調査報告書
三筑遺跡・次郎丸高石遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第69集



1981

福岡市教育委員会

福岡市
学校建設地内遺跡調査報告書
三筑遺跡・次郎丸高石遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第69集

1981

福岡市教育委員会

序

近年、本市周辺部の都市化の進展は、目を見張らせるものがあります。

今回の調査はこのような都市化による人口の増化に伴う児童生徒の急増に対処するため、昭和54年9月に新設移転された市立三筑中学校及び昭和58年4月開校が予定されている市立西福岡中学校の校舎敷地内に所在する遺跡について、教育委員会が調査主体となり実施したものです。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

なお、調査に際しまして、有益な助言をいただいた調査指導員の先生方をはじめ、調査の意義をよく理解し、心から協力をいただいた多くの方々に対しまして感謝申し上げます。

昭和56年3月31日

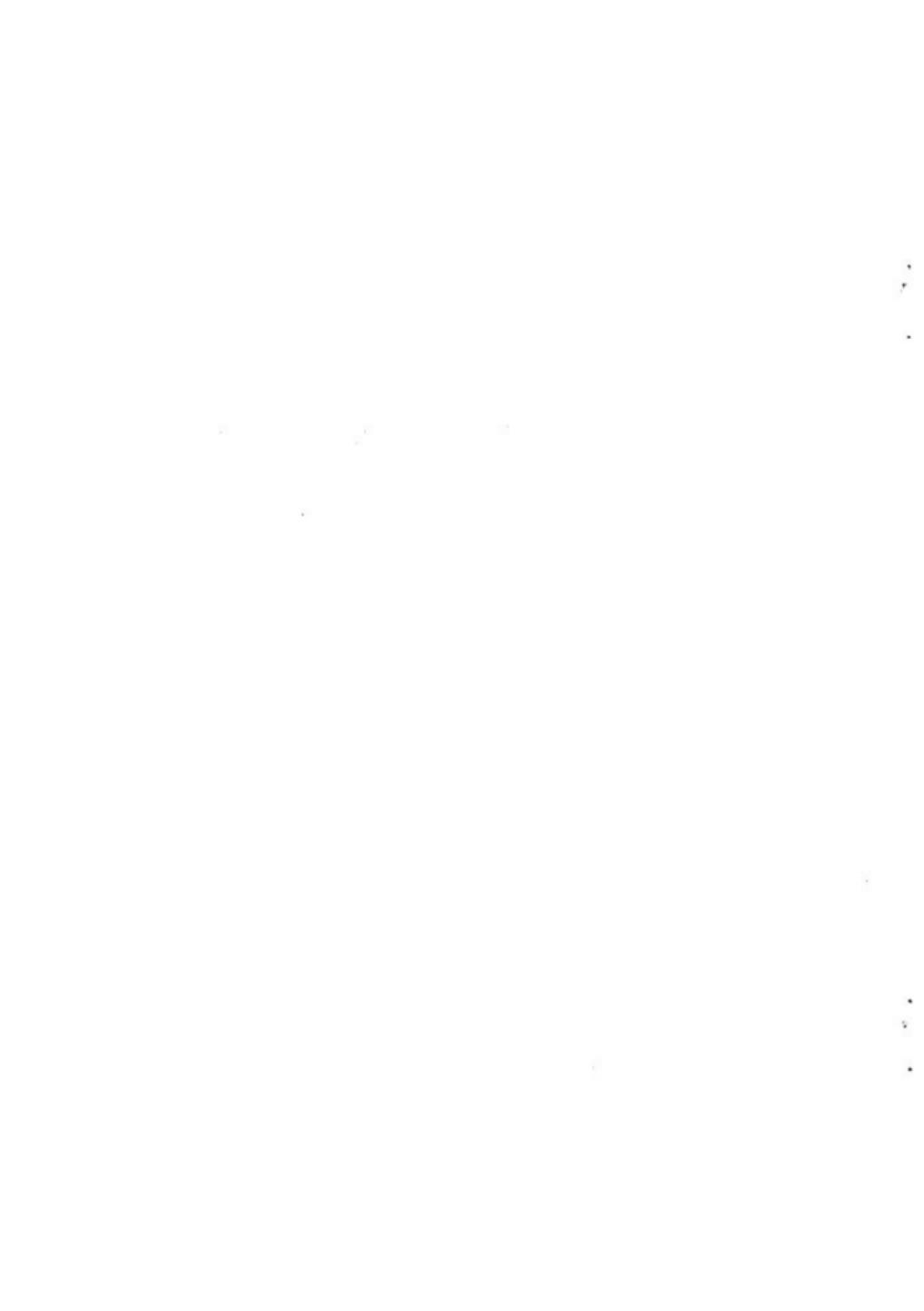
福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

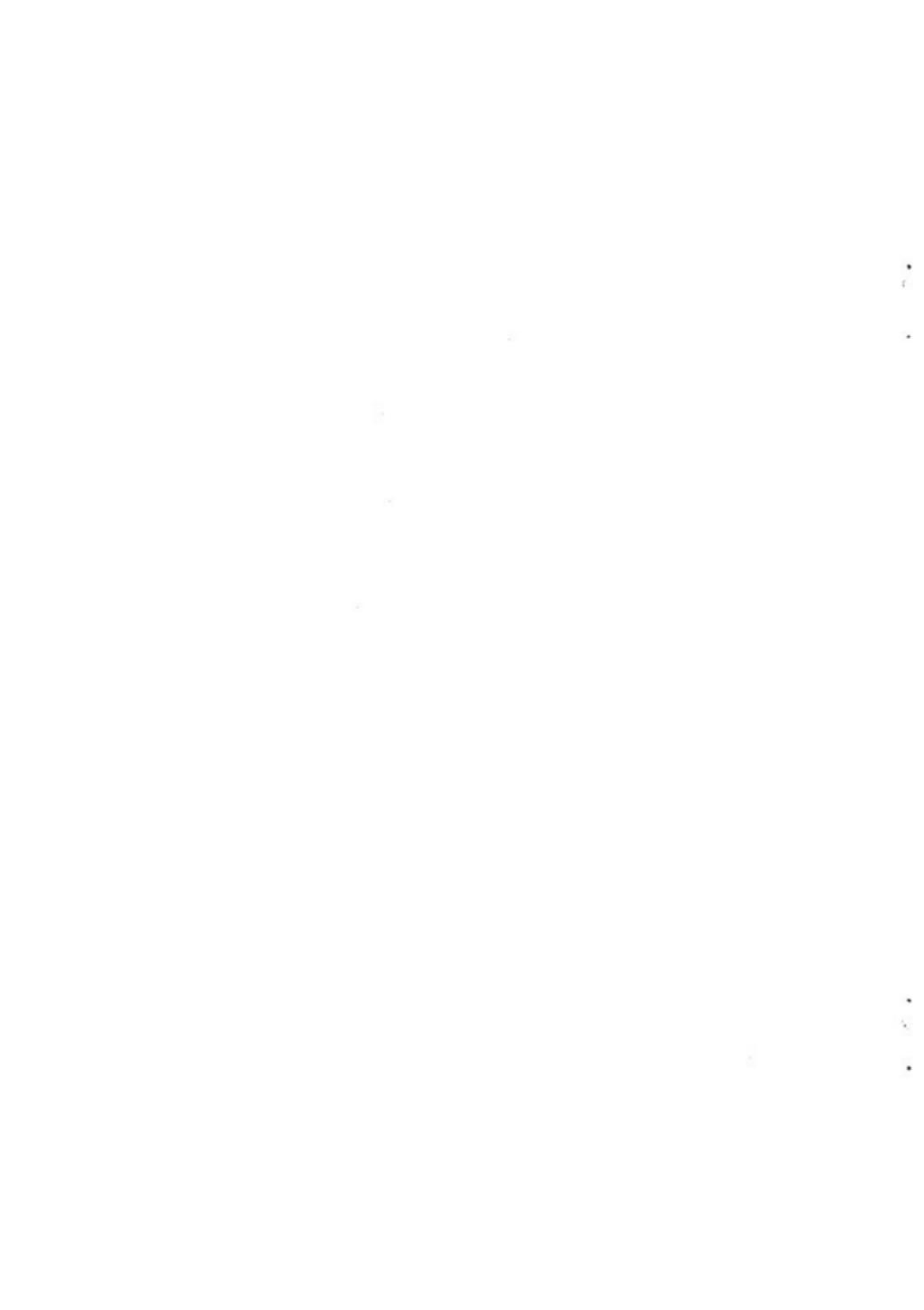
福岡市
三筑遺跡

1981

福岡市教育委員会







例　　言

- 1 本書は福岡市教育委員会施設部管理課が計画した市立三筑中学校移転建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課が1976年10月～1979年5月に行った、福岡市博多区三筑に所在する三筑遺跡の調査報告書である。
- 2 本書の執筆には山崎純男があたった。
- 3 本書に使用した図の作成は主に山崎・沢 皇臣・山口政治・原俊一・木下尚子・吉橋重喜・福岡大学歴史研究部考古班があたった。
- 4 本書の図の説明は主に山崎があたり、他に木下・白土義実・難波新吾・其畠真二がこれを補助した。
- 5 本書に使用した写真は主に山崎の撮影によるもので、一再、浜田昌治によるものがある。
- 6 本書の編集は山崎があたった。

本文目次

第1章 序説	1
1はじめ	1
2三筑遺跡の位置	2
3周辺の遺跡と三筑遺跡	5
第2章 調査の概要	7
第3章 第1調査区の遺構と遺物	11
1川	11
(1)水路の状況	11
(2)川の層序	13
2第1井堰と出土遺物	19
(1)第1井堰	19
(2)出土遺物	22
3第2・3井堰と出土遺物	22
(1)第2・3井堰	22
(2)出土遺物	26
4第4井堰	29
5第2付設水路	31
6水田址、水溜状遺構と出土遺物	33
(1)水田址	33
(2)水溜状遺構	43
(3)出土遺物	46
7弥生時代の遺構	48
第4章 第2調査区の遺構と遺物	49
1川	49
2第5井堰	52
3第6井堰	53
4第3付設水路	53
5川出土の遺物	56

(1) 土器	56
(2) 石器	66
(3) 木器	68
6 中世水田址と出土遺物	77
(1) 中世水田址	77
(2) 出土遺物	80
7 第3付設水路と整地層	81
(1) 第3付設水路の断面	81
(2) 整地層について	82
① 整地層の年代	82
② 出土遺物	83
③ その他の遺構	83
8 第2調査区の上層	84
第5章 総括	87
1 各時代の水田遺構	87
(1) 弥生時代の遺構	87
(2) 古墳時代の遺構	87
(3) 中世の遺構	93
2 水溜状遺構について	94
3 水に対する祭祀	96

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図.....	3
第2図 三筑遺跡の位置と発掘区.....	4
第3図 調査区の配置と遺構全図.....	8
第4図 第1調査区全剖面.....	12
第5図 第1・2調査区旧河川土層断面図.....	14
第6図 第1井堰と用排水關係実測図.....	18
第7図 第1井堰実測図.....	20
第8図 第1井堰出土遺物実測図.....	21
第9図 第2・3井堰、第7水溜状遺構と用排水關係実測図.....	24
第10図 第2・3井堰実測図.....	25
第11図 第2・3井堰出土遺物実測図.....	27
第12図 第4井堰と用排水關係図.....	29
第13図 第2付設水路と用排水關係図.....	30
第14図 水田址1と第1水溜状遺構実測図.....	32
第15図 水田址2・3・4実測図.....	34
第16図 水田址5実測図.....	35
第17図 水田址5出土土器実測図.....	37
第18図 水田址6・7、水溜状遺構2・3実測図.....	38
第19図 水田址8実測図.....	40
第20図 水田址9実測図.....	41
第21図 水田址10実測図.....	42
第22図 水溜状遺構5・6実測図.....	44
第23図 水溜状遺構5・6の供獻土器実測図.....	45
第24図 水溜状遺構7の供獻土器実測図.....	46
第25図 弥生時代溝断面図.....	48
第26図 第2調査区全面図.....	50
第27図 第5井堰実測図.....	52
第28図 第6井堰実測図.....	54
第29図 付設水路の井堰実測図.....	55

第30図 川出土土器実測図(1).....	57
第31図 川出土土器実測図(2).....	60
第32図 川出土土器実測図(3).....	62
第33図 川出土土器実測図(4).....	64
第34図 川出土石器実測図(1).....	66
第35図 石器実測図(2).....	67
第36図 木器実測図(1).....	70
第37図 木器実測図(2).....	71
第38図 木器実測図(3).....	72
第39図 木器実測図(4).....	73
第40図 木器実測図(5).....	74
第41図 木器実測図(6).....	76
第42図 木器実測図(7).....	76
第43図 中世水田実測図.....	78
第44図 中世水田出土遺物実測図.....	80
第45図 付設水路および整地断面実測図.....	82
第46図 須恵器実測図.....	83
第47図 第2調査区土層断面実測図.....	85
第48図 弥生時代の遺構全図.....	88
第49図 古墳時代の遺構全図.....	90
第50図 中世の遺構全図.....	92
第51図 野多目前田遺跡近世水田.....	95

図 版 目 次

- P L . 1 (1) 遺跡全景(西から)
(2) 遺跡全景(南から)
- P L . 2 (1) 第1調査区全景(北から)
(2) 第1調査区全景(北西から)
- P L . 3 (1) 第1調査区全景(北東から)
(2) 第1調査区全景(東から)
- P L . 4 (1) 第1調査区全景(北から)
(2) 第1調査区全景(東から)
- P L . 5 (1) 第1調査区川断面
(2) 第2調査区川断面①
(3) 第2調査区川断面②
- P L . 6 (1) 第1調査区第1井堰
(2) 第1調査区第1井堰近景
- P L . 7 (1) 第1調査区第2・第3井堰
(2) 第1調査区第2井堰
- P L . 8 (1) 第1調査区第2井堰
(2) 第1調査区第2井堰
- P L . 9 (1) 第1調査区第2井堰遺物出土状況
(2) 第1調査区第2井堰遺物出土状況
- P L . 10 (1) 第1調査区第2井堰遺物出土状況
(2) 第1調査区第2井堰遺物出土状況
- P L . 11 第1調査区第2井堰出土十郎器と第2調査区出土須恵器
- P L . 12 (1) 第1調査区の第3付設水路水口遺物出土状況
(2) 第1調査区第3付設水路水口と杭列
- P L . 13 (1) 第1調査区第2付設水路全景
(2) 第1調査区第2付設水路(北から)
- P L . 14 (1) 第1調査区第2付設水路水口(西から)
(2) 第1調査区第2付設水路水口(南から)
- P L . 15 (1) 第1調査区第6水道状遺構と遺物出土状況

- (2) 第1調査区第5・6水路状遺構と遺物出土状況
- P L . 16 (1) 第1調査区第6水路状遺構と遺物出土状況
- (2) 第1調査区第5水路状遺構と遺物出土状況
- P L . 17 (1) 第1調査区第1水路状遺構と水田地(東から)
- (2) 第1調査区第1水路状遺構と水田地(北から)
- P L . 18 (1) 第1調査区第1水路状遺構
- (2) 第1調査区第7水路状遺構と堰
- P L . 19 (1) 第1調査区第1・5水田址横矢板列
- (2) 第1調査区水田址横矢板列近景
- P L . 20 (1) 第1調査区水田址5木器出土状況
- (2) 第1調査区川の木器出土状況
- P L . 21 (1) 第1調査区木器出土状況
- (2) 第2調査区石龜丁出土状況
- P L . 22 (1) 第2調査区木器出土状況
- (2) 第2調査区木器出土状況
- (3) 第2調査区木器出土状況
- P L . 23 (1) 第1調査区木器出土状況
- (2) 第1調査区第1井堰木器出土状況
- P L . 24 第1調査区水田址5出土木器(1)
- P L . 25 出土木器(2)
- P L . 26 出土木器(3)
- P L . 27 出土木器(4) 川山土土削器
- P L . 28 川出土土器(弥生式土器)
- P L . 29 出土土器
- P L . 30 (1) 第2調査区第3付設水路堰
- (2) 第2調査区第3付設水路堰
- P L . 31 (1) 第2調査区川断面
- (2) 第2調査区中世水田用排水口断面

第1章 序 説

1 はじめに

1978年、市街地の拡大に伴い市立三筑中学校の移転建設が具体化した。福岡市教育委員会施設部管理課は文化課に対して埋蔵文化財の有無についての依頼を行い、これを受けた文化課では、柳田、柳沢が現地踏査の上さらには試掘調査を実施し、中学校建設敷地内に清（川）が対角線状に走行し、さらに杭、矢板列が存在することを確認した。この結果をもとに文化課と管理課が協議を行い、校舎の配置等について設計変更を行ったが、どうしても造構部分をさけることができないために、一部を除いて発掘調査によって記録をとどめることになった。調査は当時近くの板付遺跡の発掘調査に従事していた山崎、沢、山口があたり、1978年10月から1979年5月までの約8ヶ月間にわたって実施した。調査にあたっては、教育委員会管理課をはじめ地元各位の多大なる協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

調査組織

調査委託者	福岡市教育委員会施設部管理課
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係
事務担当	三宅安吉、古藤四郎
調査担当	山崎純男、沢 皇臣、山口謙治
調査指導、協力者	森貞次郎（九州産業大学教授）、横山浩一（九州大学教授）、渡辺誠（名古屋大学助教授）、石野博信、菅谷文則（椎原考古学研究所）、下條信行（平安博物館助教授）、後藤直（福岡市立歴史資料館）
調査補助員	原俊一、木下尚子、遠水信也、篠原修二、山利葉浩司、宇田川正宏、前田義人、奈良崎和典、木下丈之、松風潤、市橋重喜、伊崎俊秋、上野修一
作業員（男）	白土義寛、其畑真二、千々和謙策、森邦雄、鈴川克二、倉田浩一、大部茂久、星山利久、徳永静雄、白石敏雄、大和光、須上伝三郎、藤井招見、秋葉勝、津村武光、岩隈由丸、藤俊栄、八尾恭司、入佐正典、丸山隆、江口祐介、蛭波新吾、竹内祥晃、平川祐介、宗和男、池田孝弘、内野俊彦、村

山政志

作業員（女）

宿久光枝、江崎光子、倉川キチエ、安高久子、河鍋昭子、順上君江、山村マミ子、勝野美智子、関さよ、前島初子、古賀博子、永松伊都子、八尋千代、永桜礼子、伊藤良子、加藤キヨ、池見ツネヨ、後藤ミヨ子、徳永マツ子、野川桂子、八尋志美子、河鍋美智子、金堂仁枝、森山キヨ子、山根キミエ、富永千里、富永砂代、大神和子、木山真由美、勝野孝子

2 三筑遺跡

三筑遺跡は福岡平野のはば中央部に位置し、行政区画上は福岡市博多区三筑一丁目に属する。国土地理院発行の25000分の1の地形図『福岡南部』の北から16cm 東から15.5cmの地点にあたる。同遺跡の東1kmには御笠川が北流し、西に隣接して諸岡川が北流している。地形的には須玖丘陵から延びてくる御笠川の流路によって形成された段丘上に位置するが、この段丘は多くの谷の解釈によって複雑な姿を示し、この段丘の先端は弥生時代初頭の遺跡として著名な板付遺跡をのせる台地となっている。

この段丘の地山は八女粘土層の堆積であるが谷の解釈部分は侵蝕されている部分も多い。二筑遺跡は丘陵部分と谷部分を含み、水田が形成されるのは谷の部分にあたる。調査前の地目は水田で、標高12.5mを測り、周囲との比高差はない。周囲には後述する如く、多くの遺跡が密集するが、これは、この段丘と解釈された谷（冲積地）との複雑な状況とが水田開発に適していたためと考えることができる。

3 周辺の遺跡と三筑遺跡

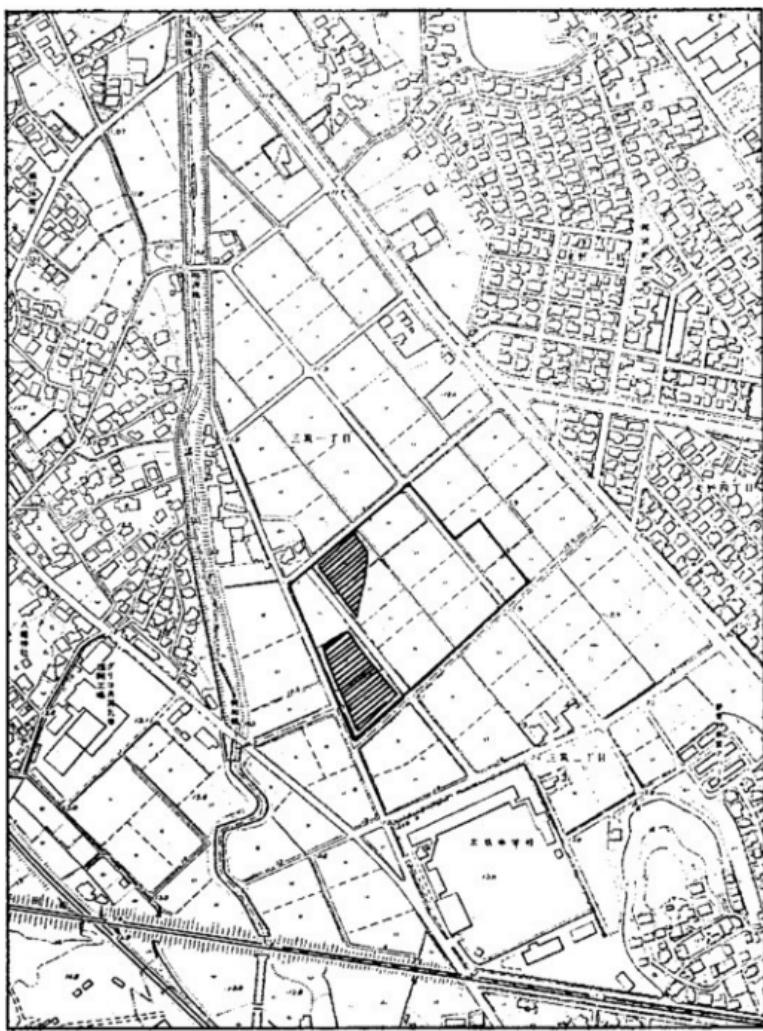
三筑遺跡をとりまく歴史的環境は旧石器時代よりはじめり、縁々と続いているが、特に弥生時代については一つの中心地域である。

旧石器時代の遺跡はきわめて数が少い。調査した遺跡として三筑遺跡の北方1kmに諸岡遺跡^①がある。諸岡遺跡の旧石器文化はナイフ形石器文化期のもので、主な出土遺物にはコア、ナイフ形石器、スクレイパー、トラピーズ、グレイバー、Uフレイクがある。また1979年度の調査では、細石核、銅石刃が検出されている。諸岡遺跡は福岡平野において唯一包含層が明らかにされた遺跡である。この他、板付遺跡からはナイフ形石器、トラピーズ、細石核が出土してい



第1図 週辺遺跡分布図 (1/25000)

- 1 三筑遺跡 2 板付遺跡 3 離間遺跡 7 福岡簡本遺跡



第2図 三景遺跡の位置と発掘区 (1/5000)

るが明確な包含層は明らかにされていない。三筑遺跡でも川の底から出土した石器の中に旧石器らしいものが存在するが、出土層位等疑わしいもので断定しかねるものがある。いずれにしても福岡平野における旧石器研究は今後に残されている。

縄文時代の遺跡もきわめて少く、板付遺跡、諸岡遺跡から縄文時代早期の押型文土器、石器が検出されている程度である。散発的に遺物が検出されているので今後に期待できよう。

弥生時代の遺跡は、旧石器、縄文時代の遺跡と比較して、数の上からいって急増する。三筑遺跡の北方1.5kmに所在する板付遺跡は日本における弥生文化発生期の遺跡として有名である。板付遺跡は台地上に径110m×80mの環濠をめぐらし、台地の周辺で水田經營を行っていた弥生時代初期の遺跡であり、最近の調査によって、弥生式土器の最古型式であった板付I式土器の下層に夜臼式土器の水田址を確認し、日本における水稻耕作の起源に重要な役割りを果していいたことが判明した。^⑨また板付遺跡と対峙する諸岡遺跡は板付II式土器に伴出して朝鮮系無文土器を多量に出土したことで著名であり、また二群に分かれて存在する甕棺墓地からは細形鋸刻、南海産貝製腕輪を出土している。三筑遺跡の南方1.5kmには弥生時代中期の甕棺より多量の前漢鏡を出土した著名な須玖岡本遺跡が存在し、弥生時代の一中心地をなしていたことは衆目の一致するところである。三筑遺跡の周辺において弥生時代の集落地の検出はないが、三筑遺跡の東西には低丘陵が北に向ってのびていて、将来的にこの地域に弥生時代の集落が発見されることは疑いない。三筑遺跡の水田遺跡が夜臼式土器の時期にはじまり弥生時代前期に存続していることは出土遺物から明瞭であり、今後その集落の調査が解明された時点には大きな成果が期待される。

三筑遺跡の中心をなす古墳時代の歴史環境はどうであろうか。古墳時代の集落としては板付遺跡から一部検出されているが、敷軒の住居址、および土器片があるのみであり、また古墳については諸岡の丘陵に数基の横穴式石室を内部主体とする後期古墳があるのみである。月隈丘陵に群集する後期の古墳とは対照的であり、平野部の人々の墳墓がいかなる状態におかれていったか興味ある現象である。この他、板付D-10a調査区で、流路に多量の木器、土器類が発掘されているが、現在のところ古墳時代の人々の住居地の発見にとぼしい。三筑遺跡にみられる水田址と整備された水利関係を考える時、将来的にこの時期の集落地が検出されることは疑いなかろう。

中世にいたっては、各所より散発的に遺物が出土しているが、まとまった調査例がないためその実態は不明である。今後、組織的な調査を実施することが急務であろう。

- 註① 山口謙治、横山邦輔他『板付周辺遺跡調査報告書1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集 1974年
- ② 山崎純男他『板付遺跡調査報告（板付周辺遺跡調査報告書5・1977～8年度）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1979年
- ③ 後藤直他『板付周辺遺跡調査報告書2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集 1975年
- ④ 横山邦輔、柳沢一夫『板付周辺遺跡調査報告書6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集 1980年

第2章 調査の概要

発掘調査は1978年10月から1979年5月までの約8ヶ月間を要した。その間、調査員の不足、あるいは度重なる雨や調査区内の湧水によって調査に困難を極めたが、多くの人々の指導と激励によって多大な成果を得て無事終了することができた。

調査は先ず、試掘によって同中学校移転敷地内の遺跡の有無の確認から始め、建設工事との関係から校舎建設地側（敷地南側）を第1調査区、運動場側（北側）を第2調査区として調査を進めていった。なお、運動場側の北西部の一角は建物の建設の予定がなく、今後の再検討を要する時の調査にゆだね、保存地区として保存の処置を講じた。

以下、調査の工程に従い調査概要を記すと下記のようになる。

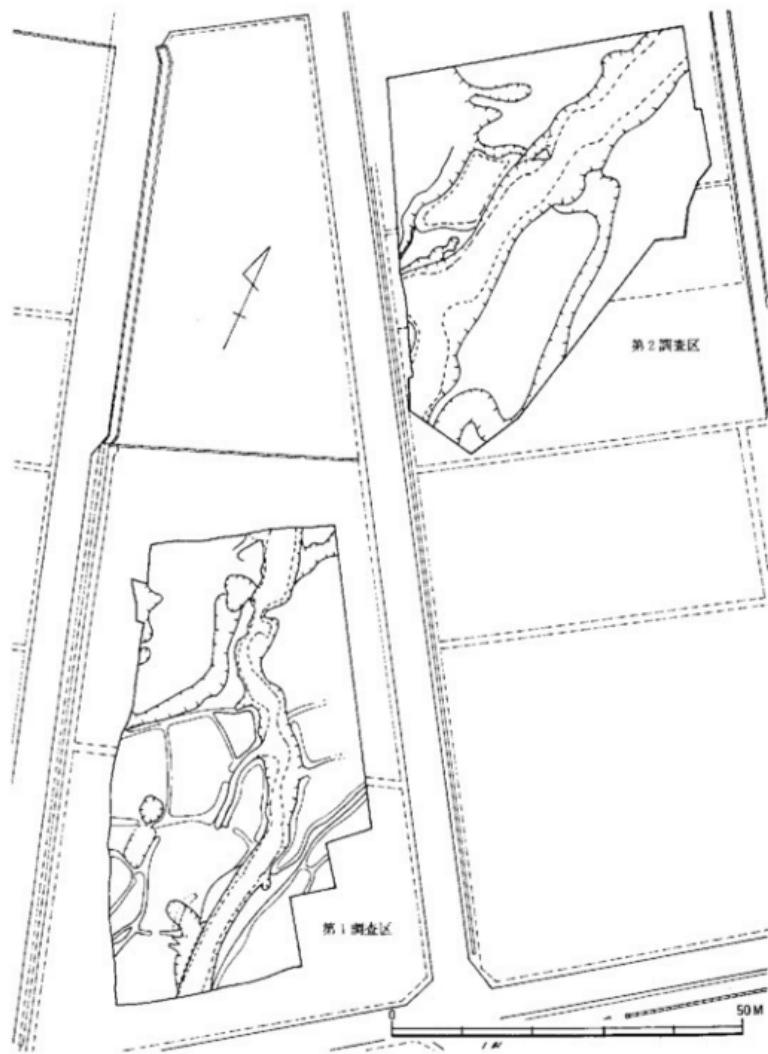
① 試掘調査

試掘調査は中学校移転敷地内の全面にわたって方眼を組み、重機によって試掘トレッセを掘削し、敷地全体の遺跡内容とその規模を把握するのを目的として実施した。試掘結果は、敷地内を対角線状に走行する溝および杭、矢板例を確認し、溝の堆積砂層より土器の高环破片を検出した。この結果より遺跡は古墳時代の溝あるいはそれに付随する遺構の存在が考えられるにいたった。また、遺跡の規模は中学校建設敷地の西側と北側に広がるもので、東南部は希薄であることが判明した。

② 第1調査区

試掘調査の結果を受けて本格調査を開始したが、土層その他の詳細な関係が明らかでないため、先ず、最初に中学校建設敷地西部の試掘トレッセにそって新たに、試掘トレッセを設定し断面調査を実施した。詳細な観察と検討を加えた結果、溝は人工的なものではなく自然流路、すなわち川であることが判明した。またその両側に出水による砂層の堆積が地表下60cmに認められ、その下層は凹凸の著しい有機質粘土層が水平に堆積していて、ある時期の水田耕作上であることが判明したので、調査期間等の関係から、この面まで、機械力にたよって排除することにして発掘を進めた。

第1調査区の発掘面積は2,200m²におよび機械による上部土層の発掘時から調査区は湧水が激しいためもあり、先ず最初に発掘区の中心部を北流する川の堆積土を発掘することより始め、川の両側の土層が安定するよう努めた。川は南へ狭いが北に行くに従って幅・深さとも増していき、現在同様に北流する川である。隣接して現在北流している諸岡川の旧河道とも考えられるが確認はない。川は、土層の変化、あるいは川幅、深さの変化、出土遺物により、川の時期が数次にわたることが推測できたが、それを時期別に発掘することは困難であり、川の堆積層より出土遺物を記録し、その時間的変遷を推測できるよう考慮した。川に発掘区のはば



第3図 調査区の配置と造構全図

中央を蛇行しながら北流し、発掘区の南端で川幅4m、深さ1m、北端で川幅6m、深さ1.5mを測り、下流に行くに従い川幅深さ共に増す。川には各所に用水のための井堰が設置されており、第1調査区内では南より第1～第4井堰が存在する。これらの井堰はすべてが同時代のものではなく、川の堆積状況あるいは、両岸に存在する水田との関連で、順次改築されてはいるが、ほぼ同一地域において作りなおしが行なわれている。第2～第4井堰はほぼ同一地区に設置されたものであるが、その埋没層および伴出遺物、レベルからして、第4井堰→第3井堰→第2井堰の順次が推測できる。第2井堰は伴出する供獻祭祀用と考える土御器の壺類からすれば五世紀代の所産であり、第4井堰は埋没土層から弥生時代までさかのぼる可能性もある。第1井堰は同一箇所で継続していた井堰と考えられ、井堰下流の深みからは井堰設置当初の頃のものと考えられる石包丁の出土がある。これら井堰と用水路との関係は後章において詳述するが、極めて整備されたもので、現在の水田における用排水課題と何ら變るところはなく、すでに5世紀以前から完備した水利関係が存在したことを把握できたのは重要な成果であった。川の両岸に存在する水田は、今回の調査で発掘区の南半部において14面（一部、破壊されて修復された水田とそれ以前の水田とが重複する）ほどの水田区画を確認あるいは推定することができたが、北半部においては上層の擾乱、あるいは発掘ミスによって明確に把握することはできなかった。南半部の水田も川の東側では、後世の削平によって、かろうじて耕作土が残存しているのみで、水田区画は用水路や水尻の存在からその規模を推定するにすぎない。川の南では、出土時における粗砂層の堆積が顕著なため、比較的良好な状態で検出した。水田面には一面に人の足跡、あるいは動物の足跡、耕作具による凹み等が検出できた。また畦畔も良好に存在していて、水口、水尻等の水利関係を充分に把握できる。完掘できた水田は3面（一部重複）で、他は発掘外に在るもの、後世の水路によって破損されている。完全な水田は1区画が100～160m²を測る。

また、各水田には小さな池（3m×3m～4m×5m）、あるいは水溜状の凹みが伴う新事実を確認した。凹みについて後章で考察を加えるが、水利、あるいは施肥との関連において興味あることである。水田址を確認できなかった発掘区北半部においても、これら水溜状の凹みは点々と所在するので、本来はこの地区にも水田の所在を考えることは無理ないものと思う。これら川の両岸に存在する水田はその耕作土を覆う粗砂層と川の堆積砂層との関連から5世紀代の水田と考えている。5世紀代の水田のさらに下層に水田耕作上が一枚存在することが断面観察によって確認できたが、畦畔等の存在は認められず、時間的制約もあり下層の水田発掘は断念せざるを得なかつたが、上の水田と大差ないものと考えられる。北半部において一部下面を発掘した結果、弥生時代の水路を確認したにとどまり若干の木製農耕具を得たが、遺構・遺物の残存状態は良好ではない。木製農耕具については量的に少ないが、第2区の資料も含め層位的にその変遷を把握できたのは意義深い。

以上、第1調査区の発掘では5世紀代の水路（川）・井堰・水田の三者間において水利関係を有機的に把握できたのは農業土木史上大きな成果を得たと考えている。

⑨ 第2調査区

第2調査区は第1調査区の成果を再証する目的で調査を始めたが、期待した成果は得ることができなかった。第2調査区は、全体にこの地域の地山層である八女粘土層が高く、表土層直下に地山層があらわれる所が大部分を占め、第1・第2調査区の地形が本来は南東部が高く、西側に順次下っていることが判明した。第1調査区から逆流する川は、第2調査区で大きく東に蛇行し、二つの流れに分岐する。東側の流れは第2調査区を横切り、西側の流れは一部が確認できるのみで発掘区外にでる。川の状態は第1調査区と変わることなく、弥生、古墳、中世の三つの大きな流路が觀察できるが、発掘するのは困難であった。井堰は二ヶ所に認められ、第5井堰は二本の大きな丸太を杭でとめたものであるが最下層に埋没していて弥生時代のものと考えられる。第6井堰は古墳時代のものであるが、第1調査区に存在していたものより残存状態が悪い。共にその水利関係は明らかにできなかった。川の南東岸には、第1調査区の第4井堰付近から引き込まれた付設水路と、それに付随する井堰を確認したが、後世（奈良～平安）の大規模な整地層があり水田区画等は破壊されている。この整地層は試掘調査の結果では中学校建設用地の南東部全域にわたってみられ、整地層からは古墳時代後期の遺物が多く出土し、一部奈良時代の遺物もみられるので、その時代の整地とみるとができるが、これらの整地がいかなる理由によって行われたかは今後の問題であろう。調査区北西部において、先述した西側の川の流れが廃絶した後に中世水田が形成されており、その一部を検出することができた。構造的には、水路より用水用の溝を水路から引いて、先年、板付遺跡で確認した夜臼式、板付I式土器の時期の水田址と極めて類似していることが注目される。

以上、第1調査区、第2調査区において若干異った調査成果を得たが、いずれも水田址の調査であり、その構造等の変遷を把握したことは重要であろう。また、井堰、あるいは水溜状遺構に伴う土器類は水田祭祀と大きく関係するものであり今後の類例の増加と検討に期待したい。

第3章 第1調査区の遺構と遺物

第1調査区から検出した遺構は、用排水の水路である川、川に設置された集水用の井堰4ヶ所、井堰より用水のため、あるいは排水のための付設水路3条、川の両岸に展開する水田15区画、および水田に伴う水溜状の凹み7ヶ所等で、いずれも有機的関連性を示す。いわゆる水田遺構である。時期的には古墳時代、5世紀を主とし、一部、弥生時代の遺構も含んでいる。

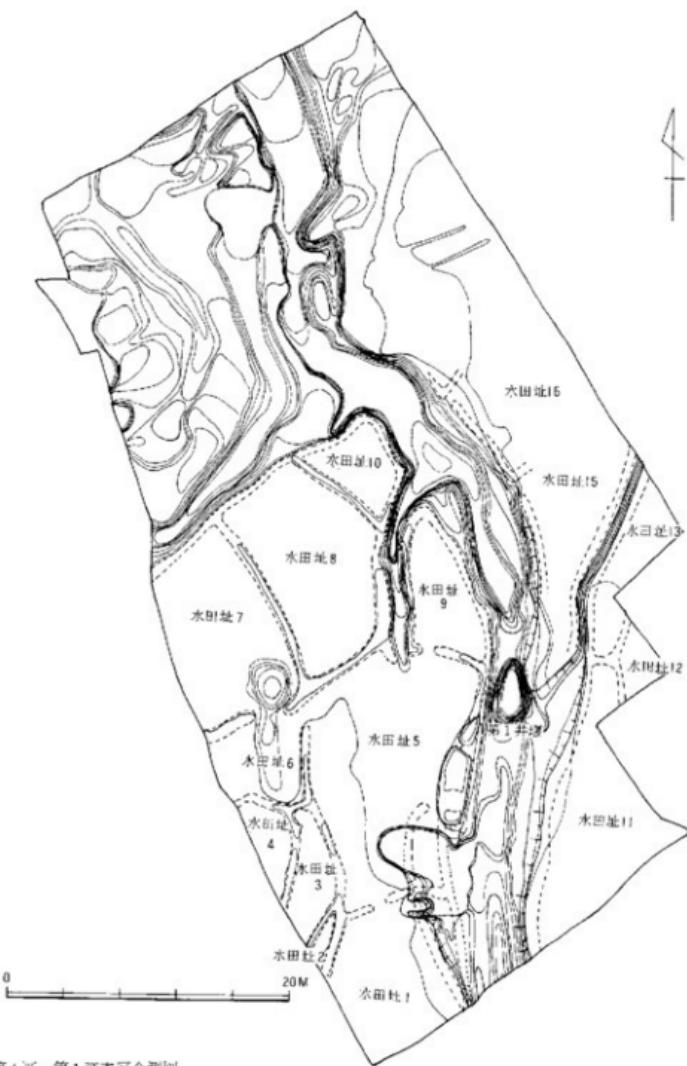
これら水田遺構は本来、個別的には存在しないもので、その関連性が重要視されるものであるが、本章では説明の都合上、各遺構それぞれについて個別的に詳述し、後章において全体的関連性について検討を加える。

1 川

(1) 流路の状況

調査区のほぼ中央を北流する自然流路で、本遺構の最も主要な用排水路である。後述するが、この川は大きくは三時期の流路を形成している。堀掘でそれを分離するのは困難であった。しかしながら、土壠断面の観察あるいは河道にその一部が残っている所があり、ある程度の復原は可能である。説明の都合上基本的な流路である弥生時代の川から詳述する。

まず弥生時代の川は1区で流路の長さ70m、大きく2ヶ所で蛇行している。確認した川の始点である調査区南端では川幅4m、深さ1mを測り、そこよりほぼ北に向って流路をとり、始点より25mの所で流路は大きく蛇行し流れの方向を南西にとる。この地点の川幅は約4mで始点の川幅と変化しない。第1蛇行地点までは川、あるいは両岸の状況は安定したもので、弥生～古墳時代を通じて変化がない。第1の蛇行地点より約25mで第2の蛇行地点があり、流れは再び北に流路をとっている。第2の蛇行地点と第1蛇行地点の間に古墳時代の水田址5より排水される付設水路2との合流点があり、この部分では川幅が広くなり弥生時代の川は破壊されている。また、第2の蛇行地点は南北部から流れてくる弥生時代の溝との合流点となっている。第2の蛇行地点から1区の川の終点である調査区北端までは20mを測る。北端の川幅は6m、深さ1.5mを測り、全体的に見た場合、下流に行くに従い川幅、深さ共に増していることがわかる。しかし、深さは部分的には大きな差異がある。始点より18mの位置にある第1井堰では、集水時における、水の落下によって生じた凹みがあり、この部分は長さ5mにわたって深みとなり井堰の上流とは約1mの落差を生じている。川の始点の川底の標高は約11m、終点の川底の標高約9.9mを測り、約1.1mの落差をもっている。川全体からみれば0.8度の勾配をもっている川になる。弥生時代の川の堆積は有機質の粘質土層で、砂の堆積は少い。上にのる



第4図 第1調査区全測図

古墳時代の川の堆積が粗砂層であるのと比較すると川の状態に大きな差があったことがわかる。

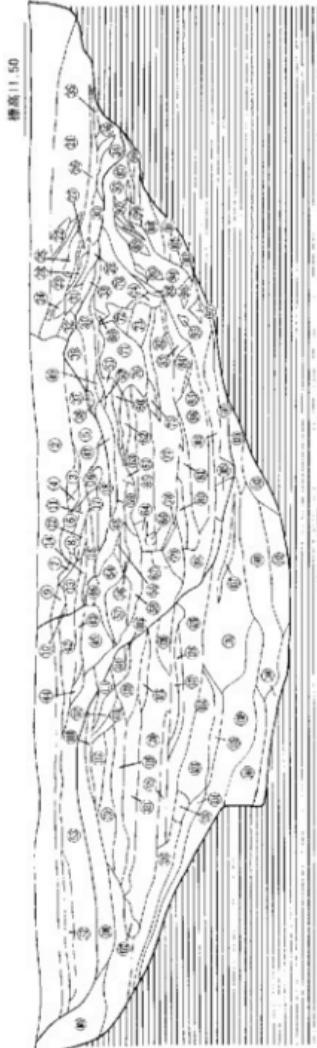
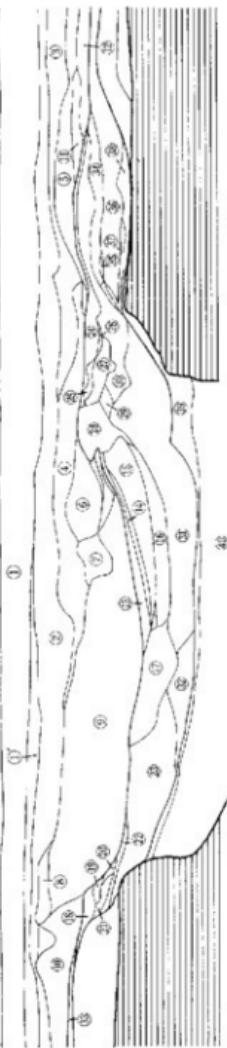
古墳時代の川は基本的に弥生時代の川と大きな変化はないが、川幅がやや狭くなる傾向にある。流路の長さ約70mを測る。川の始点である調査区南端では川幅4mと弥生時代の川と変化ないが、深さ約0.9mとやや浅くなる。川の始点より30mの地点に蛇行部分があり、この地点までの間はやや東に張り出し気味に湾曲し北流する。第1の蛇行地点では流路を北西に変え、次の蛇行地点までの約20mはやや北に張り気味に湾曲する。第1蛇行地点より約10mの所に水田址5に付設された排水用付設水路2との合流点があり、川幅は約5mに広がり、深さも増す。第2の蛇行地点では流路を北に変え、次の蛇行地点までは約10mを測る。この間に井堰の設置があり、2回にわたる井堰の構造がある。第3の蛇行地点では、流路を再び南西に変え、川の調査区北端にいたる。この間の距離は約10mである。川の北端の川幅は約5m、深さ1.3mで、弥生時代の川より浅くなっている。古墳時代の川は、弥生時代の川と異なり、粗砂層の堆積が顕著で、かなり川の流れがあったことがうかがえ、そのためもあり、川の護岸には特に注意がはらわれている。まず川の始点である発掘区北端部から約12mの間の川の西岸には45本の矢板が20m間隔で、畦畔の補強と護岸の意味で打ち込まれている。しかし、この矢板による補強も破壊されたことがあったとみられ、この矢板列により約2m西に後退して、10数本の丸太の杭列を打ち込み再補強を行なっている。この間の關係は水田址の説明の項で再度詳述する。

また、第2付設水路の合流点にも、同様の護岸作業が行なわれている。この場合の護岸は付設水路の流れが直角的にぶつかる対岸（東岸）の下流に丸太杭を數本打ち込み、横木を渡している。水流との関係が強く意識されているのである。さらに、井堰の周囲も注意が払われている。特に井堰下流は、集水時における水の落下によって下流部分がえぐられるために岸壁の崩壊を防ぐ配慮がみられる。第2、3井堰の下流東岸には20数本の丸太杭を50cm間隔で打ち込み護岸としている。

中世の川はさらに川幅を狭め、深さも浅くなる。流路の全長は75mで蛇行の状況は弥生、古墳時代よりも激しい。川の始点である調査区南端では川幅3.2m、深さ60cmを測る。川の始点から25mの地点に蛇行部分があり、この間はやや東に湾曲しながら北流する。第1の蛇行地点では大きく流路を北西にとり、ほぼ直線的に第2の蛇行点までの約20mを北流する。この間において、古墳時代の水田址を一部切断している。この部分の川幅は約3.5mを測る。第2の蛇行地点ではさらに流路を西北西に変え、10m北流し、第3の蛇行地点では流路を再び北にもどし、発掘区北端までの間約20mはほぼ直線的である。中世の川は、前段階の河道を基調しながらも、一部では蛇行が著しいために、旧河外まで走っている所がある。

(2) 川の層序（第5図）

標高11.50



第5圖 第1・2調查區沿河川之橫斷面圖

川にはその埋没過程、あるいは流路の変更等によって概略3時間の水路が存在していたことは先に指摘した。本項では川の断面実測図を検討しながらその関係をみていきたいと思う。第5図に示した川の断面実測図は、1が第1調査区南端、川の確認始点の断面、2が第2調査区、川の中位の断面である。

1の層序関係を詳述すると以下の如くなる。（図の上層番号と本文土層番号は同一である。2についても同様である。）

第①層、約20~25mの厚さを有する現水田耕作土。第①'層、5cm前後の現水田床土であるが西の部分は存在しない。第②層、淡灰褐色粗砂層、川の部分は厚さ20cm前後であるが、川から離れるとやや薄くなる。出水によって生じた層と考える。第③層、黄褐色細砂（粘質）層。第④層、灰褐色微砂層。第⑤層、灰褐色泥土粗砂層となっていて、現耕作土を除いた第④~⑤層が中世の川（水路）および水田を覆う層であるが、水路の土手は東、西岸で差があり、東岸が約15cm高い。中世水路は、第⑥層、灰褐色細砂層。第⑦層、黒灰色粘砂層。第⑧層、灰色粗砂層。第⑨層、灰褐色粗砂層（鉄分が多く含む）の堆積によって埋まる。東岸の第⑩層、灰褐色細砂層。あるいは西岸の第⑪層、灰褐色細砂層。第⑫層、黄褐色細砂層（一部粗砂も含む）は中世水田の底跡、および水田耕作土と考えられる。

中世水路の下層にみられる古墳時代の川は川幅4.6m、深さ0.8mを測る。川は、第⑬層、暗灰色微砂層。第⑭層、暗灰褐色色砂層。第⑮層、暗灰褐色細砂層。第⑯層、暗灰褐色粗砂層。第⑰層、黒暗灰褐色粘質砂層。第⑱層、灰色粗砂層。第⑲層、暗灰色砂層。第⑳層、赤褐色粘質砂層。第㉑層、黄褐色粗砂層。第㉒層、暗灰褐色粗砂層。第㉓層、淡灰褐色砂層。第㉔層、暗黑灰色砂層。第㉕層、灰色粘質砂層。第㉖層、淡褐色粗砂層。第㉗層、暗黑灰色砂層。第㉘層、灰黑色粘質砂層。第㉙層、黑褐色粘質砂層。第㉚層、灰色粗砂層。第㉛層、淡灰色砂層の堆積によって埋まっている。東岸の古墳時代の水田は、中世水田によって削平されていて、耕作土と考えられる。第㉛層は、灰色微砂層が一部残っているにすぎない。西岸では、岸の部分が川によって洗われていて、一部、複雑な層序関係を示しているが、基本的には安定した状態を保っている。西岸の層序は、第㉛層、暗灰褐色細砂層。第㉕層、黄褐色砂層。第㉖層、淡黑灰色微砂層（粘質は少い）。第㉗層、暗灰褐色細砂層。第㉘層、暗灰~黒灰色細砂層（粗砂と黒灰色粘質土をブロックとして含む）となっており、川の近くの層は、出水時の擾乱や疊合の構造によるものと思われる。当時の水田耕作土は、第㉙層の暗灰褐色微砂層で、上面に無数の足跡等の凹みが存在する。東岸は西岸より約10cm高いが、東岸の中世水田の造成によって削平されたことを考えればその差はまだ大きかったと考える。

弥生時代の川は、川幅4.1m、深さ1.1m以上（湧水が激しく川底部まで尖削不可能であったが、1.4mを越えることはない。）を測る。川は第㉛層、暗褐色粘質砂層。第㉕層、厚さ50cm前後の黒灰色粘質土層の堆積によって埋まる。東岸の水田耕作土は、第㉖層、黒灰色粘質土層

(厚さ40cmあたり、西岸では、古墳時代の水田耕作土の下に、第④層、黒灰微砂層(粘性はない)を夾み、東岸同様の第⑥層が存在する。地山は灰色の粘土層によって形成される。

2の層序関係を詳述すると以下の如くなる。第2調査区川は、第①、①'層の水田耕作土、および床土は這様で除去したもので、層序は第②層より始まる。第2調査区は後世の削平により表土下にすぐ川を確認した。

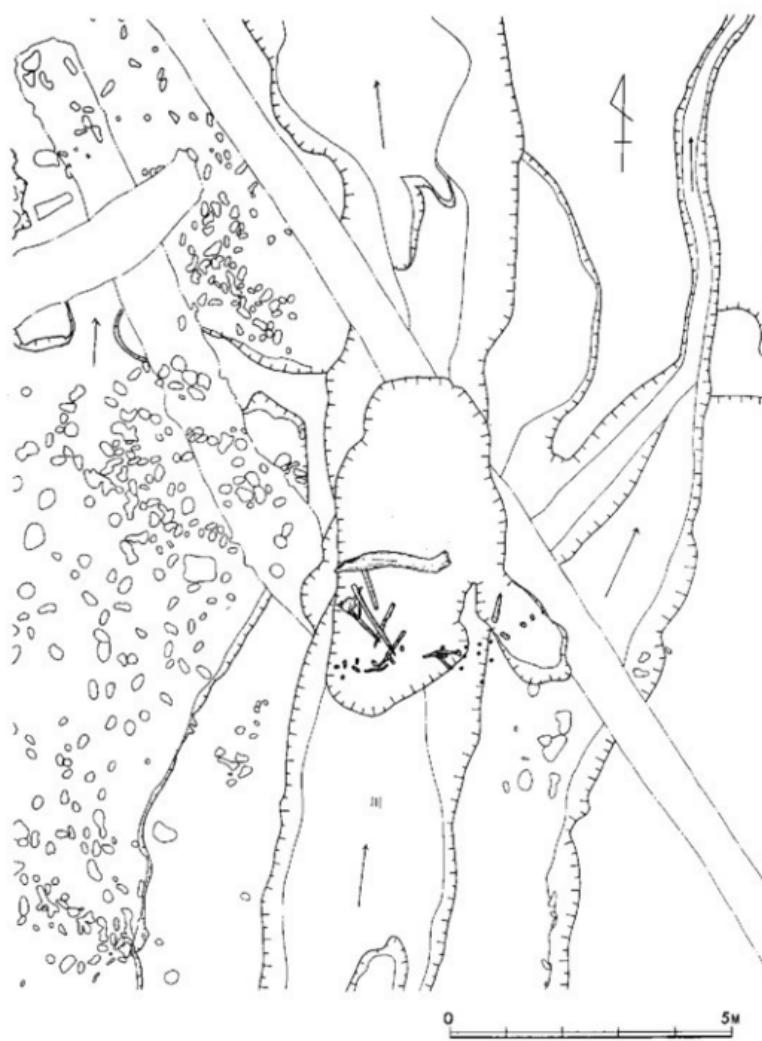
中世の水路(川)は、幅2.2m、深さ0.5mを測るが一時期は出水等によって北岸部分に流路を変えていたことでもあったと思え、北岸の部分は人工的に埋め土によって護岸補強がなされている。川を埋める堆積土は上層より、第③層、灰褐色土層。第④層、暗灰色粘質土層。第④層暗灰色粗砂層。第⑤層、暗灰色粘質土層。第⑥層、褐色粗砂層。第⑦層、茶褐色土層。第⑧層、明褐色粗砂層。第⑨層、暗灰色粗砂層。第⑩層、暗灰色土層。第⑪層、淡黄色粗砂層。第⑫層明褐色粗砂層。第⑬層、暗褐色粗砂層。第⑭層、黑褐色粗砂層。第⑮層、褐色粗砂層。第⑯層第⑰層、淡灰色粗砂層。第⑯層、灰褐色粗砂層と、ほぼ粗砂層と黒色土層の互層となっている。川の両岸は共に水田であるが、先述したように、北岸部は人工的埋め土によって護岸している。この両岸の水田は(弥生～中世)の外は一段高くなっていることに注意しておきたい。南岸の水田は第⑯層の厚さ15cm前後の茶褐色上層を耕作土とし、下に第⑯層、厚さ5cm前後の酸化鉄の沈殿した床土がある。川の範囲外は水田が一段上がる所以、中世水田の幅は3m弱のせまいものと想定できる。北岸は、南岸同様に、第⑯層の厚さ15cm前後の茶褐色土層を耕作土とし、下に第20層、厚さ5cm前後の酸化鉄の沈殿した床土があるが、その下部は川の搅乱堆積と人工的埋土による層堆積を示す。上より、第⑯層、灰褐色粘質土層(部分的に白色粘土層のブロックを含む)。第⑯層、茶褐色上層。第⑯層、褐色上層(一部茶褐色上層のブロックを含む)。第⑯層、茶灰褐色粘質土。第⑯層、茶褐色土層。第⑯層、黄褐色砂層。第⑯層、明灰色粘質土層。第⑯層、褐色土層。第⑯層、茶褐色粘質土層。第⑯層、灰白色粘質土層。第⑯層、暗灰色砂層。第⑯層、明褐色土層。第⑯層、明茶褐色粘質土層(一部砂を含む)。第⑯層、淡灰色粘質土層。第⑯層、灰色粘質土層。第⑯層、淡灰色粘質土層となっている。川にそった部分より細い土層を示していて、護岸の配慮によると考えられる。水田は幅2mと狭い。

古墳時代の川は、川幅4.2m、深さ約1mを測る。川を埋める堆積層は上より以下の如くなる。第⑯層、黒灰色砂層。第⑯層、明灰色粗砂層。第⑯層、明灰色粗砂層。第⑯層、黄褐色粗砂層。第⑯層、灰褐色粘質土層。第⑯層、暗灰褐色土層。第⑯層、明灰褐色粘質土層。第⑯層、暗灰色粘質土層。第⑯層、灰褐色砂質土層。第⑯層、暗褐色粗砂層。第⑯層、暗褐色土層。第⑯層、暗灰褐色粘質土層。第⑯層、點褐色粗砂層。第⑯層、褐色粗砂層。第⑯層、明褐色粗砂層。第⑯層、灰褐色粗砂層。第⑯層、暗灰褐色粗砂層。第⑯層、褐色粗砂層。第⑯層、灰褐色粗砂層。第⑯層、明灰色粘質土層。第⑯層、暗褐色粗砂層。

層。第⑤層、褐色粗砂層。第⑥層、明灰色粗砂層。第⑦層、灰色粗砂層。第⑧層、黑褐色粗砂層。第⑨層、黑灰色粘質土層。第⑩層、灰褐色粗砂層。第⑪層、暗灰色粘質土層。第⑫層、明灰色粘質土層。第⑬層、青灰色粘質土層。第⑭層、淡黃灰色粗砂層。第⑮層、淡黃明灰色粗砂層。第⑯層、黑灰色粘質土層。第⑰層、黑褐色沙層。第⑱層、暗灰色粗砂層。第⑲層、明灰色粗砂層。第⑳層、明灰色粗砂層。第㉑層、明褐色粗砂層。第㉒層、褐色粗砂層。第㉓層、暗灰褐色粗砂層。第㉔層、灰褐色粗砂層。第㉕層、黑褐色粘質土層。第㉖層、明灰褐色粗砂層。第㉗層、灰褐色粗砂層。第㉘層、明灰褐色粗砂層。第㉙層、黑灰色粘質土層。第㉚層、明灰褐色粗砂層。第㉛層、暗褐色粗砂層。第㉜層、褐色粗砂層。第㉝層、灰褐色粗砂層。第㉞層、明灰褐色粗砂層。第㉟層、褐色粗砂層。等㉙層、暗褐色粗砂層。第㉛層、灰褐色粗砂層。第㉜層、黑灰色粘質土層。第㉝層、黑灰色粗砂層。第㉞層、灰白色粗砂層。第㉟層、灰褐色粗砂層。第㉙層、灰白色粗砂層。第㉜層、灰白色粗砂層。第㉞層、灰褐色粗砂層。第㉟層、明灰褐色粗砂層。川の堆積土のほとんどは粗砂層によって占められる。

弥生時代の川は、川岸（北岸）を古墳時代の川によって破壊されているが、復原川幅は約6m、深さ1.8mを測る。弥生時代の川の堆積土は上層より以下の如くである。

第Ⅵ層、黒褐色粘質土層。第Ⅴ層、暗灰褐色土層。第Ⅳ層、黒褐色砂質土層。第Ⅲ層、黒灰色砂質土層。第Ⅱ層、暗茶褐色細砂層。第Ⅰ層、淡黑色粘質土層。第Ⅲ層、暗灰色粘質土層。第Ⅳ層、黑色粗砂層。第Ⅴ層、黒褐色粘質土層。第Ⅵ層、黒褐色粗砂層。第Ⅶ層、灰茶褐色粗砂層。第Ⅷ層、暗灰褐色粗砂層。第Ⅸ層、黒褐色粘質土層。第Ⅹ層、暗灰褐色粗砂層。第Ⅺ層、灰褐色粗砂層。第Ⅻ層、黑褐色粘質土層。第Ⅼ層、暗灰褐色粗砂層。第Ⅽ層、暗黑色粗砂層。第Ⅾ層、黑褐色粘質土層。第ⅲ層、淡灰褐色粘質土層。第ⅳ層、暗灰色粗砂層。第ⅴ層、黑灰色粘質土層。第ⅶ層、淡灰褐色粘質土層。第ⅷ層、暗灰色砂質土層。第ⅸ層、淡黑色粘質土層。第ⅹ層、黑灰色粘質土層。第ⅻ層、黑色粘質土層。第ⅼ層、淡黑色粘質土層。第ⅽ層、暗灰色粘質土層。第ⅾ層、淡黑色粘質土層。第ⅿ層、暗灰色粘質土層。第ⅿ層、淡黑色粘質土層。第ⅿ層、暗灰色粘質土層。第ⅿ層、暗灰色粗砂層。第ⅿ層、暗灰色粘質土層。第ⅿ層、青灰色粘質土層。第ⅿ層、暗灰色粗砂層となる。弥生時代の川床の堆積は黒灰色粘質土層の堆積が多く、上部の古墳時代の川の堆積層と比べて対象的である。



第6圖 第1井壁と用排水關係実測図

2 第1井堰と出土遺物

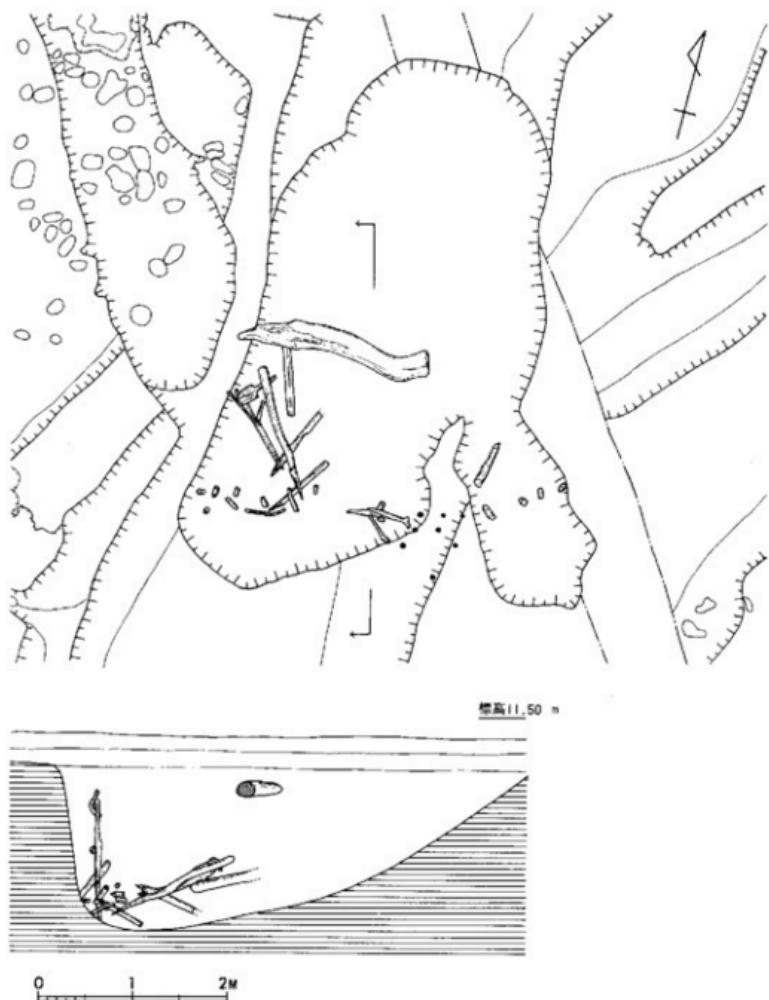
① 第1井堰（第6・7図）

第1井堰が構築されている地点は、発掘区の南端、川の始点より北に約18mの地点である。同地点の川幅は最大で約6m、常時水路となっている部分は約3mを測る。井堰は水流に直交して打ち込まれた杭列に横木を組み堰とする一般的な構造をもつ。本遺跡の中では比較的保存の状態の良いもので、以下、この井堰の構造、水利関係について詳述する。

井堰の設置された地点の東岸には井堰と平行して長さ2.3×1.1mの堰の下流で川と連続する掘り込み部分がある。その掘り込み中央部分にも井堰の杭列は延長しており、この掘り込み部分と井堰は同一構造物として存在していたことが想定できる。現存する杭は一部2列に並び23本が打ち込まれている。井堰の下流には、杭が抜けたり、流水によって倒された状態で杭材が横に重なりあっており、元来はまだ多量の杭が打ち込まれていたことがわかる。横木として組み込まれたと思われる丸太材もさらに下流に横たわって存在する。現存する杭は上部が腐食して元来の長さは不明であるが、現存するものでも1.2m以上を測り、流された杭の中には1.5m以上のものも存在する。横に展開する水田の畔壁の高さ等から推測すると元来は2~2.5mの杭の使用が考えられ、この構造を水力から守るためにさらに多量の杭材が必要としたと考えられる。堰のやや上流から下流にかけて川底が深くえぐられた状態は、まさに、この井堰と流水の力との争いの結果と思われる。杭に使用された木材の同定結果を合せると、掘り込み部分（一列）の杭列4本のうち2本がクヌギで他は不明、川の部分では前後二列に打ち込まれた杭列のうち、上流側の10本中8本がクヌギで他は不明、下流側は9本中3本がシノノキ、1本がカシ、他は不明という杭列にする杭材の種類に相違があることが知られる。これは当初、クヌギの杭を打ち込み堰を構築し、後の補強時にシノノキ・カシが使用されたとみることもでき、堰は數次にわたって補強、堅固にされていたことが推測できる。

ここで、注意しておきたいのが、先に述べた井堰横の掘り込み部分である。杭列の延長は先に指摘したが、杭材の種類からも井堰構築当初から調達した構造として設置されたとみるのが妥当であろう。構造的には川の杭列は2列で間隔が密であるのに対し、掘り込み部分の杭よりは一列で間隔はやや粗である。また杭列は全体的にみれば一直線につらなるが、川と掘り込み部分で区別すれば川の杭列はS-85°-W、掘り込み部分はS-44.5°-Wを示し差異がある。

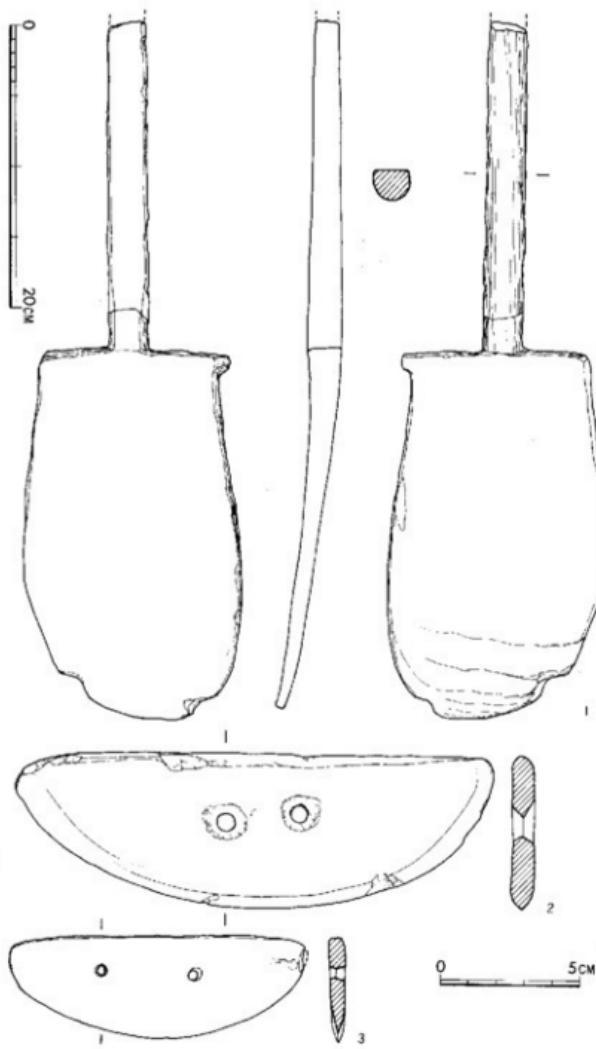
水の流れから考えれば、掘り込み部分の杭列は川の杭列と比較し、水圧を回遊する方向にあり、また、この杭列との延長には第1付設水路が存在する。この付設水路は、第1井堰と関連することは造作の発掘状況から肯定できるが、堰付近で水流のため擾乱が激しく確認を得ていない。このことは、また、この掘り込み部分の用途と深く関連するものと考えられる。すなわち



第7図 第1井壁実況図

ち、この掘り込み部分と杭列は、第1井堰で集水した水を一時的に落す調整的な補助水路を兼ね、第1付設水路へ引水する場合の水量調整を行っていた可能性を認めることができるのである。同様の施設は第6井堰にも存在する。

では、このような構造をもつ第1井堰と水田との水利関係はどのようなものであったろうか。第1井堰に集水された水は先に指摘したごとく、第1付設水路に引水され、用水路の西側の水田の灌漑に、また第5水田址の水は堰の上流の水口と第1水溜状造構横の水口から直接引水



第8図 第1井堰出土遺物実測図

している。また5'の水田堰のすぐ上流の水口から引水され、他の5'、6'、7'、8'、9'、10'の水田の灌漑を行っていたと想定される。これらの水田の灌漑とは別に第1井堰の上流部、第5'、5'水田に伴う水溝状通路との関係も考慮しておかねばならない。

(2) 出土遺物（第8図）

第1井堰に伴う遺物は堰の下の杭材に亘り合って出土した鎧1点と、堰のたまりから出土した石包丁1点がある。また、石包丁の関連上第2調査区第3付設水路井堰付近の川岸から出土した石包丁も合せて紹介する。

1は鎧で、カシを素材とし鎧身、柄が其本からつくりだされた細形をしている。全体に磨滅が著しい、加工痕等は消滅して観察できない。本来の姿は良く残しており柄部の約半分を失却しているにすぎない。鎧身は柄部からわずかに鶴曲し刃部に向って湾くなっている。刃部は使用磨滅により丸くなり右側は使い減りが激しい。柄は直径2.6cmの断面円形をなす。現存長50.2cm、鎧身長26.2cm、最大幅15.5cmを計る。2は大刀の外鶴刀の半月形をなす石包丁である。孔は2孔で、両面から敲打によって穿孔され、後に研磨される。孔間は孔の中心軸間2.5cmを計る。全体によく研磨されているが、一部に敲打痕を残す。刃部は両刃でよく研磨されている。石包丁の中央部の刃は使用による使い減りが激しい元來の形状は三角形に近いものである。弥生時代前期の石包丁と考えられる。長17cm、幅5.5cmを計る。石材は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスを使用する。3の石包丁は2と同様に外鶴刀の半月形石包丁であるが、極めて小型である。調刀で、体面、背面、刃部共に研磨後に入念に研磨している。穿孔は両面から行われる。孔間は3.2cm、赤紫色凝灰岩ホルンフェルスを素材とする。長10.5cm、幅3.7cmを計る。形状、その他からみて2より後出のものである。

3 第2・3井堰と出土遺物

(1) 第2・3井堰（第9、10図）

第2・3の井堰が構築されている地点は、発掘区の北端、川が発掘区の壁に消える終点より南に約10mと8mの地点で、第2井堰と第3井堰は約2mの間隔をもって位置する。第1井堰とは約30m離れている。同地点の川は、第2井堰の上流、約2mの所で川幅を一旦狭め、再度井堰部で川幅を広げている。川幅は狭い所で約3m、広い所で約5mを測る。井堰の構造は第1井堰の構造と全く同じで水流に直交して打ち込まれた杭列に積木を組んだものであるが、第1井堰に比較し、その残存状態は悪い。

以下、これら、二つの井堰の構造、水利關係について詳述する。

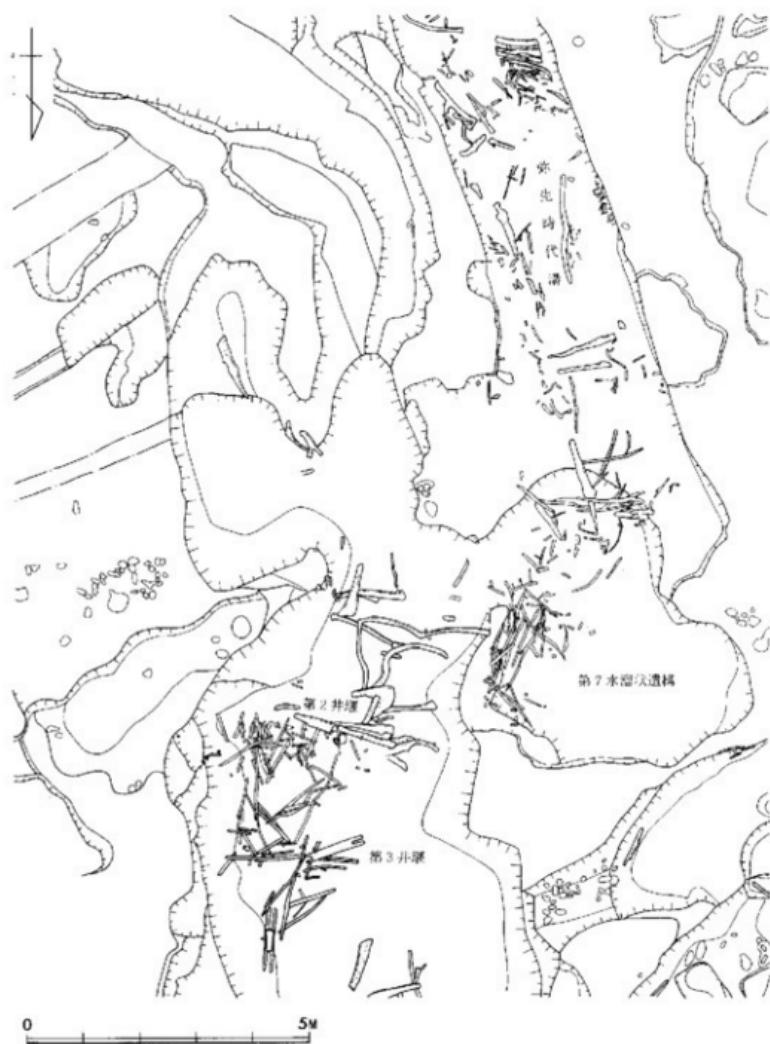
先ず、これら隣接する井堰の関係を明らかにしておきたい。これら二つの井堰は、設置地点

も近く、構造的には同様の性質を維持している。また、同遺構に堆積する流木、あるいは堰構築材の流れは両堰にまたがり、それら木材の中に出上する供獻用土師器類は大きな時間的差異はなく、両者をもって、一つの井堰構造とみることも可能である。しかしながら、両遺構に整然と存在する杭のレベル差（杭の上半部は腐蝕のために明らかにできないが、打ち込まれた杭の先端のレベルはほぼ遺構ごとに一致していて、第3井堰の杭の打ち込みは第2井堰より約30m下位にある。）や、両者の水利関係の差異は、この井堰は時間的にはあまり差のない別個の遺構とみるのが妥当性のあるものと考える。すなわち、第3井堰が廃棄ないしは破壊された後、第2井堰が構築されたと考える。この関係は後述する第4井堰との間にも成立するものと思われ、井堰の時期的変遷は第4井堰→第3井堰→第2井堰の順位で設置されたと考えられる。

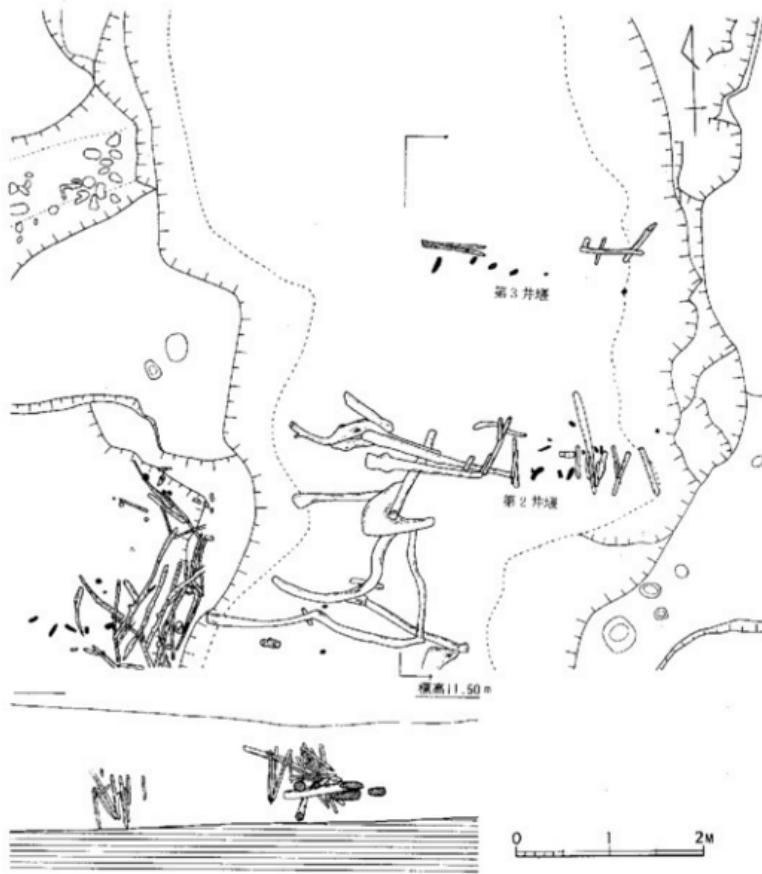
第2井堰は連続して並列する井堰の中では最も新しいものと考えられる遺構で、三者の中では最も残存状態が良好である。堰は水流に直交し打ち込まれた杭31本がほぼ二列に現存している。また、横木として組み込まれた丸太材と考えるもの数本が西岸部分に存在するが、杭との関連性を充分把握することはできなかった。杭は水流、水圧のため頭位を川下におくものが多いが、その逆に他の杭と交差させる杭も若干存在し、その補強策を知ることができる。杭材として使用される木材は、シイ、カシ、カワブキ、ミズキ、サカキ等でシイが最も多いが、第1井堰で認められたような材質による使い分けはない。杭の現存長は0.8~1m前後であるが、水田面の標高等からすれば、本来は1.4~1.6mの長さのものであったと考えられる。杭の打ち込まれた先端部がほぼ一定しており、標高10.25mに集中するが、この部分は弥生時代の川底より上にあり、川の堆積がかなり進んだ段階に設置されていたことが判明する。このことは伴出する土師器等からも確認されるところである。この堰で集水された水利関係は、東岸部で明確に確認できず、また西岸部でも明確な付設水路は確認できないが、堰のすぐ上流に第7水溜状遺構が存在し、その川岸に面した部分には杭と横木を組み合せ堰状の遺構を設置しているので、第1井堰に見られる第1水溜状遺構と同様にこの水溜状遺構に引水したことが想定できる。

第3井堰は最も残存状態が不良で、その大部分が破壊されている。また、構造的にはすぐ横に設置された水路との関係を観察すれば第3井堰よりも、第1井堰との近似性を指摘できるが、明確に把握することはできなかった。付設水路との関係は第4井堰の項で再度ふれたい。

川に設置された堰は水流に直交して打ち込まれた杭9本が一列に並び、一部横木も存在する。杭材は9本中6本がシイで他の3本は不明であるが、第2井堰と比べれば材の選択がみられる。杭列はわずかに頭位を川下にふるがほぼ垂直に立っており、杭先端部は標高10mの弥生時代の川底近くに集中していて第2井堰とは25cmの差がある。杭の現存長は60cm前後であるが、本来は1.5m以上の長さが推定される。この堰で集水した水利は第2井堰同様に第8水溜



第9図 第2・3井眼第7水溜状遺構と排水關係実測図



第10図 第2・3井堀実測図

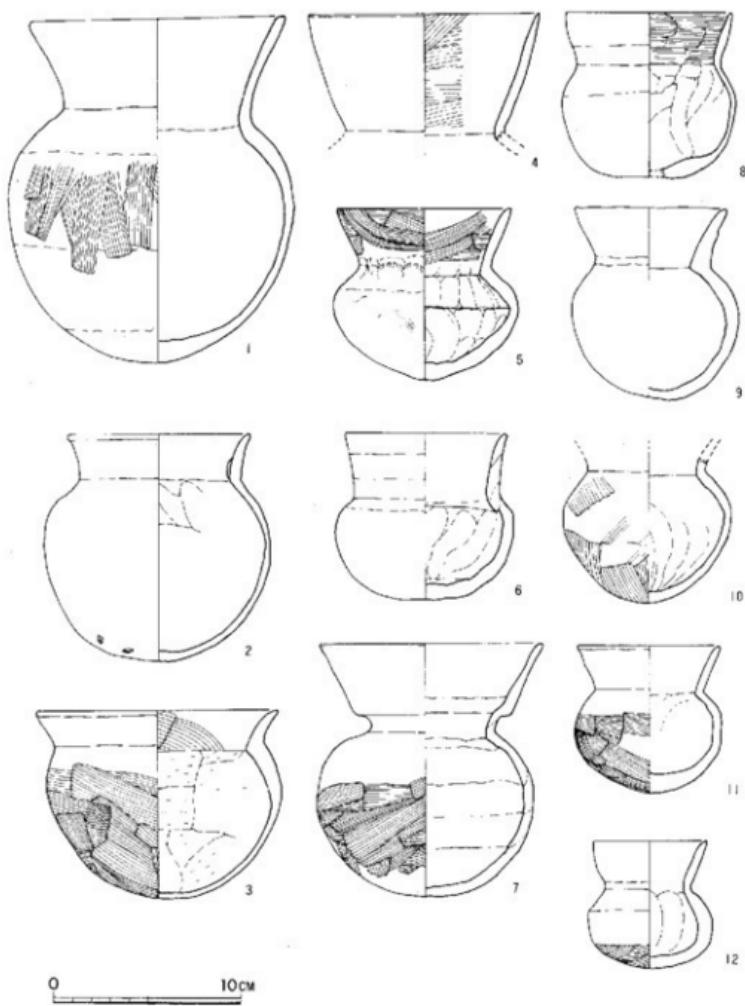
状造構への引水と付設水路への引水が考えられる。

(2) 出土遺物（第11図）

第2・3井堀より出土した遺物には、土師器、木器（建築材）がある。木器については調査時あるいは後に乾燥してしまい固化することはできなかったことが懸念である。土師器は大部分が完形品で、破片は少く、井堀に対する祭祀行為を想定させる出土状況であった。以下、土

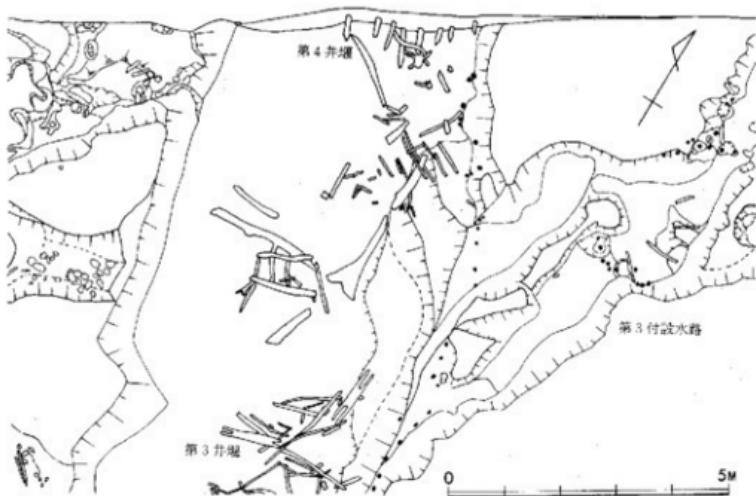
器について詳述するが、7の土器は第3付設水路の杭列に横たわって出土したもので、ここであわせて説明する。

1は口径13.8cm、器高18.6cm、胴部最大径15.4cm、頸部径10cmを計る中型の壺形土器である。球形の胴部に外反する口頭部を付した器形を有する。外面の胴上半部から口縁部にかけてススの付着が著しい。器体外面の調整は、下地として刷毛目調整が行なわれたと思われる肩部に縱方向の刷毛目が右まわりに連続して施されているのが観察できるが、後に胴上半部と下半部は細い条線状の工具（板材か？）で消している。口径部は横ナデによって消す。内面の調整は胴部においては内底部に指による凹凸が若干存在するが、全体に丁寧な左まわりのヘラ削りを施す。口径部は横方向の刷毛目を横ナデによって消している状況が観察できる。胎土には砂を含む良質の粘土を使用し、焼成は堅緻、色調は灰褐色～黄褐色をなす。2は口径9.8cm、器高12.1cm、頸部径8.6cm、胴部最大径はやや上方にあり12.1cmを計る。球形の胴部に口頭部を付す。口縁端部は外反する。器体外面にススの付着が著しい。底部付近に2粒の御庄痕を認める。外面の器面調整はススのため判別しがたいが、細い条線をもつナデがみられる。口径部は下地に刷毛目を施した後、横ナデで調整している。胴内面は下半部が横方向のヘラ削りを左まわりに丁寧に施し、上半部は下から上にかきあげるヘラ削りによって生じた粘上クズが付着する部分がある。口頭部内側は横方向の刷毛目を下地とし、横ナデを施す。胎土は精良で焼成は堅緻、黄褐色～黒灰色をなす。3は口径12.9cm、器高10cm、頸部径11.3cm、胴最大径は上半部にあり12.6cmを計る。やや尖り気味の球形の胴に強く外反した口頭部を付した小型の鉢形土器である。器体外面の調整は胴部が斜方向（左→右下）にかくやや荒い刷毛目を右まわりに底部に向って渦状に施す。肩部、口径部は下地に刷毛目痕があるが横ナデで消す。内側は丁寧なヘラ削りを、内底は不定方向、上半部は横（右→左）に右まわりに施し、頭部に尖い稜線をつくり出す。口頭部内側は斜方向の刷毛目の上を横ナデする。胴下半に黒斑がある。胎土には細い砂粒を混入する。焼成は堅緻で黄褐色～黒褐色をなす。4は口径12.5cm、頸部径8.6cmを計る中型の直口壺の口頭部破片である。器体外面は横ナデ、内面は横方向の刷毛目で調整する。頸部から、胴部にかけて黒斑がみられる。胎土は精良で、焼成堅緻、灰褐色をなす。5は口径9.3cm、器高9.2cm、頸部径7.1cm、胴部最大径9.9cmを計る。胴部は扁平な球形で底部がやや尖る。頸部中央に内傾を示す粘土接合部があり、そこが胴の最大径を示す。口頭部はやや外傾に付される。外面の調整は胴部が下地に刷毛目を施し、上からナデによって消している。頭部は刷毛目の上をヘラで押さえている。口頭部は内外面とも細い横方向の刷毛目で調整する。胴部に黒斑がある。内底部は指による凹凸が著しく、胴中位を境として上下は差異がある。また、頭部近くをわずかにヘラ削りするため頭部の内側に稜線が明瞭である。胎土は精良で焼成は堅緻、黄褐色をなす。6は口径8.7cm、器高9cm、頸部径8cm、胴部最大径9.6cmを計る。半球状の胴部にはほぼ直口する口頭部を付し、口頭部と胴部は1対1の割合である。肩部は明瞭で段がつ



第11図 第2・3井塚出土遺物実測図

く。底部は不安定な平底で、体部外面はナデあるいは荒い研磨によって調整している。全体に手づくねの土器でいびつである。口頭部には粘土の接合痕が残る。粘土帯は内傾に接合される。内面の整形は指によるもので凹凸が著しい。胎土は精良な粘土を使用し、焼成は堅緻、黄褐色をなす。7は口径12cm、器高13.5cm、頭部径6.6cm、胴部最大径11.5cmを計る。球形の胸部に短い直立する頸部を付し、口縁部は段を形成して、外傾しながらたちあがる二重口縁の小型壺である。段は外面では明瞭であるが、内側ではゆるく湾曲する程度であり、二重口縁の壺でも最も後出するものである。外面の器面調整は胴下半部が細い刷毛目を横ないし左さがりの斜方向に右まわりに施している。胴上半から口縁にかけては下地に刷毛目を施し、上からヨコナデで刷毛目を消している。胴内面には粘土の接合部が観察できる。荒いヘラ削りが施されるが詳細不明。胎土は石英砂を含むが良質で、焼成は堅緻、灰黄色をなす。8は口径8.9cm、器高8.9cm、頭部径7.7cm、胴部最大径9.9cmを計る。底部は不安定な平底で球形の胸部に外傾する口縁部を付した型形を有する。外面に黒斑がある。口頭部内外面は浅く細い刷毛目を下地とし、その上をヨコナデする。胴部内面はヘラ研磨、内面は指によるかきあげ調整後横（左→右）方向のヘラ削りが右まわりに施されているが浅く、指圧痕が凹部として残っている。胎土には石英粒を若干含む。焼成は良く白黄色をなす。9は口径8.2cm、器高10.3cm、頭部径6.2cm、胴部最大径9cmを計る。球形の胸部に外傾する口頭部を付す小型壺である。口頭部は内外面共に横方向の刷毛目を下地調整とし、上をヨコナデしたものである。胴外面はヘラ研磨調整であるが、一部に板状のものによる細い擦過痕が認められる。内面はヘラ削り、内底部は凹凸をなす。口頭部に黒斑がある。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成は堅緻、黄褐色をなす。10は口頭部を欠損する。頭部径6.3cm、現存器高7.8cm、胴部最大径は上半分にあり9cmを計る。底部は尖り気味である。外面は上半部が刷毛目を下地としたヘラ研磨、下半部が刷毛調整のままである。刷毛目斜方向（右→左下）を右まわりに底部に向かって施している。内底部は指による調整で凹凸が著しく、上半部は横方向の丁寧なヘラ削りが行なわれる。胎土は精良で、焼成は堅緻、黄褐色をなす。11は口径7.7cm、器高7.9cm、頭部5.8cm、胴部最大径8cmを計る小型の壺である。口縁端部をナデすることにより口縁部がわずかに外へ張り出す特徴をもつ。口頭部外面および胴外面の上半分は、ヘラないし指による調整をし、胴下半部は細い刷毛目を下から左上方にかきあげ右まわりに施している。内底部は指による調整で凹凸が著しい。外面に黒斑があり、一部ススの付着がみられる。胎土は精選された精良な粘土で焼成は良い。黄褐色をなす。12は口径6.1cm、器高6.8cm、頭部径8.6cm、胴部最大径6.7cmを計る極めて小型の壺である。胴部は三段にわけて形成されたものと思われ、それぞれにわずかな稜線がみられる。外底部に荒い刷毛目を施し、他はナデによる調整を行う。胴部内面は指による調整で凹凸が著しいが、その上を刷毛目原体でナデしている。胎土には砂粒を混入する。焼成は良好で黄褐色をなす。

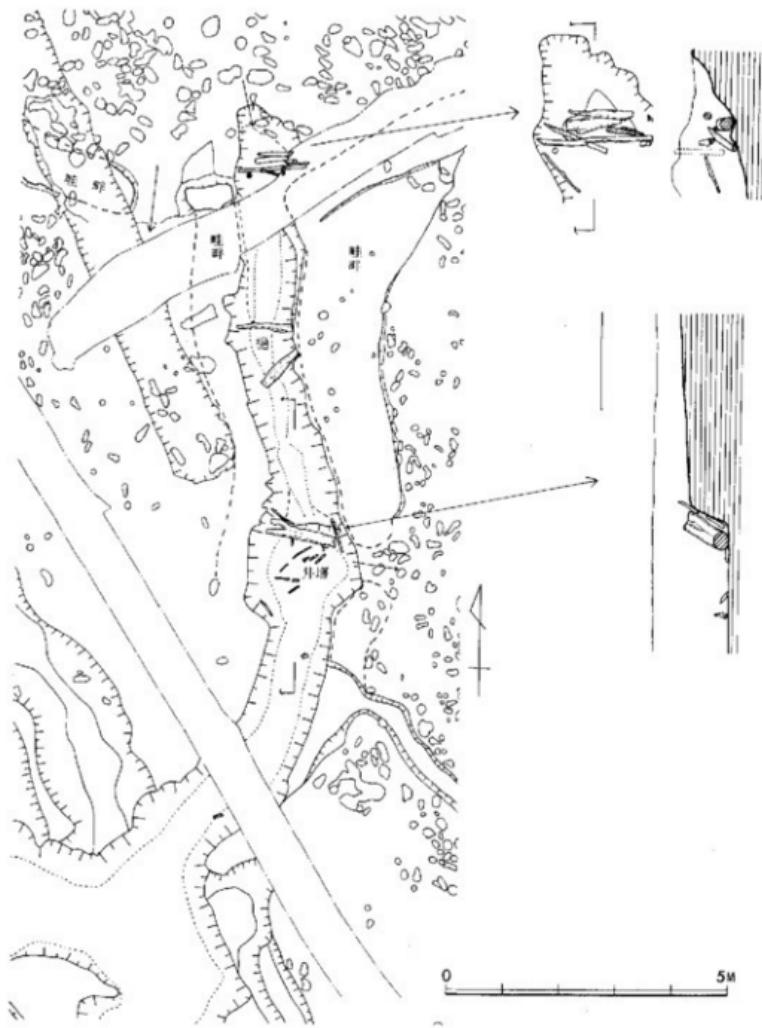


第12図 第4井堰と用排水関係図

4 第4井堰 (第12図)

第4井堰は発掘区南端、川の終点に確認した。第3井堰の北6.5mの地点に位置する。同地点の川幅は約5.5m、深さ約1.4mを測る。杭列はすべて水流、水圧によって頭部を川下において倒壊したもので、東岸より約3mの範囲の川底に約30cm間隔で10本の杭の先端部が一列に並んでいる。杭の先端部は鋭く削られ尖る。杭材はすべてが直徑10cm前後、長さは地中にかくれているため不明であるが川の深さ等からして、少くとも2m前後の長さが考えられる。杭の太さ、長さからして本遺跡で最も大規模な堰である。構造的には大部分が地中にはいるため不明な点も多いが、他と大きな変化はないものと考える。第4井堰の上流東岸、第3井堰との間に20数木のシイの木の護岸用の杭列が打ち込まれているが、この杭列は単に護岸用のためのみでなく、用排水との関連性も考慮される。以下、第4井堰の水利関係について述べる。

第4井堰の上流には、東西両岸に付設水路が設置されている。西岸の水路（水口）は二本あり、最も堰に近い水路はすぐに発掘区の底にかくれてしまい詳細は不明である。他の一つは前の水路より約2m上流にあり幅1.2m、深さ0.2mで水田の水口かと思えるものである。東岸の水路は幅3m、深さ10cm前後で、共に井堰で集水された水を引水する水路であるが、東岸の水



第13图 第2付設水路と用排水機械図

路は、水の取入口が二つに分かれていて、第4井堰のみに使用された水路とは考え難いのである。ここで改めて第4井堰と第3井堰との間に打ち込まれた護岸用の杭列の検討が必要になってくる。すなわち、この護岸用の杭列は、第4井堰の崩壊後、新設された第3井堰と付設水路との関係で把握することができる。第4井堰と第3井堰の距離は6.5m離れていて、既存する付設水路の水口は、第3井堰の下流にあたり、その水路を利用するためには水口を変更する必要が生じ、水の脹満を防ぐためかっての水口を妨ぐことが要求され、杭列による護岸と閉塞が施工されたものと思え、また、杭列は、その調整法によって、第1井堰で指摘した水路協の調整用の補助水路の役割を果していたものと考えることができる。杭列の横より出土した土器は、水口に対する祭祀用の供獻土器とみることができる。

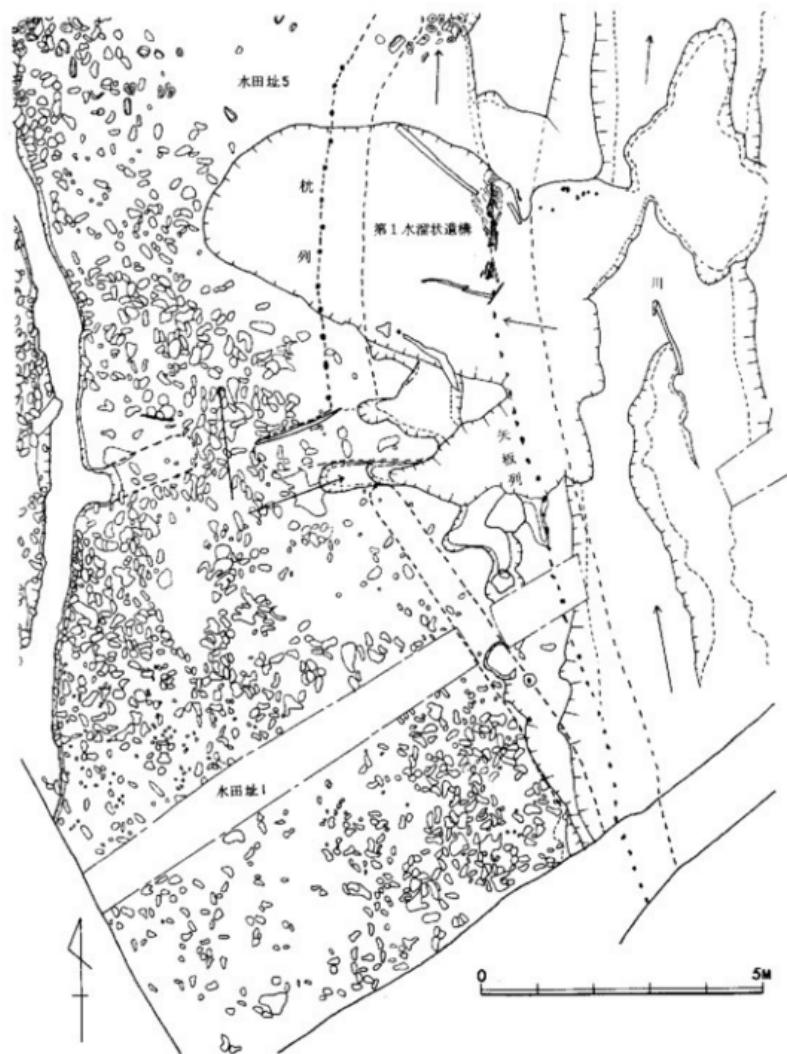
5 第2付設水路（第13図）

水田址5に付設された水路で、水田址8と9の間を北流し、水田址10の付近で流れを北東にかえ川と合流する。水路は長さ15m、幅1m～1.5mで下流にいくに従い幅を増加する。この水路には3ヶ所に排水、集水のための施設が設置される。先ず、水田址5の水尻に水田の水量調整のための小規模な堰、これより北に3～4mの地点に樋が二つに割れて存在する。また、水尻より7mの地点に集水用の井堰が設置されている。以下、3ヶ所の施設について詳述していく。

水尻に設置されたものは排水による水量調整を目的としたものである。畦畔に設けられた排水口（水尻）に小規模な堰を設置したもので、堰は溝の両端に径5cm前後の丸木杭を打ち込み、この杭に横木を渡して水留めとする簡単な構造で、排水をとめる場合は雜草や土を間につけたと考えられ、横木のまわりには雜草類が多く認められる。この堰に現存するのは打ち込まれた杭のうち西側の一本と横木5本で、東側の杭はその抜き穴が認められた。

樋は現状で二つに割れ、約1m離れて溝に直交して存在する。樋は東側（水田址9）が土手より落ち込み溝底に存在するが西側（水田址8）では土手上に乘っていて、元来は水田址8、9を結んでいた樋と考えられる。樋は径20cmの丸太の中をくり抜いたもので断面形はU字形を示す。長さ120cmを計る。樋でどちらの水田に水を引いたかは不明である。

第3の設備である堰は保存状況が悪く、杭材の散乱と横木の丸太の存在から堰であることが判明するにすぎない。構造的には本遺跡でみられる他の堰と同じである。杭材はすべてが径5cm前後の丸太杭で約10本が認められるが、現位置を保っているものは1本もない。杭列にわたされた横木は径20cm、長さ1.3mの丸太1本が残存する。堰の設置された地点より下流は集水された水の落下等により溝底がえぐられ、堰の上流との間に約45cmの段差が存在する。また、この作用により溝幅も広がり2mを測る。この堰で集水された水は水田址8に引水されたと考えられる。



第14図 水田址 1 と 第1水溜状遺構実測図

えるが、堰の横に存在する水口と思われる部分は、堰よりやや下流に存在し、現状の関係ではその機能を發揮しないが、これは、堰が落下水の侵蝕によって後退崩壊したために起った現象であって、当初はこの堰がさらに北側に存在し水口とは有効な水利関係が存在したとみることができる。

6 水田址、水溜状遺構とその出土遺物

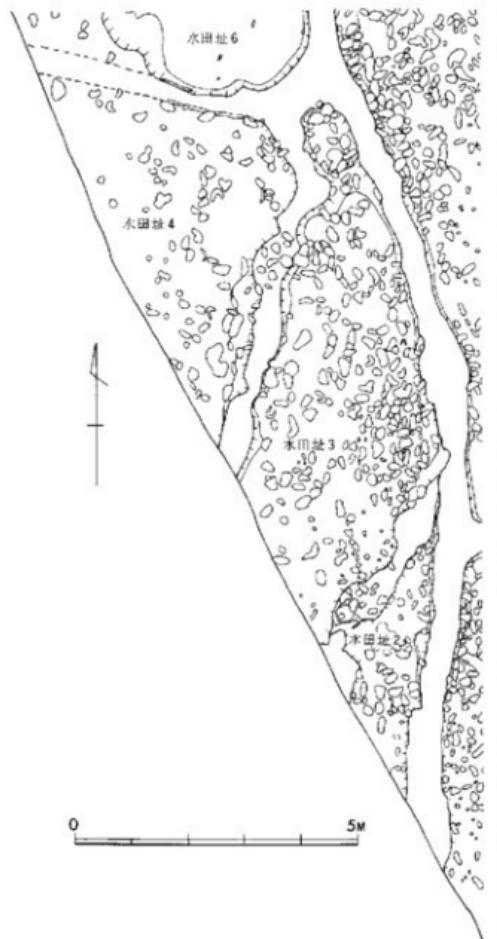
(1) 水田址

① 水田址1、1'（第14図）

水田1、1'は発掘区の南西部、川の西岸に確認した水田区画である。水田畦畔の東側、川の土手にあたる部分は山水において崩壊し、修築されているために水田区画に変化を生じているが、いずれも残存する杭、矢板列から全区画を求めることができるので畦畔修築後の水田を水田1、修築前のものを水田址1' とし説明を加える。水田1、1'の間には時間的な差異はあまりないが、先ず、先行して存在した水田区画水田址1'について説明する。

水田址1'は、南側が発掘外にのびていくために全区画を明らかにできないが、ほぼ長方形の水田区画をもつと考える。確認した区画面積は107.6m²以上を有する。川に沿った部分の畦畔にはシイの木を原材とする矢板列が30cmの等間隔で30数本が護岸用として打ち込まれているが、山水によって崩壊している。畦畔の幅、高さ等については不明であるが、他のものと比較からみると少くとも、矢板列の東側に幅80cm前後の畦畔を想定することができる。東側の畦畔は確認部分で長さ9mを測る。北側を限る畦畔は水田址1と共有するものと考えるが、山水等によつて、その大部分消失していく一部にその痕跡がみいだせるにすぎない。水田址1'の西側を限る畦畔の一部、発掘区西壁から北に6mのびた地点に畦畔がほぼ直角に50cm張り出している。この延長線上には畦畔の補強のために使用された板材が横たわり、また、水田面に残されている足跡が希薄でこの部分に北を限る畦畔を想定することができる。すなわち、この部分に幅50～60cm、長さ8mの畦畔を推定できる。この畦畔部分の一部に足跡の顕著な部分があり、この部分では畦畔が切れていて、水田址1'の水尻と想定することができる。西側の畦畔は幅50cm前後、高さ10cm前後で残存状態は良好である。

水田址1は東側畦畔の修築によってやや面積は小さくなる。西・北を限る畦畔は水田址1'と共に共有していく、先に説明したとおりである。東側、川に沿った畦畔は残存状態が不良であるが、南端部に一部その痕跡を残している。また北側を限る畦畔の横に長さ2m、幅40cm、川に向って傾斜する溝状の排水溝（水尻）が存在すること、あるいは杭の存在から、北側で1'水田の東側畦畔より西に約2m後退して、畦畔を推定できる。畦畔は幅50～60cm、長さ約9mを測る。水田面には無数の人の足跡、あるいは動物（不明）、耕作具によるものと考える痕跡があ



第15図 水田址 2・3・4 実測図

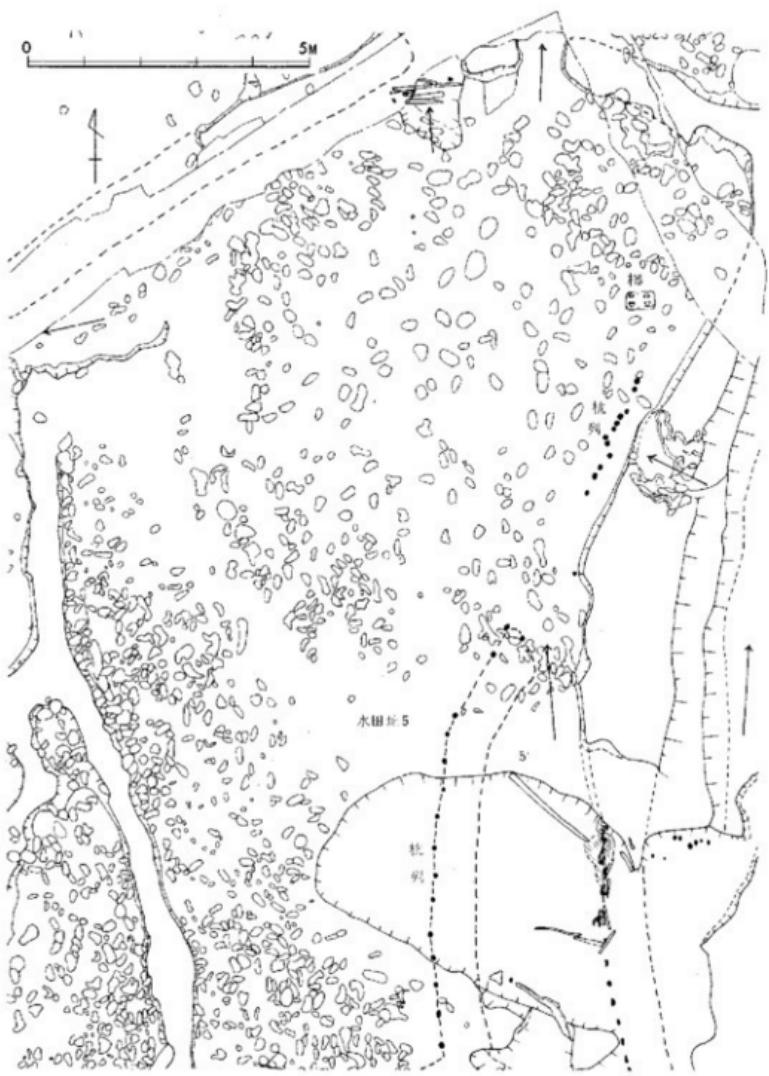
る。区画内の面積は $93.3m^2$ 以上が考えられる。水田址 1、1'共にその水がかりは、さらに上流に存在する(?)井堰によったものである。

② 水田址 2 (第15図)

水田址 1 と水田址 3 の間に確認した水田区画で細長い三角形をなすが、大部分は未発掘部分に存在するものと考える。東側畦畔は水田址 1 の西側畦畔と共に、西側畦畔は長さ約 4 m、幅 50m 前後、高さ 5 cm 前後を測り、水田址 3 の東側畦畔と共に存している。一部に水田址 3 に抜ける水尻らしい部分が確認できるが判然としなかった。東西の畦畔の接点は鋭角をなし、あまり大きな水田区画とは考え難い。水田址 3 と同一水田となり、西側畦畔は小畦的存在のものである可能性もある。水がかり等については不明。確認した水田面積は $3.5m^2$ 以上である。

③ 水田址 3 (第15図)

東側が水田址 2 と 5 に接し、西側が水田址 4 に接する。水田区画は発掘内でやや不整形で平行四辺形的である。未発掘区までのびているため全形を知ることはできない。面積 $18.9m^2$ 以上を有する。東側畦堰は南半は水田址 2 と共有北半部は水田址 5 と共有する。北半部の畦畔は幅 50 cm 前後、高さ 10 cm、長さ約 7 m である。西側の畦畔は水田址 4 と共有し、幅 40 cm 前後、高さ 10 cm、長さ約 6 m である。この西側畦畔には足跡が顕著に残存する部分が一部に



第16図 水田址 5×5' 実測図

あり、この水田の水尻と思われたが判然としなかった。水がかり等については不明。

④ 水田址 4 (第15図)

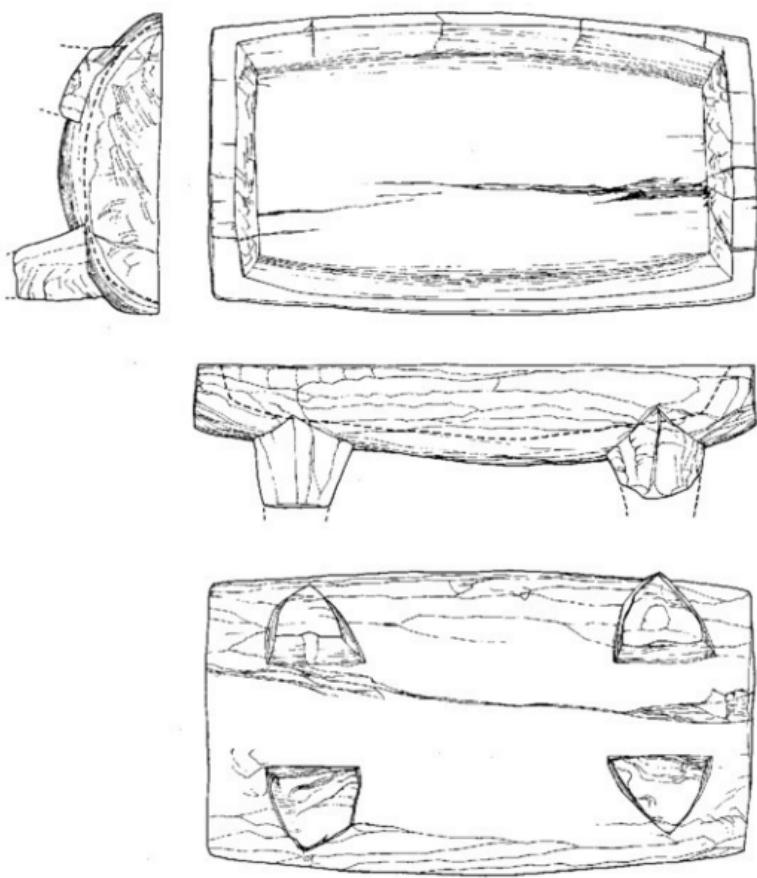
東側を水田址 3 に接し、北側を水田址 6 に接する。水田区画は発掘区内で三角形を示すが大部分が未発掘区におよんでいるため全形は不明。しかしながら、東と北の畦畔はほぼ直角に曲っており、方形ないしは長方形の区画を考えることができる。東側の畦畔は水田址 3 と共有し、北側の畦畔は水田址 6 と共有する。北側畦畔は残存状態が悪いが、畦畔の補強に使用された板材（横木）や水田面に残る足跡から推測できる畦畔の幅は40cm前後、長さ4mを測る。水田の面積は14.7m²以上である。水がかり等については不明である。

以上水田址 2 ~ 4 について、水がかり等の水利関係に不明な点が多いが、発掘区外の井堰から水がかりしているものと考え、水田址 1 ~ 4 は同じ水がかりによるものと考えている。

⑤ 水田址 5・5' (第16図)

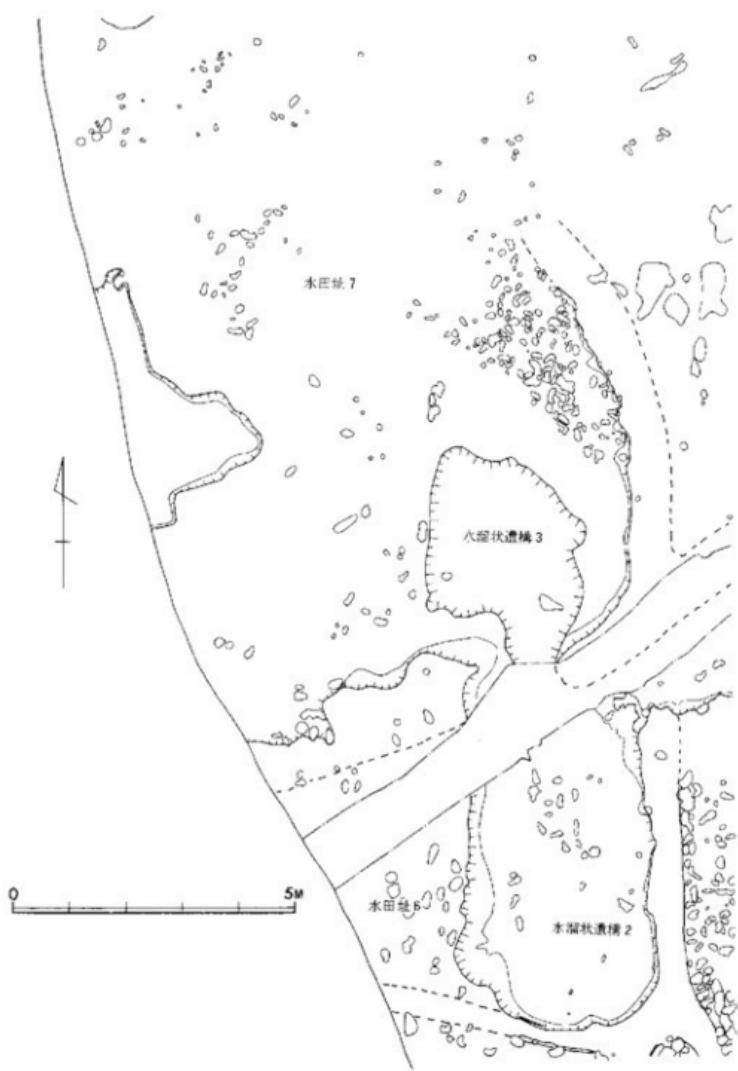
水田址 5・5' は同一の水田区画であるが、川の東側に構築された畦畔が破壊され修築された結果、水田区画に変化を生じたものである。水田址 1 と同様に、最初の水田区画を水田址 5'、修築後のものを水田址 5 として説明する。水田址 5・5' 共に本遺跡で水田区画を完全につかんだ唯一の例である。水田址 5・5' の間に大きな時期差はないが、先行する 5' から説明する。

水田址 5' は、ほぼ長方形の区画をなし、面積は160.9m²である。水田址内に後述する第1水溜状造構を持つ。東側畦畔は長さ約17mで、南側の約5mは水田址 1' で説明した矢板列の延長部分である。この矢板列は水溜状造構において、一部が堰の役目をなしていたと考える。北半約12mは幅広い（2~1m）土手状の畦畔がつくり出されているが、これは第1井堰との関連で、幅広い強い畦畔を必要としたためと考えられる。この畦畔には北より約5mの地点に幅1mの水路が設けられ、第1井堰の集水に伴い引水できるようにしている。この水路部分には畦畔より約30cm離れた水田側に、幅2.2mにわたって杭12本を打ち込んだ杭列で水口を塞ぐような施設があるが、これは引水時における土砂流入等を防ぐのが目的であり、最近まで水田の水口に用いられていた施設である。当時の水田管理についての詳細が判明した一例である。南側畦畔は水田址 1 の北側畦畔と共有し、西側は水田址 3・6 の東側畦畔と共有するもので、後出の水田址 5 においても畦畔の共有は同様である。北側畦畔は、後の擾乱と試掘トレンチによって大部分が破壊されているが一部にその痕跡を残している。特にこの水田の水尻は良く残っていた。先ず、水田址 9 と共有する畦畔は一部、後世の擾乱によって損傷があるが、比較的良く残り、長さ約6m~幅70cm前後、高さ10cm前後である。東側畦畔との交点から4mの地点に幅80cmの水田址 9 への水尻が設けられる。さらにその地点より1.5mの所には、第2付設水路の排水口（水尻）がありその内容については先述したとおりである。水田址 8 と共有する畦畔は残存状態も悪く、試掘トレンチによって大部分が破壊されているが、西側畦畔との角には水田 6 へ抜ける水尻が設けられる。



0 20 CM

第17図 水田址 5 出土木器実測図



第16図 水田塗 6・7 水田状遺構 2・3 実測図

水田址 5 は、5'の水田址の南、北、西側の畦畔を継承しており、水口、水尻等の設備に変化はない。水田址 5 は、5'水田の水溜状造構的部分に設けられた堰と畦畔の崩壊によって畦畔が約 2 m 西に後退して修築され、水田面積を狭くしている。新設された畦畔も残存状態が悪く、畦畔の補強、あるいは護岸として打ち込まれた杭列が 50 cm 間隔で 15 本存在するのみである。この杭列と北側の土手状の幅広い畦畔の間、幅 70 cm に足跡が顕著にみられこの部分は水田址 5 の水口を形成していたと推定できる。畦畔は足跡等の痕跡から杭列東側に幅 70 cm で築かれていたものであろう。5'水田で認められた第 1 井堰横の水口もこの時期の痕跡から杭列東側に幅 70 cm で築かれていたものであろう。5'水田で認められた第 1 井堰横の水口もこの時期まで存続していたと思われる。この水口付近の水田耕作上中からは完形に近い方形の実付の木製鉢が出土しており、水口祭等の祭祀行為に関連すると考えている。水田区画の平面形は南の部分が、5'の水田よりやや狭くなり合形を示す。面積は、140.4 m² を有する。水田面には無数の人、動物の足跡、あるいは耕作の痕らしき穴が存在する。この水田の水がかりは、一部水田址 1 からの引水もあるが、その主要な引水は第 1 井堰によるものである。他の水田址 6 ~ 10 は、水田址 5 を鉢帶として第 1 井堰の水がかりである。

木製脚付長方形鉢（第17図 P. L24）

第 1 井堰横の水口周辺から出土した木製の長方形鉢形木製品である。中央部から二つに割れるが鉢部は平面形が 39 cm × 21.5 cm のやや膨脹みの長方形をなす。断面形は浅い（高さ 7 cm）U 字形をなす。底部に断面三角形の脚を四隅に配するが、いずれも脚端部を欠く。全面にのみの削り痕が明瞭であるが、つくりは丁寧である。出土状況等からすれば、水口祭における供犠物の盛鉢として使用された可能性が強い。

⑥ 水田址 6（第18図）

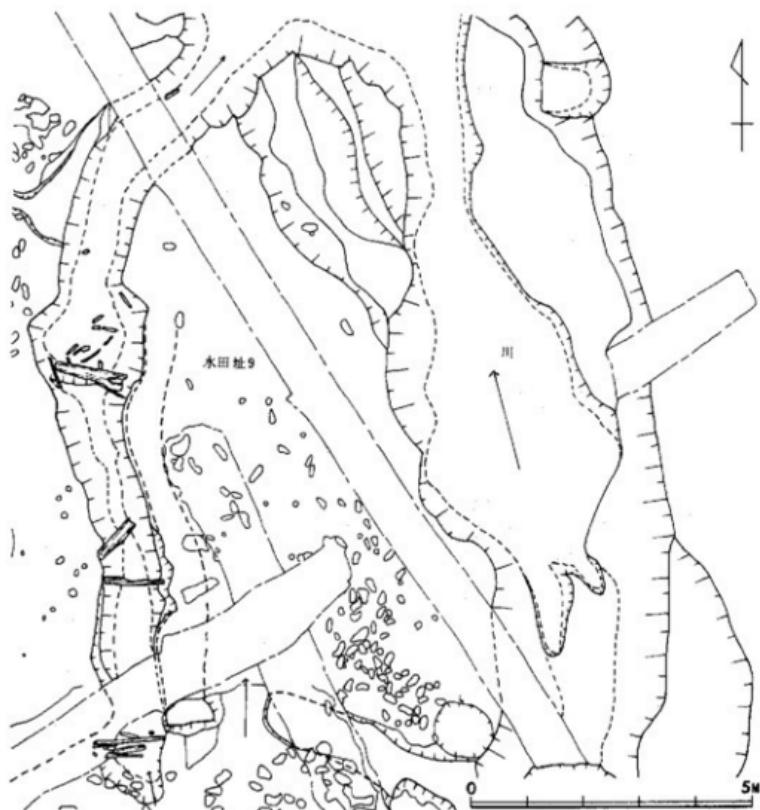
水田址 6 は北を水田址 7 と東を水田址 5 と南を水田址 4 に接している。水田区画は発掘内では長方形を示すが、西側は未発掘区にのびている。東側の畦畔は水田址 5 と共有していて、水田址 5 より引水する水口がある。南の畦畔は水田址 5 と共有である。北側の畦畔は不明ではないが、幅 100 cm、長さ 4 m の存在が考えられ、東にかたよって水尻が存在するが、試掘トレチによって一部が破壊される。水田中には東側に片寄って鵝卵長方形の水溜状造構が存在するが、他の例と比較し、浅く平坦である。他と異なった用途が考慮され、水田の一帯（苗床等）と考えることもできる。この水田の面積は 29.2 m² 以上が考えられる。

⑦ 水田址 7（第18図）

水田址 7 は東側を水田址 8 と、南側を水田址 6 と接している。水田区画は残存する畦畔からすれば長方形と考えられるが水田は西側が発掘区外にのびており、北側は当時の出水による擾乱および調査のミスによってつかむことができなかった。水田面積は発掘区内で 86.1 m² 以上が考えられる。東、南側共に畦畔は明瞭でないが、他の水田よりやゝ低くなっている、かつて畦



第19図 水田地 8 地塊区

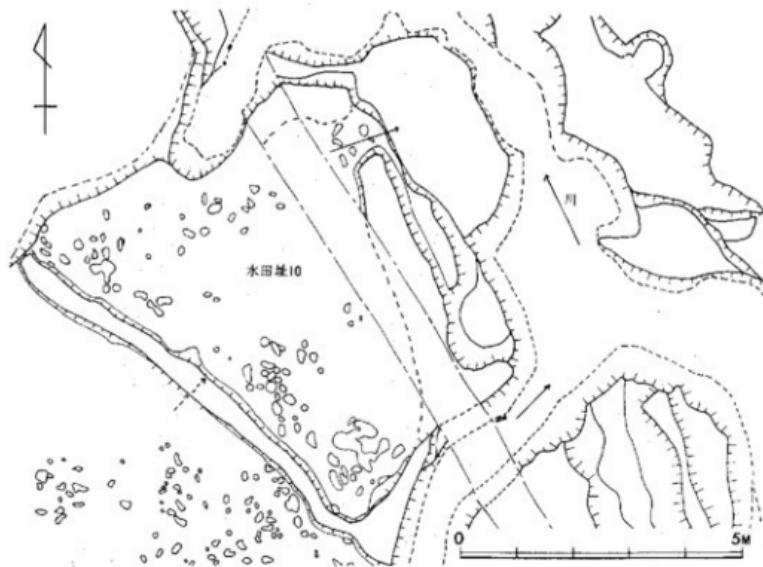


第20図 水田址9実測図

畔があつたのではないかと思われる部分に数cmの段差がつく。また、耕作土面に残る足跡からも畦畔の存在が推定できる。南側の畦畔は水田址6と共有する。東側の畦畔は水田址8と共有するが推定できる畦畔は幅70cm長さ約7mである。状況からすれば長さはさらに直線的に伸びていくものであろう。南側畦畔に設置された水口はすぐ下方の水田中に設置された水溜状造構に直結している。

⑧ 水田址8（第19図）

水田址8は西側を水田址7と南側を水田址5と東側は水田址9と第2付設水路に接してい



第21図 水田址10実測図

る。北側は出水時の攪乱と調査ミスによって把握できなかった。平面形はほぼ長方形なるものと思われる。西側畦畔は水田址7の東側畦畔と共有し南側畦畔は水田址5の畦畔と共有するが残存状態は試掘トレンチ等の破壊で不良である。東側畦畔の南半部は第2付設水路の土手となっており幅約1.4mを計る幅広い畦畔となっている。水田東西コーナーより約7mの地点に幅50cmの水口と思われる部分があり、第2付設水路に設置された堰との関連性があることは先述したとおりである。北半部の畦畔は水田址10の西側畦畔と共有している。畦畔は幅30cm、高10cm前後で約8mを確認した。畦畔中央部にやや低くなる部分があり、この水田における水尻ではないかと考えたが確証を得ることはできなかった。この水田には上部に出水による砂層が少く、発掘技術上困難を極めた。水田面積は101.1m²以上が考えられる。

⑨ 水田址9（第20図）

水田址9は南側は水田址5に接し、西側と北側は第2付設水路に限られ、東側は川によって限られる。一部を中世の川（水路）によって破壊されている。水田区画の平面形は中世の攪乱もあり判然としないが、ほぼ長方形をなすものであろう。南側の畦畔は水田址5と共有し、西側に片寄って水田址5より引水する水口が存在する。西、北側の第2付設水路の土手にあたる

部分の畦畔は痕跡をとどめていないが、第2付設水路の水口東側に残る畦畔から幅50~70cmの畦畔が土手に沿って存在したことが想定できる。西側畦畔の途中には水田址8と連結する箇の存在があるが、水がどちらの水田に流れているかは不明。この水田の面積は31.8m²以上が考えられる。

⑩ 水田址10(第21図)

水田址10は東側を川に限られ、南側を第2付設水路に限られる。西側は水田址8と接する。水田区画の平面形は不整の長方形である。西側畦畔は水田址の東側畦畔と共に共有する。南側畦畔は試掘トレンチによって大部分が破壊されるが、西半部がわずかに痕跡を残している。幅30cm前後、高さ10cmあまりで第2付設水路にそっている。東側は川の土手に沿って幅60cm、高さ10cm前後の畦畔が5m確認できるが、試掘トレンチによって一部が破壊される。畦畔の北端部は切れいて水尻であったことが想定できるが、それより北の畦畔は確認できなかった。水田耕作土面には足跡等の凹みがわずかに散在する。水田面積は23.1m²以上が考えられる。

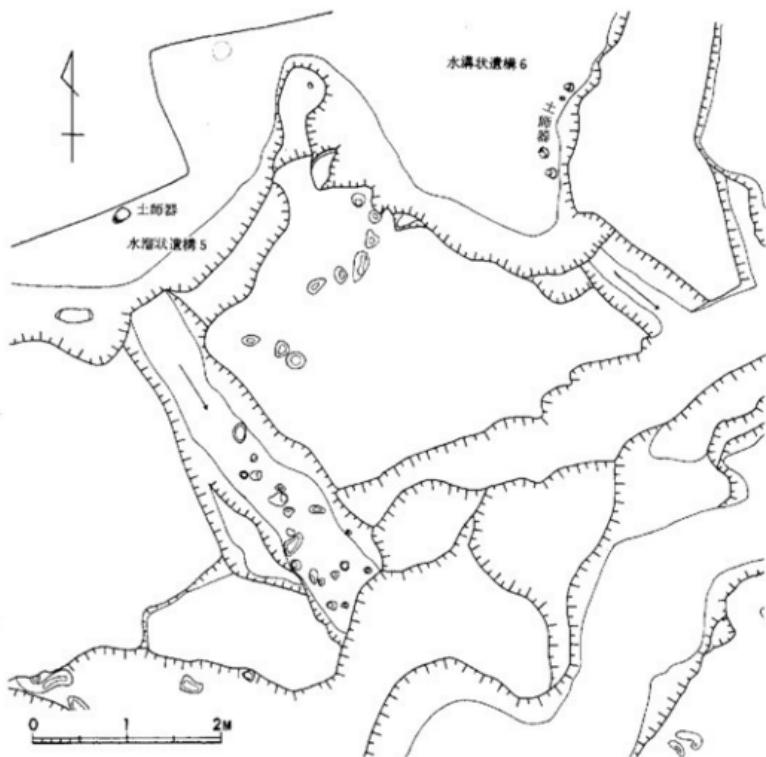
⑪ 水田址11~15

発掘区の中央を北流する川の東岸に存在する水田区画である。これらの水田には明確な畦畔が見い出せないが、排水口(水尻)の存在や付設水路からある程度の水田区画が想定できるものである。水田址11~13は川、第1付設水路に沿う水田址で、わずかな土層の違いによって水田区画が想定できたものであるが、いずれの区画も不整形を示す。水田址11の面積は88.8m²以上、水田址12の面積は11.0m²以上、水田址13は29.5m²以上が考えられる。水利関係は不明な点が多いが、想定できるのは、上流の未発掘部分の井堰からの配水によるもので、11~13の水田址は同一の水がかりと考える。水田址14、15は、第1付設水路の下流域に存在するもので、川に沿って存在する排水口(水尻)の存在によってからうじて想定できる水田区画である。平面形は方~長方形と考える。水田址14の面積は50.7m²以上、水田址15の面積は57.6m²以上が考えられる。水がかりは、第1井堰より配水される第1付設水路からよったと考える。

(2) 水溜状造構

① 第1水溜状造構(第14図)

水田址5の南東部隣に掘り込まれたピットである。長径5.5m、短径3.7mの平面プランが長楕円形を示し、深さ0.9mを測る。川との接点には畦畔の補強、護岸用として打ち込まれた矢板列があるが、この水溜状造構の部分には横木や草木類をおいて堰状にしている。この施設は第1井堰の集水時に、この部分の調整によって同造構内への引水は可能である。この施設は出水時に崩壊し、次の段階では、水溜造構の中ほどに杭を打ち込んで護岸とし、水田を約2m後退させているが、この時には堰状の施設は設けられてなく、前段階における水溜状の機能は果たしていないものと考える。造構は粗砂層によって埋まる。



第22図 水槽状遺構 5・6 実測図

② 第2水槽状遺構（第18図）

水田址6の北半に設置された遺構で、水田址5から引水する水口の横に位置する。長径6.5m、短径1.5mの開丸長方形プランを有する。深さは水田耕作土表面より約20cm低いが、底面は平坦で、その底面にも足跡が認められ、他の水槽状遺構と使用用途の違いを感じる。水田としての特別の使用、例えば苗床等の使用を考えることができる。

③ 第3水槽状遺構（第18図）

水田址7の南東隅に設置された遺構で、長径1.6m、短径1.2mの不整梢円形プランを有し、深さ0.4mを測る。断面はスリ鉢形をなす。水田址4より引水する水口と直結し、第2水槽状

遺構のすぐ北側に存在する。中は粗砂によって埋まる。

④ 第4水溜状遺構

水田址7の北側、発掘区の壁付近に検出した遺構で、現状で長径2.2m、短径1.2mの半円形プランを有しているが、一部壁中にはいってて全形プランは不明。深さ約0.4mを測る。中は粗砂によって埋まる。

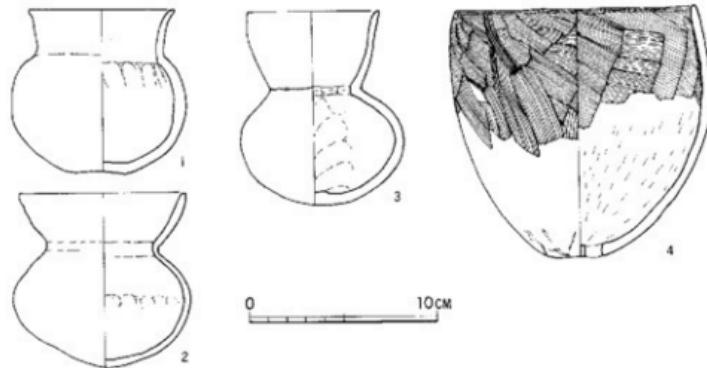
⑤ 第5水溜状遺構（第22図）

第4水溜状遺構の北側約1mに検出した遺構で、第4水溜状遺構同様に約半分は壁にかくれる。現状では径0.8mの半円形プランを有する。深さ0.75m。中は粗砂と粘土の互層によって埋まり、中より底部穿孔の鉢形土器が出土した。第6水溜状遺構と連続しているが、同一遺構であるのか、切り合い関係にあるのか確認を得ることはできなかった。この水溜状遺構には幅0.8~1.5m、長さ約8m、深さ20cmの東側に傾斜する水口（水路）が付設されているが、他遺構との関係は不明である。

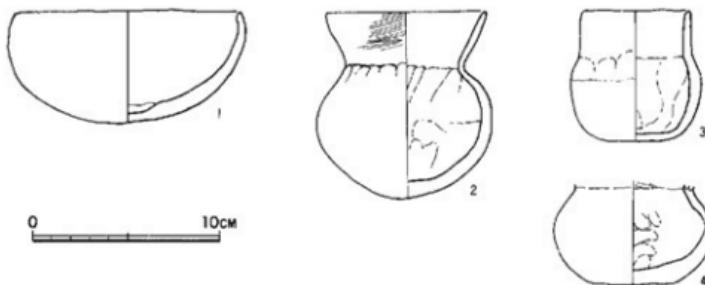
⑥ 第6水溜状遺構（第22図）

第5水溜状遺構のすぐ北にあり、第5水溜状遺構と連なっている。現状では西半部が壁中にはいってて全形プランは明らかにできない。長径4m、短径3.5mの不整の半円形を示す。東端部に幅60cm、長さ1.2m、深さ20cmの東側に傾斜する水口（水路）が付設されるが、他遺構との関係は不明。中は粗砂によって埋まる。遺構の北端部、水口横に三個の小型丸底壺が供献された状態で出土した。

⑦ 第7水溜状遺構（第9図）



第23図 水溜状遺構5・6の供献土器実測図



第24図 水溢状遣構7の供献土器実測図

第2井堰の上流すぐ横の西岸に設置された遣構で、長径5m、短径4.3mの不整円形プランを有し、深さ約1mを測る。川との接点には無数の丸木杭を打ち込み、それに横木をわたし堰状の設置を設け、その圍籠によって川より引水したことが判る。第1水溢状遣構と同様の構造をもち、本遣構も水田の中に設置されたと考えるが、水田面は確認するにいたらなかった。中は粗砂によって埋まる。北壁にそった堰付近に小型丸底壺3点と中型の壺1点が供献された状態で出土した。

以上、水田址に伴う水溢状遣構について説明を加えたが、これらの遣構が水田とどのような有機的関連性をもっていたのか、後章で考察を加えたい。

(3) 出土遺物（第23、24図）

第6水溢状遣構出土の土器は3点共小型丸底壺であるが、墨形的にそれぞれに若干の差異がある。

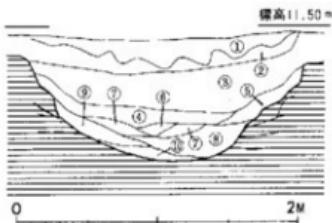
1は口径7.8cm、器高8.7cm、胴最大径9.2cmを計る。球形の胴部にはほぼ垂直にのびる口頸部を付し、端部は外反する。口縁部の一部を欠損する。外面は磨滅が著しく整形手法は不明。内面はヘラ削りが認められる。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は堅緻で、黄褐色をなす。2は口径8.8cm、器高9.2cm、胴最大径9.4cm、頭部6cmを計る。扁平な球形の胴部に内湾気味の口頸部が付される。頭部は指によるナデ凹みがあり一見二重口縁の退化したもののごとく見える。保存状態が良くないので整形手法は不明な部分が多いが、口頸部は内外面共にヨコナデ、胴外面がヘラ研磨と思われる。内底部に指圧痕で凹凸があり、上半はヘラ削りである。器壁は全体に薄い仕上げで、口縁端部はやや厚味を増す。胎土には多量の砂を含む。焼成は良好で、色調は明るい黄褐色をなす。3は口径7cm、器高10.4cm、胴最大径8.7cm、頭部径4.8cm、口頸部高4.2cmとやや長い。口縁部の一部を欠損する。やや扁平な球形の胴部に頭部が急に外反し内

粧気味にたちあがる口頭部を付す。前二者に比較しスマートである。器体外面は保存状態が悪く整形手法は不明な部分が多いが、頭部に細い刷毛目痕があり、初め全体を刷目調整し、後に胴外面はヘラ研磨、口径部の内外面はヨコナデによって刷毛目痕を残したものと思われる。胴部内面は右まわりにヘラ削りが施される。胎土は焼透された良質のもので焼成は堅緻、黄褐色をなす。

第5水溜状造構出土土器は4の鉢形土器のみの出土である。1は底部は不安定な平底で、胴部は外反しながらたちあがるが、口縁部近くで内傾する。底部には焼成前の径9.0cmの穿孔がある。口縁部から胴部にかけての約4を欠損する。胴部に1ヶ所の黒斑がみられる。全体に保存状態が良好である。外面は下から左上の斜方向にかきあげる細い刷毛目を左まわりに施すが、胴下半はナデ消す。内面は幅4cm以上の刷毛目原体で細い刷毛目を右から左上方に向ってかきあげ、それを右まわりに連続させている。刷下半は、それ以後に、指あるいはヘラによってかきあげ調整を行い刷毛目痕を消している。内底部は指による調整で凹凸が著しい。胎土には若干の砂粒を混入し、焼成は堅緻、黄褐色をなす。

第24図に示した遺物は、2~4の小形丸底壺が第7号水溜状造構に供献された土器で、1は同造構周辺の水路（水口か？）出土土器である。第7号水溜状造構には他に大形の壺があったが保存状態が悪く図示できなかった。

1は口径12cm、器高6cm、丸底で口縁部が内傾する椀形の土師器である。内外面共に磨滅し、整形手法等は不明な点が多い。全体に手づくねによる成形と思われ、内底部の凹凸が著しく、口縁部もひずみが多い。口縁の一部に黒斑がある。胎土には砂粒を含むが良質の粘土を使用している。焼成は堅緻で、灰褐色をなす。2は口径8.7cm、器高10cm、胴部最大径9.4cm、頭部径6.4cmを計る。球形の胴部に外傾する口頭部を付したものである。胴下半部の成形は手づくね的で凹凸が著しい。頭部付近に荒い刷毛目痕が部分的に残存しており、下地に刷毛調整を行い、後に指ナデによって消している。口頭部外面は横方向の荒い刷毛目を施す。内面は横ナデ調整、胴内面は内底部が不定方向のヘラ削り、胴上半部が横方向のヘラ削りを左まわりに連続して施す。胴の一部に黒斑がある。胎土は一部砂粒を含むが良質で、焼成は堅緻、灰黄色をなす。3は口径5.8cm、器高7cm、胴部最大径7cm、頭部径6.2cmを計る。不安定な平底で胴はいびつな球形をなす。口頭部は外に開かず直口する。全体にいびつな手づくねの土器で器壁に凹凸が著しい。胴の一部にわずかに刷毛目痕を認める。胎土には多量の砂粒を含む。焼成はもろく、白黄色をなす。4は頭部径6.4cm、胴部最大径8.6cm、現存器高5.4cmを計る。口頭部は欠損する。胴部は扁平な球形をなし、底部は不安定な平底である。全体に手づくね的で胴外面の器壁は凹凸が多い。内底部は指によって巻き状に右まわりにナデ、胴上半は指によって調整する。胎土は砂を混入するが良質で、焼成は堅緻、黄褐色をなす。



第2図 弥生時代溝断面図

7 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構については、時間的制約と遺構の残存状態が不良であること等から、完掘はしていない。

発掘区南半部分の古墳時代の水田址の下層に、弥生時代に属すると考える厚さ10cm前後の水田耕作土の広がりを認めたが、試掘トレンチの断面観察からは、畦畔等の水田区画を示す遺構が存在しないことが判明したので古墳時代水田の一区画に試掘区を設定して、土層サンプルの採取を実施したにすぎない。弥生時代の水田耕作土は、古墳時代の水田耕作土より粘質が強く黒褐色の粘質土質である。耕作土中に多数の有機質を含んでいる。出土遺物は非常に少く、わずか数点の石器を検出したのみである。

発掘区中央部を北流する川の西岸、古墳時代における出水あるいは後世の擾乱が激しく、古墳時代における出水の上層を除き下層の弥生時代の土層を発掘したが、出土遺物は極めて少く、わずか数点の木器が出上したのみである。遺構としては溝（川）1条のみを検出した。溝は発掘区西壁のほぼ中央部を始点とし、北東に15m流れ、ここで流れを北に変え15m流れて、第7水溜状遺構付近で川と合流するが、第7水溜状遺構のために破壊され判然としない。溝幅は始点部分で約2m、下流にいくにしたがい溝幅を増し合流点では約3mを測る。溝の深さは約80cm前後で、断面はU字形をなす。溝の堆積土は第25圖に示した。以下、土層を説明すると第①層、粗砂混入の灰褐色土層で、古墳時代の水田面を覆う土層である。第②層、細砂を含む黒灰色土層で古墳時代水田耕作土との関連性が考慮できる。第③層、黒褐色粘土層。第④層、黒褐色の粘土でしま状に砂を含む。第⑤層、黒灰色粘質土層。第⑥層、黒灰色粘質土層。第⑦層、砂層。第⑧層、灰黑色砂質土層。第⑨層、灰黑色粘質土層、第⑩層、砂層となる。溝中には多量の流木等を含み、一部、木器も存在する。弥生時代の遺物については次章で説明する。

第4章 第2調査区の遺構と遺物

第2調査区は、第1調査区の成果の上にたってその再確認と、さらなる成果を求めて川の延長上に設定した調査区である。はからずも第1調査区とは異った時期の水田遺構を検出したにとどまり、期待した古墳時代の水田遺構の存在は確認できなかった。これは、この地区的地山層が以外と高く、自然地形が元々東部が高く、北西部に傾斜しているためであり、古墳時代の水田遺構は削平された可能性が強いことが判明した。中世水田は旧河道の堆積に伴い、その氾濫原に形成された水田地盤で、形状は極めて小さい水田区画を示す。第2調査区の成果は第1調査区のそれを追認するものではなかったが、後続する中世水田の実態を解明することができたのは幸いであった。

第2調査区で検出した遺構は用水路である川と、川に設置された集水用の井堰2ヶ所、川より引き込まれた付設水路2条とそれに設置される堰、水田敷區画、時期不明の長方形土壙2である。また、遺構ではないが、大規模に実施された整地のあとを確認した。これは条理制施行と関連して注目される。検出した各遺構は時期的に弥生時代から鎌倉時代までのものであるが検出した遺構以外に土壙断面の詳細な観察では現代まで存続する水田耕作土の変遷が看取できる。以下、各遺跡について説明を加える。

1 川

第1調査区から延長してくる川で、その状況は第1調査区と大きな変化はない。時期的には弥生時代、古墳時代、中世の3つの大きな川の流れがあり、詳説については、前章で説明したとおりである。第2調査区における流路の状況を詳述すると以下の如くである。

弥生時代の流路は第1調査区で確認した川の終点より20m離れて第2調査区の川の始点となる。位置測定、その他の諸情報は同一の川の延長とみてよい。川の始点部分は堰と川が直交せず川を斜にたちきったようになるが、川の流れは、ほぼ北西方面に流れをとる。このような状況から推測して、第2調査区の始点部分はちょうど蛇行点にあたっていたと想定する。川は第2調査区の始点より約15mの地点で流れを左右の二つの流れにかえる。左の流れはこの分岐点で大きく西に屈曲し発掘区の壁中にはいる。しかし、分岐点より北に約5mといって再び流れの方向を北にとり発掘区内にあらわれるが、この部分は上部に中世水田が営まれているために、その一部を発掘したにすぎない。川幅は約8m前後である。深さは危険があって確認していない。堆積土は有機質粘土層が主体で一部粗砂層を含むが、後世の古墳、中世の堆積層は認められず、すべて弥生時代の形成による堆積土と考えることができる。右の流れはこの分岐点から

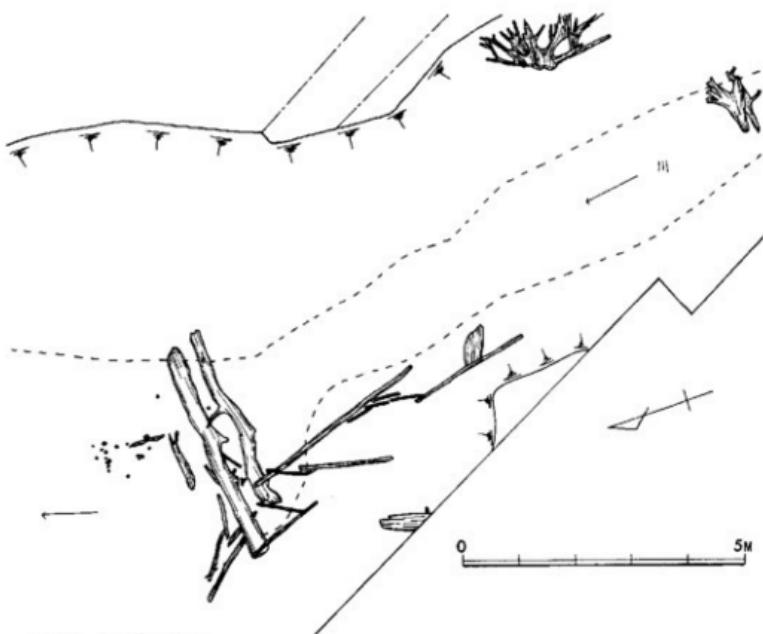


第26区 第2剖面区全剖面图

北に方向を変え、わずかな蛇行をくりかえしながら約45m北流する。分岐点での川幅は約6mで、下流にいくにしたがい川幅は広がり第2調査区の終点では約9mを測る。深さは分岐点で約1・9m、終点では約2・1mで序々に深さを増している。この右の流れの堆積は下層が弥生時代の粘質土層と砂層の互層であるが、上部には、古墳時代、中世の川の堆積土があり、左の流れとは若干趣を異にしている。このことは、弥生時代における川の形成過程を知る上で興味深い。調査における土層等によって充分に把握することはできなかったが、この間の事情を堆積すると次のようになろう。

第1調査区を北流してきた川は第2調査区において当初は左の流れの方向に大きく蛇行して流れていたが、弥生時代のある時期における洪水等の出水期において右の流の方向に変化し、直線的な流路を形成したものと考える。分岐点における東岸部の張り出しがこの間の事情を物語るものであろう。さらに分岐点の上流に設置された弥生時代に属する第5井堰とも無関係ではないと考えられる。発掘調査において、この井堰から引水する水路は確認できなかったが、本來は右の流れの方向に付設水路があり、この水路が下地となって出水期において、この流れにそって氾濫し、右の流れの川が新たに形成されたものと想定することができる。このような事情で新しく川ができた時、その前の川、すなわち左の流路は沼地化（小規模な三日月湖）したと考えられ、堆積土からは多数のヒシの実を検出することができる。このようにして出来た沼地はようやく中世になって水田化したことなどが発掘の結果から判明する。右の流れ、すなわち新川は以後、中世までその流れを変えることはなかったことが川の土層の観察から堆積できる。古墳時代の川は基本的には弥生時代の新川と大きな変化はないがやや川幅が狭くなり、川底もあがり浅くなる。流路の長さは約65mを測る。川は第2調査区の始点より約20m北流し第1の蛇行地点に達するが、この部分では弥生時代の川岸を崩壊させ川幅を広げている。第1の蛇行地点で流れは北東にかわり約30m流れ第2の蛇行地点に達し、そこから再び北に流れを変え15mで発掘区の終点となる。この時期の川は全体に蛇行は小さく、安定している。第2蛇行地点の約15m下流に第6井堰が設置される。川幅は始点では約4mで、下流にいくにしたがい川幅を増し終点では約6mを測る。深さは始点で1.2m、終点付近で1.9mを測り徐々に深くなる。

中世の川も、弥生、古墳時代の流路と大きな変化はないが、規模的に縮小している。流路の長さは約60mを測る。川は始点から北西に流れ約18mで第1の蛇行点に達し、そこで、方向を北にとり約10m北東に流れ第2の蛇行点に達する。第2の蛇行点では流れをやや西にとり、約12m北流するが、この流れは従来の川をわずかにはずれて新しい流路を形成する部分があり、この部分に水田へ水を引く付設水路が設置されている。第3の蛇行点では再び流れを東にとり、ややふくらみ気味に北東に流れ、約30mで発掘区の壁にぶつかる。中世の川は、川幅2~3mで、深さ50~80cm程度と小さいが、弥生、古墳の川に比較し狭く蛇行している。



第27区 第5井堰実測図

2 第5井堰 (第27図)

第5井堰は調査区の西端側の川の始点より約13mの地点、川の分岐点のすぐ上流に設置されている。井堰をおおう堆積土等からみて、本遺跡では唯一の弥生時代に属する井堰である。残存状態は極めて悪く、横木をとめる杭はほとんど抜けっていて構造的に不明な点が多い。現存するのは横木として使用された長さ4m前後、径30cm程度の丸太材が川の流れに直交し2木並列して横たわり、それをとめていたと考えられる杭材數本が下流域に散在するのみである。この出土状況から堰の構造を考えると第1調査の第1井堰と似たものが想定できる。堰の下流は集水時の落水によって川底がえぐられ深くなる。下流東岸には10数本の乱杭が打ち込まれているが、これは護岸のためのものであろう。特に東岸部のみにこのような配慮が払われているのは井堰で集水された水を引する付設水路がこの部分にあったことが想定される。先の川形成過程で述べた流路変更との関連性が感知できるが、その痕跡はみいだすことはできなかった。た

だ、堰の上流部東岸には川岸の崩壊に伴って、川岸に植っていた立木が川の中にくずれこんだものの2本が存在し、川の流路変更とこの堰の崩壊時期を暗示するものがある。堰の周辺からは木器等若干が出土している。堰は現存する横木から考えるとかなり大規模なものであるが、調査区内においては川とこの堰以外弥生時代に属する遺構は検出していない。

3 第6井堰（第28回）

調査区東曉川の終点より10mの地点に設置された井堰で時期的には古墳時代に属する。井堰の設置された川幅は弥生時代の川とやや狭路を異にしているため発掘した川幅は9mと広いが、実際の古墳時代の川幅は5mで深さ約1mを測る。現状は杭はすべてがぬけて打ち込まれた状態のものは少ないが、多数の杭材と横木の存在から堰であることは容易に推測できる。井堰は破壊が進んでいてその構造を推測するには無理があるが、第1井堰のような丸太材の横木は存在しない。

堰の横の川の北岸には長さ3m、幅3・5mの掘り込み部分が存在する。この掘り込み部分は堰の下流で川と合流している。この掘り込み部分には幅2m、深さ30cmの水路が付設されている。この掘り込み部分は第1調査区の第1井堰にみられたものと同様の使用方法がとられ、堰に対する補助水路の役割を果していただと考えられる。これは付設された水路の東岸から掘り込み部分にかけ8本の杭が存在することや他の杭の状況から堆積することができる。水路は長さ2mで発掘区の北壁に消えるので水田等の施設との関連性は把握できない。掘り込み部分の底には小型丸底窓2個がほぼ完形で出土している。水溜状遺構と同様に供給されたことがわかる。現存する杭で最も長いものは長さ1.8mで川の両岸の高さにあうものである。この堰は崩壊後、再築された形跡はない。堰の上流部には、上流からながれてこの堰でとまったと考える土器片が多量に存在する。

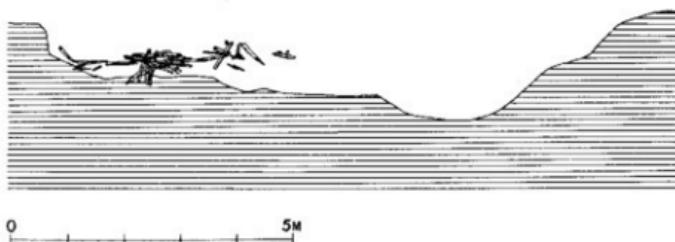
4 第3付設水路

第3付設水路は第1調査区の第3、4井堰から引水する水路で、その延長部分と考える水路が第2調査区の東岸部に流れている。以下、第1・2調査区にまたがるこの水路について説明する。

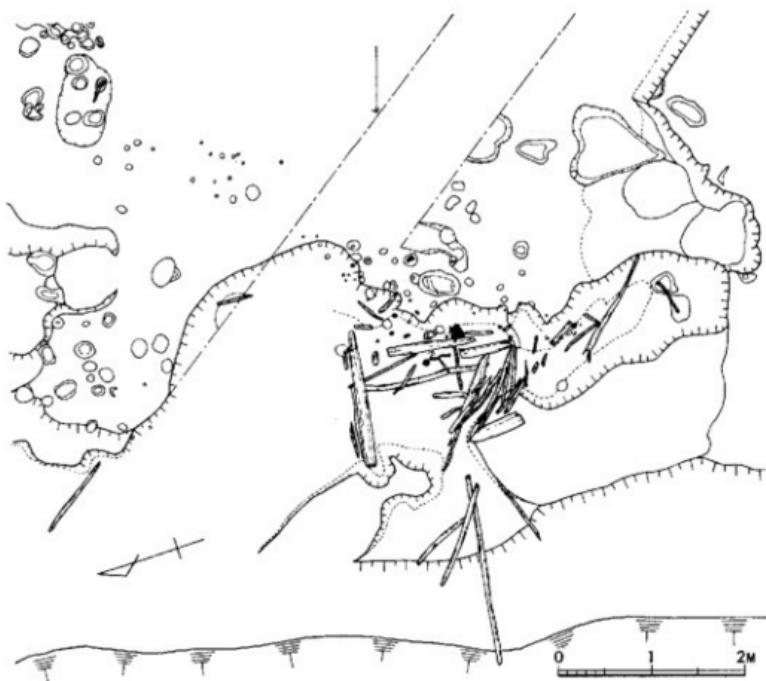
第3付設水路は第4井堰と第3井堰の二つの堰の引用水路として使用されているため水口部分は二つの水路が重複していて幅広く約3mをはかる。水が流れていた部分は幅1m程度で第2調査区の前半部までが重複して幅広いが、後半部は2~2.5mをはかる。流路全長は90m、大きく蛇行しながら流れるが、これは水田への引水と水溜をあげるために配慮であろう。水口



標高 11.60M



第28図 第6井権実測図



第29図 付設水路の井堰実測図

部分では北東に約6m北流し発掘区外にのびるが、第2調査区の水路の始点との認定性を考えた場合、第1調査区と第2調査区の間に1つの蛇行地点が存在することは推測に難くない。第2調査区では流れを北に変え約5mで次の蛇行地点になる。この蛇行地点で水路は直角に曲がり約10m東流するが、次の蛇行地点は発掘区外に大部分がでている。この蛇行地点でもほぼ直角に屈曲し約40m直線的に北流し、さらに次の蛇行地点で、直角に屈曲し約6m西流し川と合流する。

この付設水路にも川と同様に水田へ引水するために各所に小規模の堰が設置されている。まず、第1調査区内では、川より4mの地点に第3井堰より引水されたと思える水路に径5cm程度の丸杭10本を約1mの幅で打ち込み水路を堰切っている（第1小井堰）。明確な横木は存在せずわずかに横木らしいもの2本が存在する。下流に3本の渡木があり、これらも横木として

使用されていた可能性がある。第1小井堰より約2m離れた下流の第4井堰から引水した水路にも同様の小井堰が存在する(第2小井堰)。この堰は径5cm程度の丸杭8本を約1m幅に打ち込み水路を堰切る。横木の存在はない。この堰のすぐ下流にも2本の杭が存在するが、これは畦畔の補強のために打ち込まれたものであろうか。これらの小規模な堰は水田の水口と関係したものであろうことは推測するに難くはないが、水路の変更を考慮すると第2小井堰の廃棄後に第1小井堰が新設されたと考えることができる。第2調査区では第3比喩地点より約10m下流に同様の堰が存在する(第3小井堰)。この堰は7本の径6cm程度の丸杭を打ち込むが、杭の打ち込み部分は水流による侵食によって凹む。この付設水路と川の合流点の約3.5m上流にも井堰が存在する(第29図)が、これは前記3ヶ所の小井堰とは規模的に大きい差があり、前者が各水田の水口に付属したものと考えられるに対し、この堰はこの付設水路全体の水量調整の役割を果していたことが推測できる。堰の設置された場所は川の合流部分であることもあり、水路幅は約7m、深さ30cmを測る。堰は径5cm~10cmの丸太杭を両岸が最も下流に水路中央部が上流になるような半円状に無数の杭を幅50cmの間に打ち込んだもので、杭(根本のみ)あるいは杭の抜け穴と考えるものは約100ヶ所を数える。この乱杭には多数の横木が組みこまれていたと考えられ、堰のすぐ下流に多量の木材が堆積している。その中には径10~13cmの丸太材で加工された建築材と考えるものも存在するが、大部分は径5cm前の丸木の粗木である。堰との上流と下流では水路底の高さに差があり、下流が約30cm前後低いが、これは落水された水の落差によって生じたものである。この堆周辺からは木器あるいは土器、ガラス小玉1個、石磨丁等が出土している。

5 川出土の遺物

第1・2調査区の川および付設水路からは量的には多くないが種々の遺物が出土している。遺物には土器、木器、石器がある。以下、出土遺物について説明する。

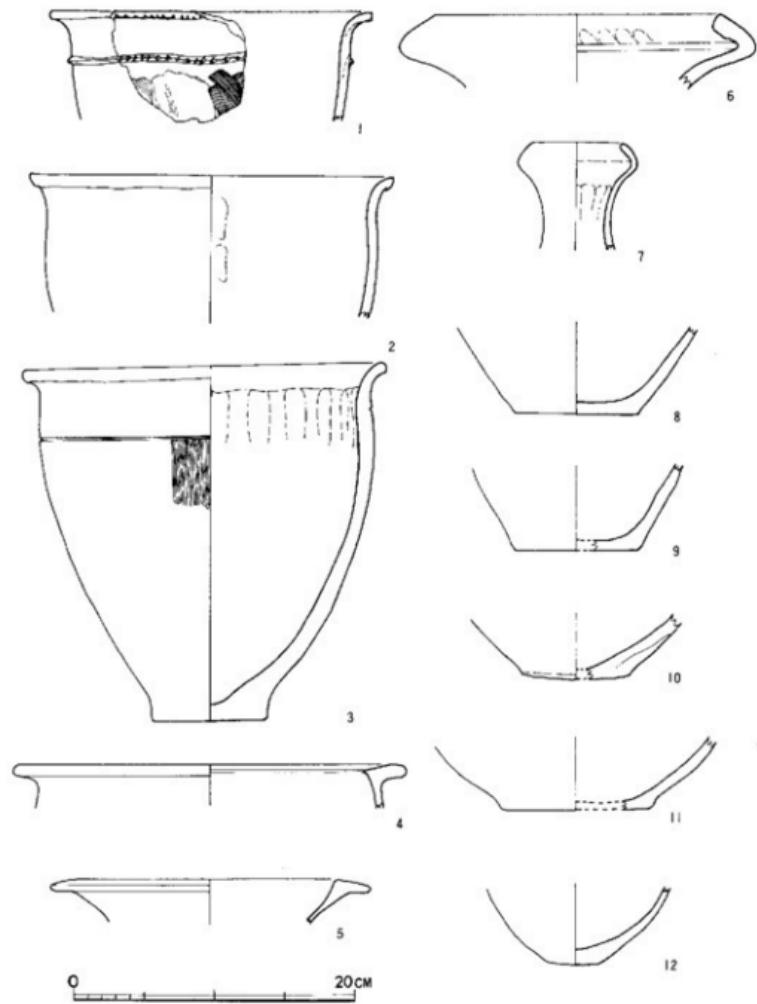
(1) 土器

土器には、弥生式土器、土師器、須恵器が含まれる。層位的には概略・弥生式土器が下層に、土師器、須恵器は上層に包含される傾向が把握できたが、時代ごとの川の変化が激しいため層位が複雑で、発掘において明確にはつかめないものもある。

a、弥生式土器(第30、31図)

弥生式土器は各時期のものを含むが、量的にきわめて少い。図示はしなかったが2点の縄文時代末期の夜臼式土器の破片も含んでいる。弥生時代前期土器は保存状態も良く、完形に近いものを含むが、中・後期の土器は磨滅が著しく、往々より運ばれてきた可能性が強い。

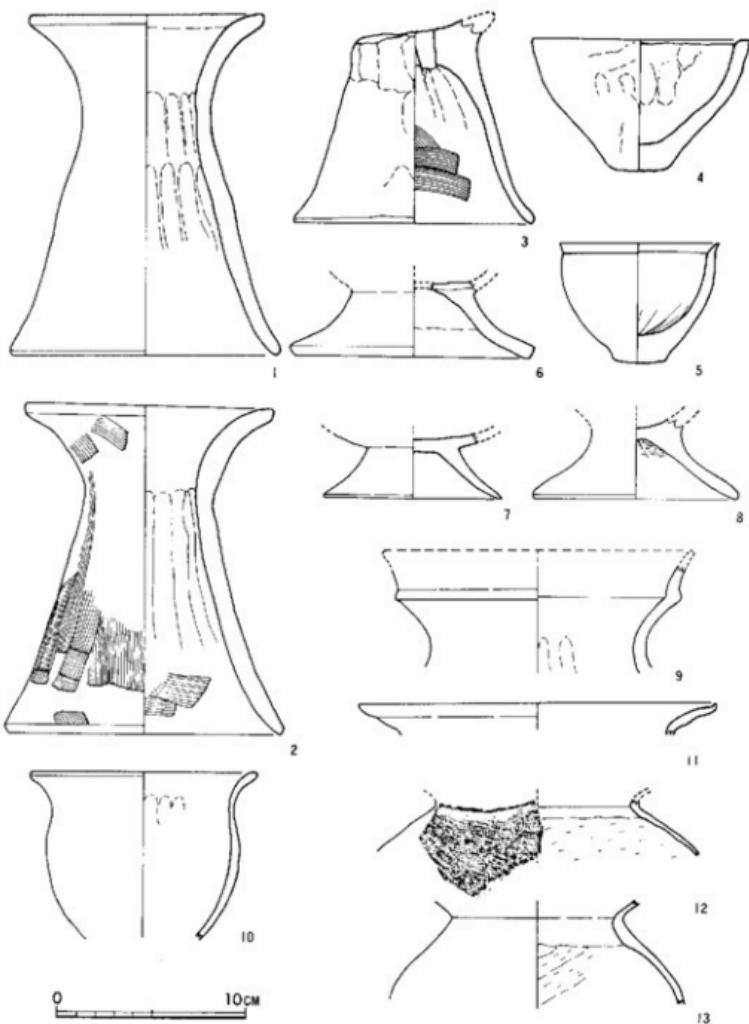
第30図1、2、3は如意形の口縁をもつ弥生時代前期の甕形土器である。1は復原図径23cm、



第30図 川山土器実測図(1)

口縁下3.5cmのところに貼り付けの刻み目突帶一条をめぐらす。口唇部の刻み目は口唇下半部に刻まれるもので、上半部にはおよばない。下の刻み目はヘラ状工具によるものである。上下二段の刻み目は共に左まわりに刻まれる。口縁～突帶の間はヨコナデ調整、下の突帶以下は底部から口縁に向って細い刷毛目調整を施す。器壇の厚さは0.6cm前後で、2.5cm幅で内傾の粘土接合部が観察できる。外面にはススの付着が著しい。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好。色調は黒褐色をなす。2は復原口径26cm、口縁部の外反は強く、腹がややふくらむ。器面は内外面共に磨滅が著しい。口縁部の下端に刻み目がありそうであるが判然としない。口唇部には一部おりかえして厚くなるところがある。外面の調整は不明な点が多いが一部に縦方向の刷毛目痕が観察できる。内面には指の圧痕部（？）が凹部になって残る。胎土には多量の石英砂を混入する。焼成は良く、色調は黄褐色をなす。3は口径26cm、底径8.4cm、高さ25.5cmを計る甕形土器である。一部欠失する部分があるが、完形品に近い形を保っている。口縁部は強く外反し、やや腹がふくらむ。口縁下3～5cmの間に断面V字形の鋭い沈線をめぐらしているが、始点と終点は合致せず、一部二条になる部分がある。器面の調整は外面が、口縁部と沈線の間がヨコナデ、沈線以下の胴上半部が縦方向の細い刷毛目調整を施し、下半部はヘラ研磨（ヘラナデ）である。その前後關係からすれば、土器の成形後全周を刷毛目で調整し、その上からナデ、ヘラ研磨を加えたことがわかる。内面は口縁部近くに指の圧痕が凹部となって残る。器壁は厚く1cm前後で重たい土器である。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は外面が灰褐色、内面が褐色をなす。北部九州の土器と比較して、全体的にスマートさに欠け、胎土も若干異なる。他地域からの搬入品であろうか。4、5はいわゆる逆L字形口縁をもつ中期の土器で4は甕形上器、5は高壺と考えられる。4は復原口径28cmを計る。口縁はL字形をなし、内側がわずかにつまみだされる。器面の内外面はヨコナデ調整、外面の一部にススが付着する。胎土には石英粒を含み、焼成は良い。色調は黄褐色をなす。5は復原口径23cm、口縁はやや下がり気味である。全体に磨滅が著しく、調整その他については明らかにできないが、この土器はもともと丹塗りであった可能性が強い。胎土には砂を混入し、焼成は良い。色調は白黄色をなす。6、7は袋状口縁を有する甕形上器である。6は復原口径20.5cm、口縁部は強く屈曲し袋状をなすが、外面には稜はない。全体に磨滅するが、外面は横方向のヘラ研磨調整で一部に丹塗りの痕跡が認められる。内面の口縁上半部は指で押された痕跡が明瞭に残る。下半部には荒い刷毛目を認める。胎土には多量の砂を混入し、焼成は良い。色調は黄褐色をなす。7は復原口径6.5cm、長頸壺である。全体に磨滅が著しく調整等については不明な点が多いが、口縁内側はヨコナデ調整、本体は丹塗り磨研の痕と考えられる。頸部にはしばりの痕跡がみられる。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良い。色調は黄褐色をなす。8～12は上器の底部破片である。8、9は中期の甕形土器の底部で、8は底径8.8cm、9は底径9cmを計る。8は全体に磨滅している。底部から胴部にかけて黒斑がある。8、9共に胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は8が

黄褐色、9が外面白黄色、内面黄褐色を示す。10、11は壺形土器の底部、12は甌、甌どちらの底部であるか不明。10、12の底部は底が丸くふくらみ気味で、後期の土器底部。11は、円盤貼り付け状をなす前期の土器である。底部径は10が7.6cm、11が10.4cm、12が4cmを計る。10～12共に全体に磨滅していて器面調整等については不明な点が多い。10は粘土苔の接合が内傾を示している。12には胴の一部に黒斑がある。10～12は共に胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良く、色調は10が黄褐色、11が外面、黒褐色。内面、赤褐色。12が黄褐色を示す。第31図1～3は墨合である。3点もほぼ完形である。1、2はほぼ同形同大の筒形の器で、口径が底径に對して小さい。口縁端、脚端部は丸くおさめる。11口径12.5cm、底径14.2cm、器高18.2cm、2は口径13.2cm、底径14.5cm、器高17.6cmを計る。1は全体に磨滅していて器面調整に不明な点が多いが、外面の脚下半部には継方向の刷毛目痕が観察できる。内面は胴上半部にしばりによる成形痕と指による調整痕が残る。2も1同様に磨滅が著しいが、器面の調整痕の残りは極めて良い。外面に下から上にかけた刷毛目調痕が右まわりに施される。内面は脚下半に横方向の刷毛目調痕があり、頭部は成形時のしばりの痕跡が凹凸になって残る。1、2共に胎土には多量の石英粒を含む。焼成は良い。色調は1が灰褐色、2が黄褐色を示す。3は跨形器台である。合部径6.5cm、脚端径12.7cm、器高11cm（11.4cm）を計る。突起部を欠いている。台部には径1cmの焼成前の穿孔がある。器面は全体に磨滅する。外面は指による調整で凹凸が著しい。内面は上半部は指による調整で下半部は横方向の刷毛目によって調整する。体部上半に黒斑がある。胎土には多量の石英粒を含む。焼成は良く、色調は黄褐色を示す。4、5は小型の鉢形土器である。4は口径11.6cm、器高7cm、底部は径2.4cmで小さい。全体が手づくねで成形されているため、器面は指による圧痕が凹凸になって残り、粘土のしわも顕著である。胎土には砂を混入し、焼成は良い。色調は外面が黒褐色、内面が白黄色を示す。5は口径8.6cm、底部径2.6cm、器高6.4cmを計る。口縁はやや外反し、口唇部は尖る。口縁部下の外面には鋭い細かな沈線一条をめぐらす。全体に磨滅が著しく、体部の調整等については不明瞭なところが多い。内底部にヘラによる刻みが右まわりに認められる。底部には粘土のひねりが認められる。胴の3分に黒斑がみられる。胎土にはやや大きめの砂を混入する。焼成は良く、色調は黄褐色をなす。6～8は甌形土器の御合である。脚端部径は6が12.6cm、7が9.1cm、8が11cmを計る。6の器面調整は外面がヘラ研磨（？）で内面の下半にわずかに刷毛目痕が観察できる。脚部と体部の境に粘土接合部がある。7、8は全体に磨滅が著しく器面調整等については不明な点が多い。7については内面の脚上半に刷毛目の調整痕がみられる。6～8は共に胎土は良質の粘土を使用し焼成は良い。色調は6、7が灰褐色、8が白黄色を示す。9は口縁端を欠く。復原口径16.8cm、口縁下半の屈曲部は突帯状に段を形成する。全体に磨滅するために器面調整は不明、頭部の内面は指による調整が凹部となつて残る。胎土は質が良く、焼成は良い。色調は外面が灰褐色、内面が黄褐色を示す。10は壺形土器で復原口径12.1cmを計る小型品

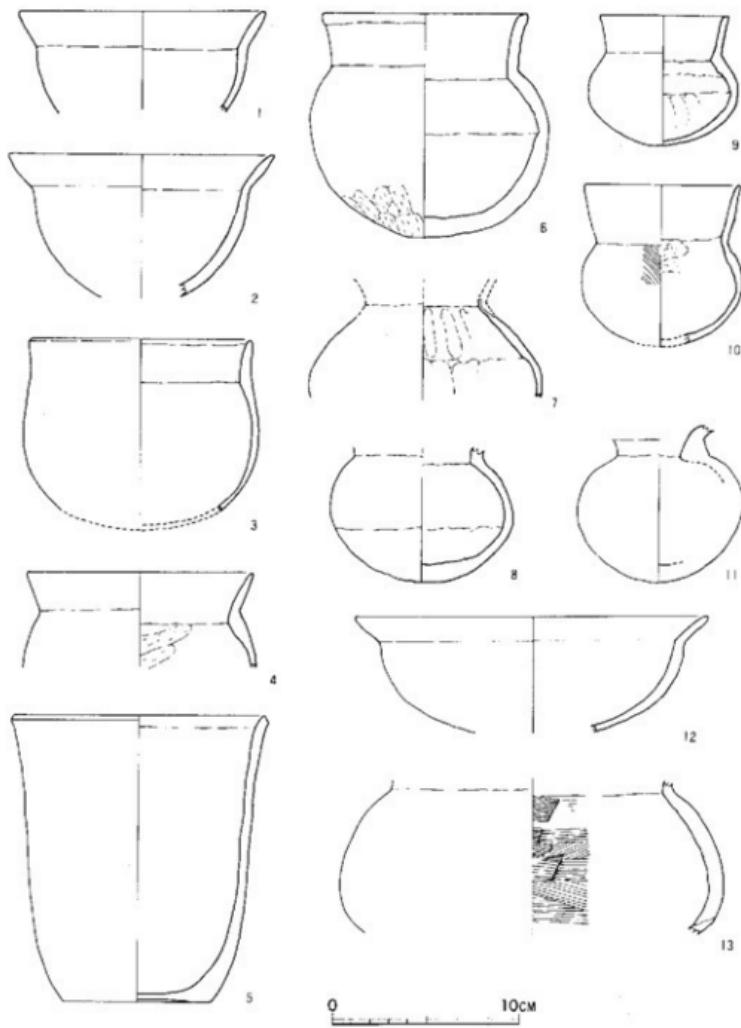


第31区 川盐上土器类图(2)

である。口縁は強く外反し端部は丸くおさめる。全体に磨滅していて器面調整は不明瞭であるが、外面には荒い平行タタキが、内面の頸部には指圧痕が観察できる。胎土には砂を混入し、焼成は良い。色調は外面が赤黄褐色、内面が白褐色を示す。以上、1～10の土器は弥生時代後期後半～終末に比定できる。

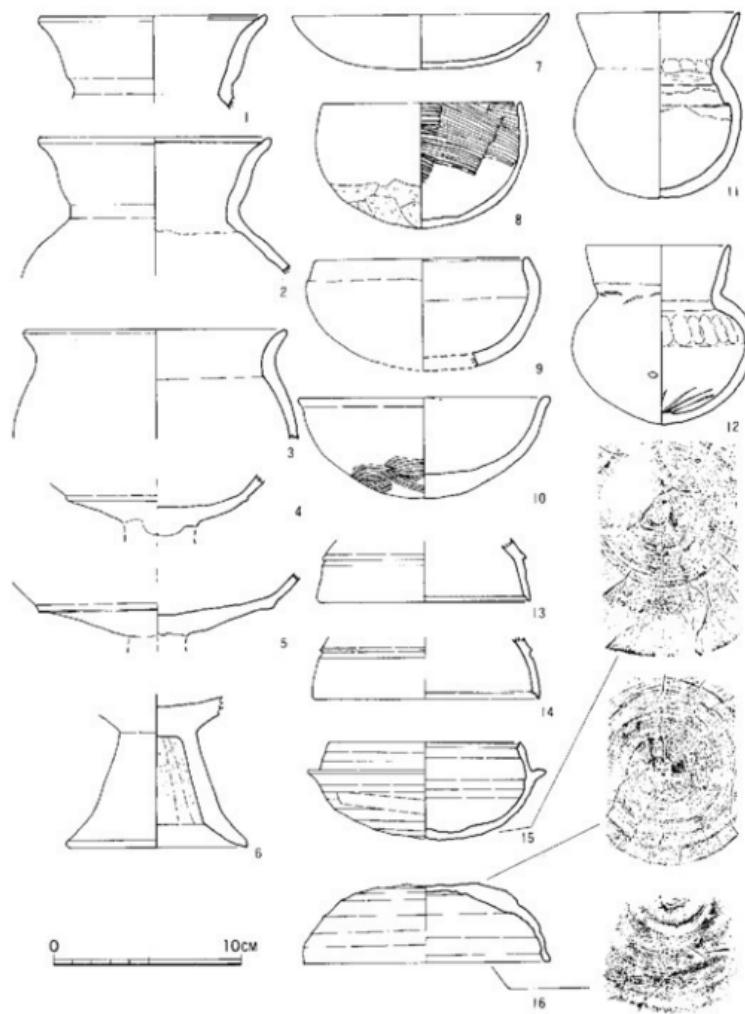
ひ、土師器（第31、32、33図）

第31図11～13は古式土師器の鉢形土器の破片である。全体に磨滅している。11は口縁部破片で復元口径19.2cm、口縁端部が上方につまみあげられる特徴をもつ。内外面共ヨコナデ調整である。12、13は頸部から胴上半部にかけての破片である。12は頸部の復原径は10.9cmを計る。外面は細い右さがりのタタキ痕が存在するが磨滅のため不明瞭、内面は頸部よりやや下りヨコ方向のヘラ削りを行う。13は頸部の復原径9.1cmを計る。外面の調整は磨滅のため不明瞭である。一部にススの付着が認められる。内面は頸部よりやや下って右上へかきあげるヘラ削りが施される。11～13は共に胎土に砂を混入し、焼成は良い。色調は11が黄褐色、12が黒灰色、13が白黄色をなす。11～13はその特徴が壺内の庄内式に通じるもので、ヘラ削りやタタキからすれば大和型の庄内式かやや下る時期のものと考えるが、磨滅が著しいため判然としない。性地域からの搬入品であることは間違いない。第32図1～3、12は小型の鉢形土器である。復原口径は1が13.2cm、2が14.1cm、3が12cm、12が18.9cmを計る。器形は口縁部は屈曲して外反し（3のみは直立する。）底部は丸底になる。1、2、12は全体に磨滅していて器面調整等について不明瞭な点が多い。2は外面にわずかに刷毛目痕が観察できる。一部に黒斑が認められる。3は口縁部の内外面はヨコナデ調整、胴部はヘラ研磨、内面はヘラ削りを丁寧に行う。外面には大きな黒斑がある。1、2、12の胎土には砂を混入し、3の胎土は良質なものである。焼成は1～3、12共に良好で、色調は1が褐色、2が灰褐色、3は外面が黒褐色、内面が灰褐色、12が黄褐色を示す。4、6～11はいわゆる小彌丸底壺である。4は復原口径12.1cm、頸部径10.7cmを計る。全体に保存状況が悪く器面調整等の詳細については不明。胴部内側は左→右上のヘラ削りである。胎土には砂を混入し、焼成はもろい。色調は赤褐色をなす。6は口縁部がほぼ直立する。口径11cm、頸部径10cm、器高12cmを計りやや大きめである。器面の調整は外面の口縁部が横方向の刷毛目調整と考えられわずかに痕跡を残している。胴部は下地に刷毛目を施しその上をナデによって調整したもので、わずかに刷毛目痕が残る。底部が上から下へのヘラ削り、内面は横方向のヘラ削りであるが、その痕跡は明瞭でない。胎土には多量の砂を混入し、焼成は良い。色調は白黄色をなす。7は頸部から胴上半部にかけての破片で、頸部の復原径は6.6cm、頸部は粘土接合部で割れている。外面は横方向のヘラ研磨で調整する。内面には二段にわたって指圧痕が残る。胎土は良質の粘土を使用し、焼成は良好。色調は灰褐色を示す。8は口縁部を欠失する。頸部径7cm、胴部は球形で高さ6.8cm、全体に磨滅しており調整痕は不明瞭である。外面の胴上半部は横方向の刷毛目の痕跡がある。内面は横方向のヘラ削り



第32図 川出上土器実測図(3)

で、頸部に稜線を形成する。胎土、焼成は共に良好で、色調は白黄色をなす。9はほぼ完形であるが、全体に保存状態が悪く詳細は不明な点が多い。口径6.9cm、頸部径6.2cm、胴部最大径はほぼ中央にあり8cm、器高7cmを計る。内面上半はヘラ削り、下半部は指による調整である。胎土は良質の粘土を使用し、焼成はあまり。色調は黄褐色で、胴の一帯に黒斑が認められる。10は復原口径8.4cm、頸部径7cm、胴部最大径はほぼ中央にあり8.6cm、器高8.6cmを計る。外面は少し磨滅して調整痕は不明瞭である。口縁部外面は横方向の刷毛目、胴部上半は斜方向の刷毛目であるが詳細は不明。内面は口縁部がヨコナア、胴部はヘラ削りである。胎土は良質で焼成は良い。色調は黄褐色で一部に黒斑がある。11は口縁部を欠失するが二亘口縁を有する壺である。頸部径5cm、胴部最大径はほぼ中央にあり8.8cmで胴部は球形をなす。頸部は約1cmたちあがり、急に外にひろがるがその上部は失う。頸部は指で調整、外面は磨滅のため詳細は不明、内面は観察できないが、上半部に指の圧痕が顕著である。器底が厚く重たい土器である。胎土は砂を混入し、焼成は良い。色調は灰褐色をなす。5は復原口径13.6cm、底座径8cm器高15.3cmを計るコップ状の土器である。底部はややあじ底になる平底で安定している。器面の調整は外面が縱方向のヘラ研磨、外底部にもヘラ研磨を施す。内面はナデ調整で丁寧なつくりである。胎土には細い砂粒を混入するが良質で焼成は良い。色調は黄褐色をなす。弥生時代後期のジョッキ形土器との誤認性が強く、木質料も把手がついてジョッキ形土器になる可能性が強い。時期的には弥生時代に属するかもしれない。13は頸部から胴部にかけての破片である。頸部の復原径は15.2cm、胴部最大径は下方にあり20.6cmを計る。胴部は扁平に近い。外面は磨滅のため明らかでない。内面は横方向の刷毛目で左まわりに施される。上半と下半の刷毛目には違いがあり、下半部の刷毛目がやや大きい。胎土は良質で焼成は良い。色調は黄褐色をなす。第33図1、2は広口の壺形土器の口縁部破片である。1は復原口径12.2cm、頸部径8.4cmを計る。頸部が指ナデによってやや印み、二道口縁の退化型式であろう。全体にやや磨滅する。口縁部内外面はヨコナア調整。外面にススが付着する。口縁内側に浅い沈線が部分的に認められる。胎土にはわずかに砂を混入するが良質、焼成は良く、色調は黒褐色をなす。2は復原口径12.4cm、頸部径8.9cmを計る。壺形各部の整形は1と同様である。外面の頸部は指おさえの痕跡が残る。内面は指によるおさえの後、ヘラ削りを行っている。胎土、焼成は1と同様、色調は黄褐色をなす。3は甕形土器である。胴部はややふくらみ、口縁部はゆるやかに外反する。復原口径14.2cmを計る。全体に磨滅が著しく器面調整等の詳細は不明。胎土には砂を混入し、焼成はもろい。色調は赤褐色をなす。4～6は高環形上沿で、4、5が坏部、6が脚部である。4は坏底部の破片で、口縁部と底部との境に明瞭な段を有する。段の部分には明瞭な粘土接合痕がある。坏部と脚部の接合部はへそが出ていて、粘土の接合には大きな刻みを入れて接合の強化をはかっている。全体に磨滅していて、調整痕は不明瞭であるが坏部内部は下地に刷毛目調査を施し、その上をヘラ研磨したものと思え、一部に刷毛目痕が観察できる。

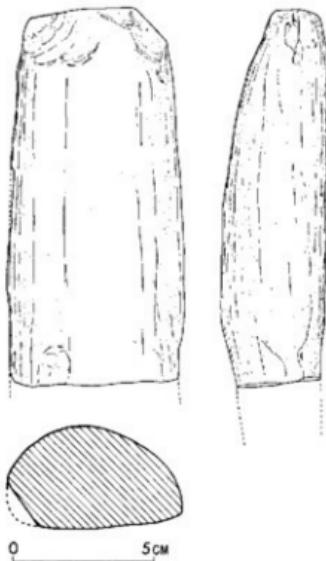


第33図 川辺土土器実測図4

胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良い。色調は黄褐色をなす。5も4と同様に坏部で、口縁部との境に段を形成しゆるやかな稜をつくる。外面共に横方向のヘラ研磨調整で、胎土は精選された良質の粘土を使用している。焼成は良好で色調は赤褐色をなす。6は脚端径9.6cm、器高6.2cmを計る。脚は下半部があまり広がらずわずかに屈曲するもので、筒部は横方向の右まわりヘラ削りで調整する。全体に磨減し細部は不明であるがヘラ研磨調整したものであろう。7～10は楕形上器であるがそれぞれわずかな差がある。1は口径13.8cm、器高2.9cmの浅い楕形をなす。器面はやや荒れているが外面は手による調整で、粘土接合部等にすきまがある。内面はヘラ研磨調整。胎土には石英砂を混入しているが粗良なもので、焼成は良い。色調は灰褐色で外底部に黒斑がある。8は口径10.7cm、器高6.7cmを計る。やや深めの楕で口縁部はわずかに内傾する。器面の調整は外面の上半部が指による調整で、下半部が最初横方向のヘラ削りを右まわりに施し、それ以後たて方向のヘラ削りをする。内面は指で調整後、上半部を刷毛目で口縁部から同心円状に左まわりに施す。胎土は精選された良質のもので、焼成は堅敏、色調は黄褐色をなし、口縁部から脚部にかけて黒斑がある。9は口径11.4cm、器高6cm、口縁部近くで屈曲し内傾する。口縁外面はヨコナデ調整、内面は板状の工具によるナデ調整、胎土は精良な粘土を使用し、焼成は堅敏、色調は灰褐色をなす。10は口径13.5cm、器高5.4cmを計る。丸底の底部からゆるやかにたちあがり口端部で屈曲し外反する。器面調整は外面の上半部が指による調整で、下半部はその上に刷毛目を施す。刷毛目は横・脚部は左まわりの回転でヘラ削りが施されるが、脚上半部においては成形時の粘土等の痕跡が輪積み状に明瞭に残っている。粘土等の幅は1.2cm前後で内傾に接合されている。胎土には粗い砂を混入し、焼成は堅敏、色調は黄褐色であるが、脚部2ヶ所に黒斑が認められる。11、12は小型丸底壺で、ほぼ完成である。第5井垣塾の掘り込み部の底に2個並列して出土した。他の井垣同様に供獻された土器であろう。11は口径8.7cm、頸部径6.8cm、脚部最大径は胴の中央にあり9cm、器高10cmを計る。器面の調整は外面はヘラ研磨で、底部にはヘラ削りの痕跡がわずかに存在する。内面の頸部は指によって押えた痕跡の明瞭で、端部にも沈線をめぐらし段を形成する。外面共にヨコナデの調整。胎土は粗良で焼成は堅敏。色調は外面が黒灰白、内面が白灰色である。12は口径7.7cm、頸部径6.6cm、脚部最大径は胴のやや上方にあり9.8cm、器高9.6cmを計る。器面の調整は口縁部の内外面が下地に刷毛目を施し、その上をナデによって調整し脚部外面はヘラ研磨調整で、頸部にはヘラの痕跡が沈線状になって残る。脚上半部の内面は指によって押された痕跡が明瞭に残る。下半部はヘラ削りで、内底部には右まわりのヘラの削り痕が放射状に残る。外面の脚の下方に粗糲痕がある。胎土には石英砂を混入し、焼成は堅敏、色調は灰褐色をなし、口縁部から脚下部にかけて黒斑がある。

c、須恵器（第33図）

須恵器はすべて古墳時代の川を埋める粗砂層から出土したもので、量的には極めて少い。図



第34図 川出土石器実測図(1)

示したものは壺で、13、14、16は壺蓋、15は壺身である。

13は復原口径11.4cm、体部と天井部の境に突起と凹線をめぐらす。口縁端部にも一条の沈線をめぐらし段を形成するが、段は跳くない。内外面ともヨコナデによって調整する。胎土は粘良で焼成は堅緻、色調は青灰色をなす。14も13とはほぼ同様であり、復原口径12.2cm、天井部と体部の境に凹線をめぐらす。ヘラ削りの方向は左まわりである。内面は指による調整、胎土には砂粒を含み、焼成は良い。色調は黄褐色をなす。15は口径10.2cm、受部径12.8cm、器高5.3cm、蓋受けのたちあがり高1.5cmを計る。蓋受けのたちあがりは垂直に近く口縁端部には沈線をめぐらし段を形成する。外底部は $\frac{3}{4}$ の範囲に左まわりのヘラ削りが施される。口縁部と体部および内面はヨコナデ調整外底部にヘラ記号がある。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は外面

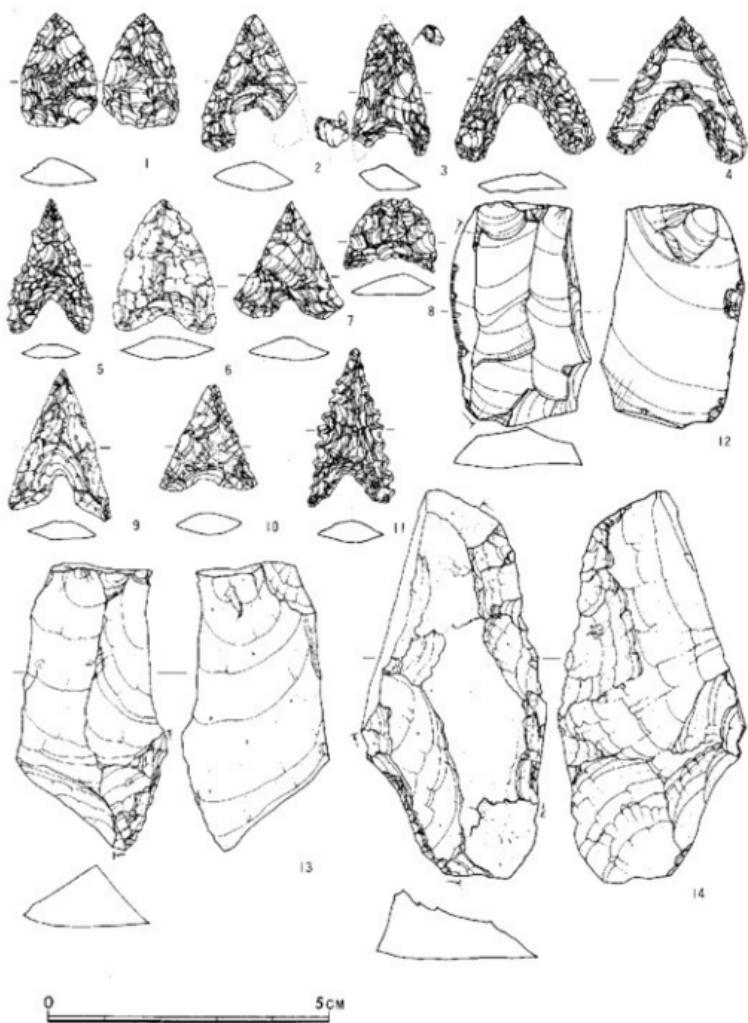
が青灰色、内面が赤灰色をなす。16は口径13.3cm、器高4.2cm、天井部と体部の境は不明瞭。天井部のヘラ削りは左まわりで天井部の約半に施される。口縁端部は丸くおさめる。体部、内面はヨコナデ調整、天井部内面には粘土紐の痕跡が残る。天井部の内外の面にそれぞれヘラ記号がある。胎土には砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は青灰色を示す。

(2) 石器（第34、35図）

石器には石鎌、スクレイパー、磨製石斧がある。すべてが川出土ではないが、明確な遺構に伴なわない石器についてはここで一括して説明する。

a、磨製石斧（第34図）

1区の川から出土した磨製石斧で刃部を欠失する。現存部は長さ13.5cm、幅6.3cm、厚3.7cmを計る。玄武岩を素材とした石斧で今山產と考えられる。全面に打割段階の剝離面が残り、その稜を敲打によってつぶしているが、研磨の痕跡は見い出せない。刃部を欠失しているので明確にはいえないが、今山から搬出された末製品段階のものと考えられ、研磨し製品とする以前に埋った可能性があるが、今山における石器生産の実態が100%明確でない現在、今山から搬出される段階を理解する資料としてその可能性を考慮するにとどめ、今後の類例の増加を持ち



第35図 石器実測図 (2)

たい。

b、石礪（第35図）

石礪は11点ある。黒曜石を素材とするものが9点、古銅輝石安山岩を素材とするもの2点がある。形は様々で類別するのは困難で一点ごとに説明する。

1は黒曜石製で長さ2cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmの三角形をなすもので、両面共やや荒い押圧剝離で整形される。2も黒曜石製であるが全体に磨滅している。決りの深い鋸形鎌であるが片脚を失する。長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmで、両面より丁寧な押圧剝離で整形される。3も黒曜石製で、抉りは浅く、脚が小さい。片脚と先端部を失する。両面共にやや荒い押圧剝離で整形される。長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。4は抉りが深く長脚の鎌である。主要剝離面を残し、両面共周縁部から細い丁寧な押圧剝離を加えている。長さ2.5cm、幅2.5cm、厚さ0.3cm、黒曜石製である。5も黒曜石製で三角形の抉りをもつ。長身の鎌で、長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.15cm、両面から押圧剝離を加え、側辺は浅い鋸齒状をなす。身が薄い石鎌である。6は古銅輝石安山岩製で、浅い抉りをもつ三角形鎌で両面よりやや荒い押圧剝離を加えて整形している。長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。7に黒曜石製で、浅い抉りをもつ三角形鎌で、両面共丁寧な押圧剝離で整形する。長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm。8も黒曜石で、浅い抉りをもち、先端部は尖らず丸くなり全体の形は半月形をなす。両面共押圧剝離で整形する。長さ1.3cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。9は古銅輝石安山岩製で、抉りは深い。両面共やや荒い押圧剝離で整形する。長さ2.7cm、幅2.3cm、厚さ6.3cm。10は黒曜石製で、全体に磨滅している。抉りの浅い三角形鎌で形状は7と同じである。両面共に丁寧な押圧剝離で整形される。長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。11も黒曜石製で三角形の抉りをもつ。身は長い。両面共丁寧な押圧剝離で整形し、側邊に鋸齒列をつくり出した鋸齒鎌である。長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。以上の石鎌は一部、繩文時代に含まれるものもあるかもしれないが、大部分は弥生時代に属すると見て大過なかろう。

c、スクレイバー（第35図）

12は黒曜石製。定形化した石核から剝離された縱長剥片である。打面は調整されていて、主要剝離面の裏面には三面の剝離面がある。縱長の一側に使用痕が観察できる。長さ4cm、幅3cm、厚さ0.7cmを計る。13は古銅輝石安山岩の不定形剝離を素材としたスクレイバーで、一部を加工し刃部を形成する。長さ5cm、幅2.6cm、厚さ1.1cm。14も古銅輝石安山岩を素材としたスクレイバーで一部を失する。側邊に一面から加工を加え刃部を形成する。刃部の反対側は両面より加工していく、欠欠部を考えると石匕である可能性がある。長さ6.9cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmを計る。

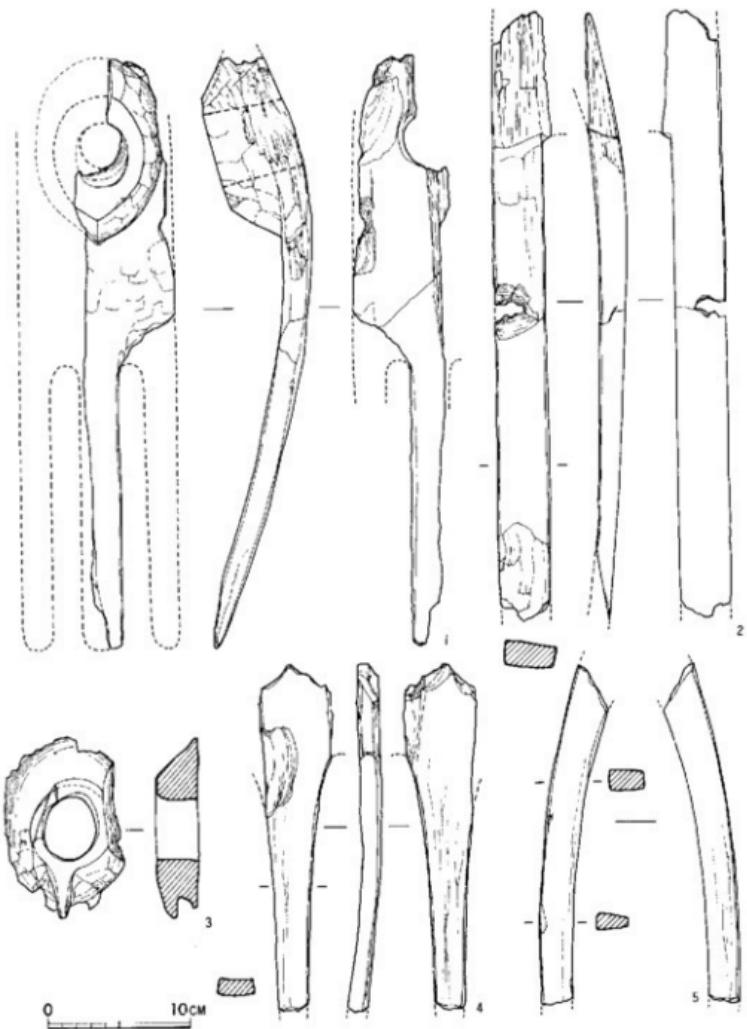
(3) 木器（第36～42図）

木器は大部分は農耕具であるが、一部に生活用具、祭祀具と考えるものを含む。大部分が破

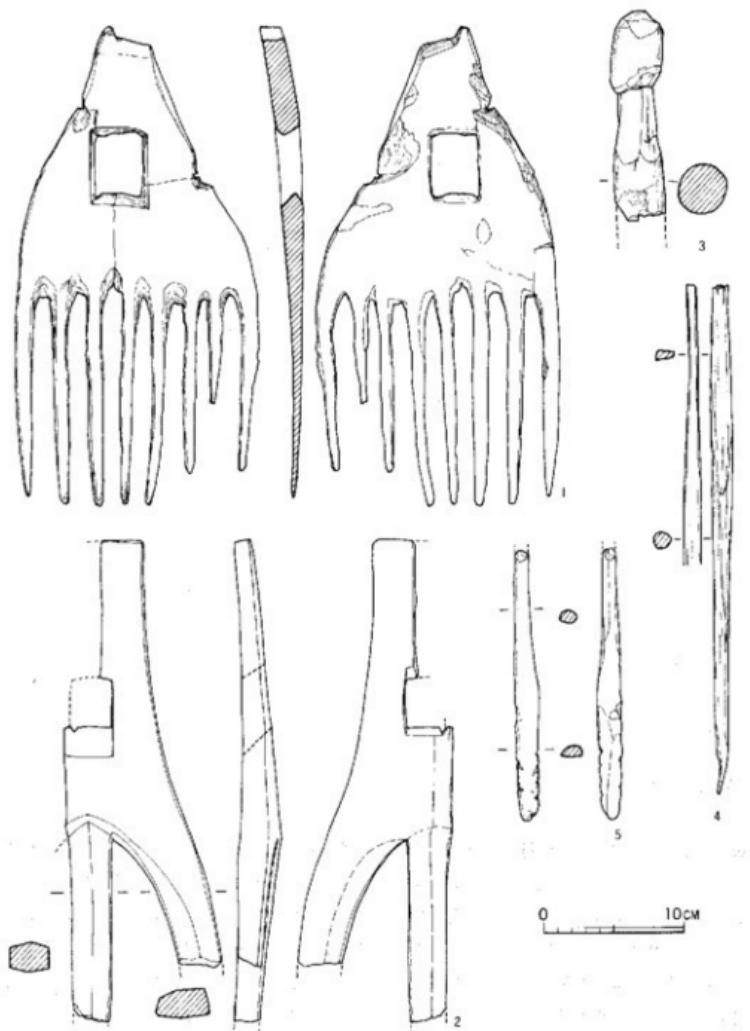
片で完形品は少い。農耕具には叉鍬、鋤手鍬、鍬、その他があり、生活用具として杵、櫛、祭祀用具として木製鉢（？）がある。時期的には弥生時代前期～古墳時代にわたる。肩位、その他で時期の判別がつくものについては各説明において述べる。以下、各木製品について詳述していく。

a 農耕具

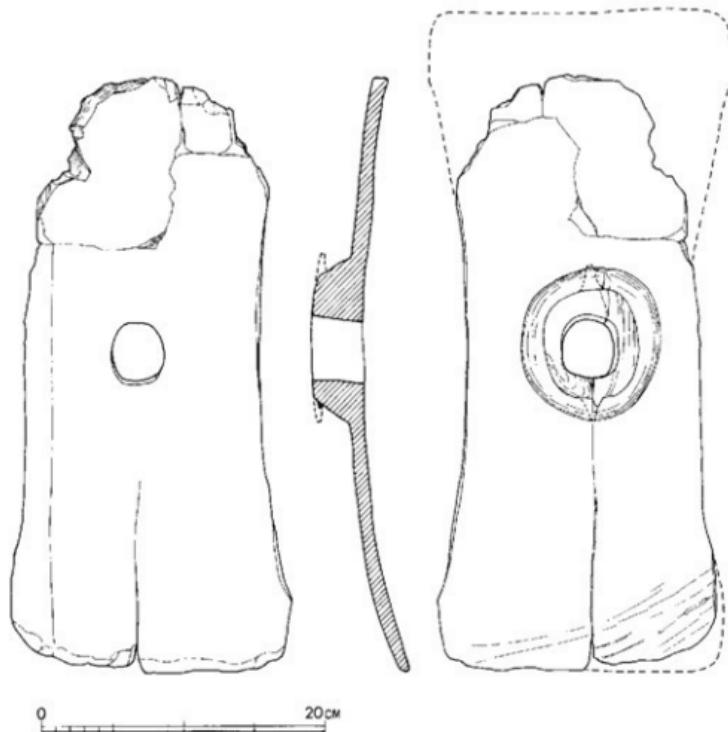
第36図1は三叉鍬である。現存するのは柄つばから刃先にかけての破片であるが、現存部から形状の復原は可能である。柄つばの横の側面は現存していて、その反転を行うと、身幅は11cm前後の狭いもので刃部は三叉に分かれていたことがわかる。くわ身の頭部は完全に消失していて推測する以外にないが、刃先は中央の先が残存していてその幅は2.8cm、長さ20cmを計る。齒の間は2cm前後となる。全形を復原すると、全長47cm前後、身幅11cm前後の幅の狭い三叉鍬となる。くわ身は厚さ1.5cm～2cm前後で刃先は薄くなる。また強く湾曲している。柄つばは5cm×3.5cmの楕円形をなし周囲には高さ3.5cm前後、13.5cm×9.5cmの隆起がある。くわ身と柄の角度は76度をとる。素材はカシを利用し全面に丁寧な加工で仕上げる。弥生時代前期に属する。2も1と同様に叉鍬であるが、刃先のみであるので何本齒の鍬（あるいは鍬）であったかは不明である。素材は1と同様にカシを利用している。刃先は幅3.5cm、厚さ1.5cm～2cm、長さ34.5cm以上で1より大型のものである。くわ身はわずかに湾曲している。加工は非常に丁寧である。弥生時代に属するものである。3は鍬の柄部の破片である。柄つばは径4cmの円形で、その周囲は高さ3cmの楕円形の隆起があり、隆起部の下端部に長さ3cmの紐かけ用の突起があるが、上端部については欠損していて不明であるが残存状態からすれば、もともと存在しなかった可能性が強い。素材はカシを利用したもので、弥生時代前期に属する。4、5も同様に叉鍬の歯の破片である。4は三叉鍬の中心の歯と考えられ、両辺に叉の部分がある。幅は5cmで徐々に狭くなり現存部末端で2cmを計る。くわ身は湾曲し、厚さは1.5cm前後である。5は叉鍬の外側の歯で現存長24cm、幅は上部で3cm、刃先に向って狭くなり2cmを計る。厚さ1.5cmで刃先に向って薄くなる。4、5共に古墳時代に属する。第37図1は八叉鍬でくわ身の頭部と刃先の一端を欠くのみではほぼ完形である。平面形は頭部が狭く、刃先に向かって幅広くなり、刃部は8本の歯がつくり出される。左右はシンメトリーにならず柄つばは左にずれている。8本の歯は幅1cmで刃先がやや狭くなる。長さ15cm前後、厚さは基部で1cmで刃先に向って薄くなる。齒間幅は1cm前後である。くわ身はわずかに湾曲する。くわ身は頭部幅4cm、最大幅17cm、全長34cmを計る。柄つばは5.5cm×4cmの長方形で柄と身の角度は54度である。素材にカシを利用する。弥生時代に属する。2は三叉鍬で、柄つばと歯の2本が現存し、その全形を推測できる。くわ身はやや湾曲し頭部が狭く刃先に向って広くなる。全長については歯先を失うためはっきりしないが、現存長35.5cmで、少くとも60cm前後にあったと考える。頭部幅7.5cm前後、最大幅19cm前後を計る大きさになる。柄つばは5.7cm×3cmの長方形で、くわ身と



第36图 大器实剥件(1)



第37圖 木器実例(2)

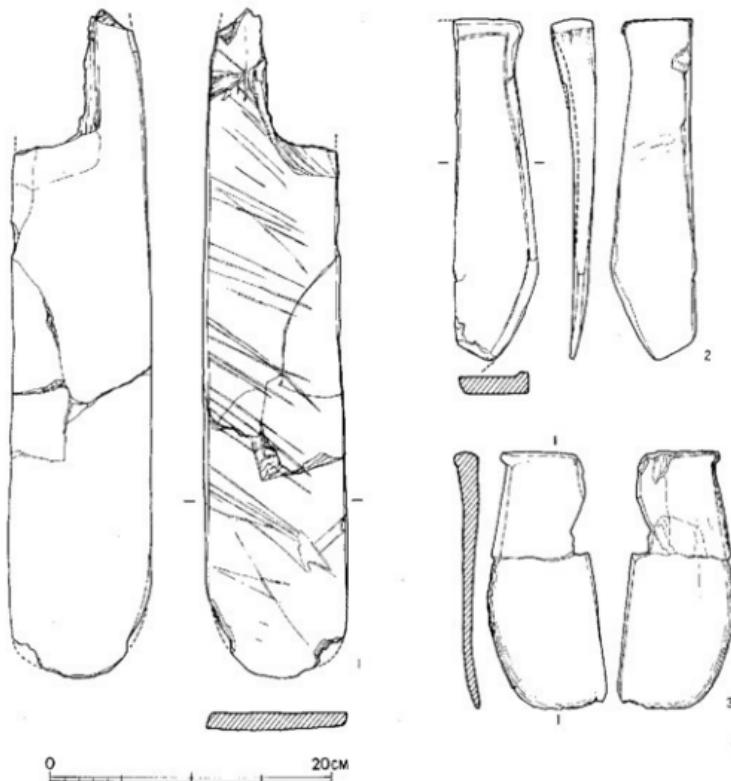


第38図 木器実測図(3)

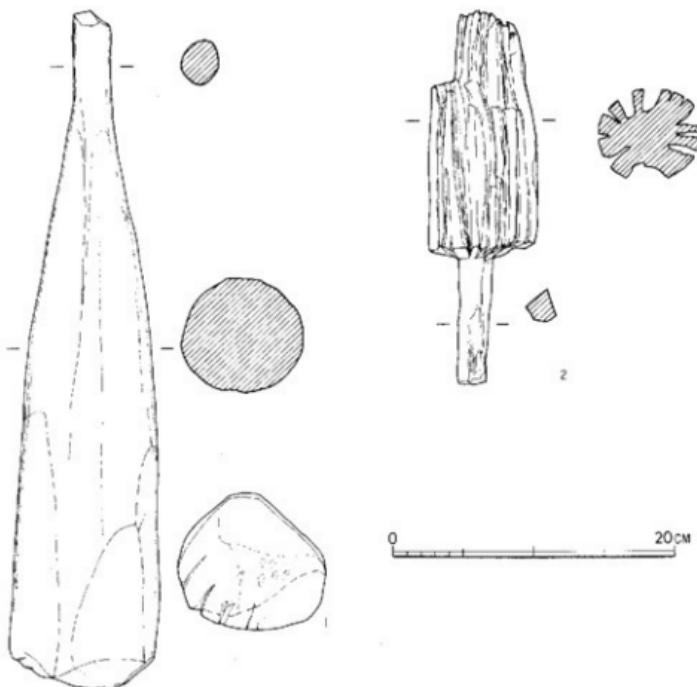
柄の角度は48度である。素材にカシを利用する。第38図1は諸手鉄である。刃先の一部を欠失するが、全形の復原は可能である。くわ身は湾曲している。柄つばは付近のくわ身の中央が16.5cmと最も狭く、両端の刃先に向って広くなる。刃先は幅20.5cmであるが現存する一方の刃は使用によって片方が磨滅し刃部が斜めになる。推定全長は47cm前後である。柄つばはくわ身のはば中央にあり径4cmの円形でその周囲には高さ2.5cm、径11cmの円形の隆起があり、一部を欠損するが、一部に繩かけの突起が認められる。おそらくは隆起の上・下に突起がつくりだされていたと考えられる。素材にはカシを利用する。

第39図1～3は鉗と考えられるもので、いずれも完形を保つものはない。1は現存長47.5cm幅

10cmを計る。鍔身と柄は共木で作られたものと考えられ、刃先から約42cmのところから順次幅をせばめているが柄部を失う。鍔身は長さ42cm、幅10cmの狭身のもので、厚さ1.3cm前後で、刃部は薄くなる。刃先は使用痕が著しく、刃部の片側が磨滅し刃が斜めになっている。身部分の片面には斜のキズが多数存在する。素材にはカシを使用する。2は鍔身の破片で側刃の約1/4を現存するのみである。現存長24.2cm、現存幅6cmを計る。身の頭部の側刃が突起状に張り出す。側刃には削り出しの跡（幅1cm～0.5cm）があり、刃部にいくにしたがい消える。身はわ



第39図 木器実測図(4)



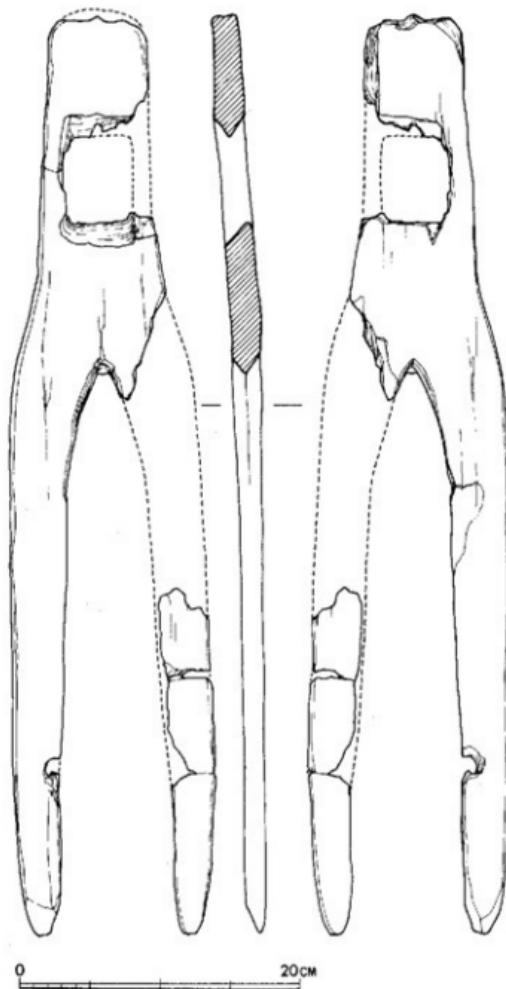
第40図 木器実測図(5)

すかに湾曲し、頭部（3 cmの厚さ）から順次薄くなり刃先は0.4cmの厚さである。全体に丁寧なつくりである。素材にはカシを利用する。3も2と同様の形状を示すが、1と比較しやや小さい。鎌身の頭部には両端に突起がつくものである。幅0.6cmの縁取りがあるが磨滅し保存状態は悪い。鎌身は頭部の厚さ3 cmで刃部に向ってわずかに湾曲しながら薄くなり、刃部の厚さは0.5cmほどである。素材としてはカシを利用する。弥生時代に属するものであろう。第41図は二叉鉄ではぼ完形を知ることができるが一側の歯は腐蝕し部分的に残るのみである。頭部を一部欠くが本来は丸味をもっていたと考えられる。全長65.8cm、頭部幅7cm、歯の部分で広くなり幅13.6cm、歯は基部で幅6cm、先端に向って狭くなる。厚さは2cm前後で、かなりの大形品である。柄つばは9cm×5cmの長方形で、鎌身と柄の角度は47度をとる。全体に保存状態が悪

い。カシを素材として利用する。製作法は丁寧でなくやや荒い。古墳時代に属する。

b 生活用具

生活用具として杵、槌各1点がある。第40図1は堅杵で、握りの部分で半折している。現存長48cm、推定全長90cm前後と考えられる。握りの部分は $2.6\text{cm} \times 3.3\text{cm}$ の横円形断面である。握りから順次太さを増し身に移行し、先端部では $10.5\text{cm} \times 9.8\text{cm}$ の不整円形の断面になる。断面は荒削りで、使用による磨滅は少くて凹凸が著しいが、全体的にみれば丸味をもっている。古墳時代の第2調査区第5井堀で出土したものである。2の槌は保存状態が悪いが、ほぼ全形を保っている。全长21.7cm、乾燥しているためひび割れが著しいが、槌部は7.3



第41図 木器火測(6)



第42図 木器実測図(7)

$cm \times 6.6cm$ の梢円形の断面で長さ17cm、把手部分は削りだしで、一辺2cmの不整形の断面を有し長さ9cmである。第2調査区付設水路の第4小井掘出土で、1、2共に古墳時代に属する。第42図2は、容器類の脚と考えるものである。現存長11.2cm、断面5.2cm~5cm×4cmの長方形をなすが一角は角ぼらず丸くなる。直角の角を形成する二面(a、b面)には漆を塗って文様を描く。a面は黒漆を下地としその上に5本一組の細線の平行線を1単位とし1.8cmと1.4cmの間隔で3組を描いている。b面はa面と同様にa面より連続して3組の平行線の文様があり、その上3cmに赤漆が面的に塗られているが文様の詳細は不明。全形を知ることができるのが残念である。

c 祭祀具

第42図1は木製鉢と考える木製品である。現存長63cmを計る。ほぼ完形である。形は先端が尖り、体部に左右両側にそれぞれ4個の突起部をもつ。側面も同様で、突起部がやや張り出している。身の中央には鉢がはしる。突起部は先端に近い部分を除いて欠損しているが、その破損部から推測すると1cm~2cmが張り出す突起となる。身の長さ40cm、茎長23cm、最大幅6cm、くびれ部幅4.5cm~4cm、厚さ3

$cm \sim 2 cm$ で、断面は菱形をなす。素材としてイスの木を利用する。使用目的については後章で考察を加えたいと思う。古墳時代に属する。

d その性

不明木器として第37図3～5がある。3は丸太棒の先端に刻みを入れ、くびれ部をつくり出したもので、その加工は粗い。現存長は15cm、直径3.5cmのもので、農作業用の棒類と考えられるものである。4は全長36.3cm、径1.4cmの円形の断面を有する削り出しの木製品で先端に向かって徐々に細くなり、先端は尖る。現在はやや乾燥し先端が曲っている。上端部は両面が削られ平坦面をつくる。6も5と同様のものと考えられ、図の下端は一面より削られ平坦面をつくり出している。平坦面の断面は半円形をなし、丸味をもった方には数ヶ所に細い刻みがみられる。平坦面より上はやや細くなり断面は円形をなす。現存長19.3cm、下半部幅1.5cm、上半部径1cm前後をはかる。3は古墳時代、4、5は弥生時代に属するものであろう。

6 中世水田址と出土遺物

中世の水田址は第2調査区の北西部に確認したもので、判然とした畦畔を確認したものは少い。面的に確認できるものは5面で、土層等から範囲が推定できるもの数面があるが、確定はできない。水田址と確認したものは中世の水路（川）にそっていて水利関係等については充分に明らかにできない。以下、各水田について説明する。

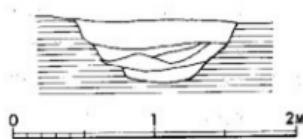
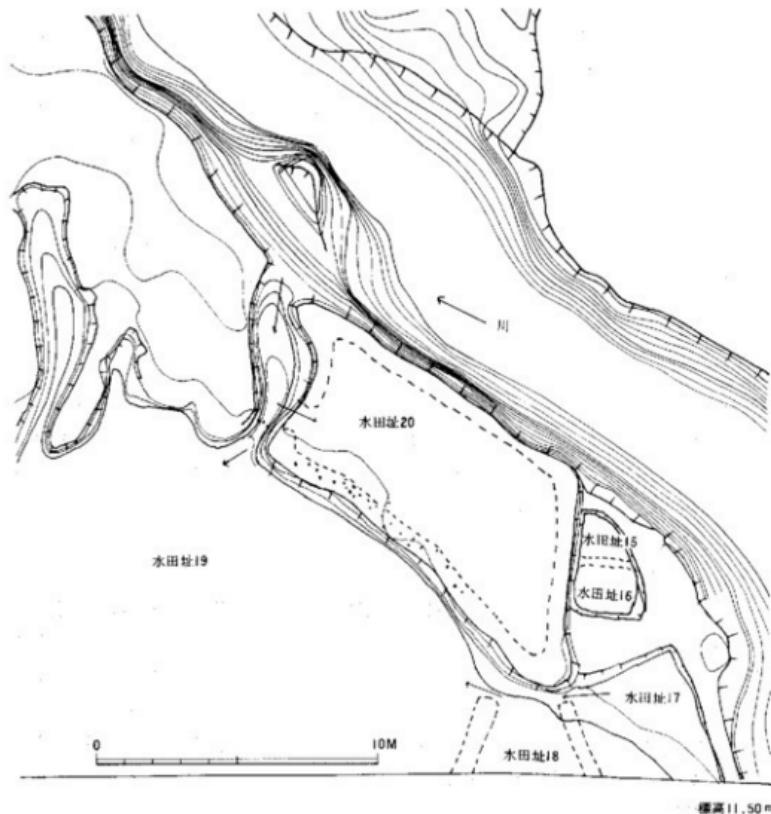
(1) 中世水田址

① 水田址15、16、16'

中世の水路（川）北岸に形成された水田で、平面三角形をなす。最大の一辺が7mで小さな水田（水田址16'）で面積は約4.7m²。畦畔は水路との境に幅1.5m、高さ20cmのものが存在する。この水田は中でさらに幅1m、高さ5cmの畦畔状のもので二分され、水田址15と水田址16に分離されている。水田址15は面積約2m²、水田址16は面積1.4m²と極めて小さい。この水田址には水口、水尻の存在は認められない。苗床の可能性もあるが、水田址とする積極的理由はなく、水田址に伴う他の付帯施設と考えることもできる。

② 水田址17

水田址16'の西側に存在する水田である。水田址16'の西側には試掘トレンチがはいっていて、水田址16'と17との関係は明確でない。水田址は一部発掘区の壁にはいり不明点も多いが、発掘区内では方形を示している。両側畦畔は幅1m前後、高さ10cm、畦畔の水田側には杭で畦畔の補強をはかっていたと思え、約50cm間隔で杭の抜け穴が10個ほど認められた。東側畦畔は試掘トレンチのため幅については不明であるが、高さ約30cmを有する。畦畔の塗に幅30cmの浅い溝が存在し水路状になっている。この部分より青磁器が出土している。北側の畦畔は現状で



第43図 中世水耕実測図

は存在せず、水田址18との間に段差（5cm前後）が存在し、この部分に北側の畔壁を想定することができる。東側畔壁の裏にある溝の延長線上の北側畔壁に、水田址18に連なる水尻が存在するものと考える。この水田址の耕作土は厚さ約10cm前後である。水田面積は約14.1m²以上が考えられる。

③ 水田址18

水田址18は、水田址17の北側に存在する水田址である。畔壁の存在に認められないが耕作土の段差の存在で一区画の水田址が想定できる。南側畔壁については水田址17で述べたとおりである。東側は、水田址20との間に高い段差があり畔壁を必要としない。北側は水田址19との間にわずかな段差（5cm前後）があり、容易に畔壁の存在を想定できる。水口は水田址17の水尻が考えられるが、水尻については不明。この水田址も西側が発掘区の壁にのびていて全形は把握できない。確認部分の形はほぼ方形で、面積は約8.2m²以上が考えられる。

④ 水田址19

水田址19は弥生時代の川が流路を変えてとり残された三日月湖的な湿地を開墾して水田化したもので、水田址18の北側に位置し水田址20とは約0.8mの段差がついている。明確な畔壁は存在しないが、南側の畔壁は水田址18で述べたごとく段差を有していて容易に想定できる。また東側は、この水田が旧川道につくられているために自然地形的に大きな段がつきその範囲を限定している。西側と北側は発掘区外にのびていて不明である。水田の平面形は発掘区内では不整形であるが、ほぼ方形になるのではないかと思われる。発掘区内的面積は約109m²以上である。この水田には中世の水路（川）より引水する水路が付設されている。水路は水の取り入れ口が幅1.5m、深さ20cmで、順次幅と深さを増し、最も大きい部分で幅2.4mで深さ50cmを計るが、水田へ流れ込む部分はまた狭くなり幅は約1mを計る。これは、この水路の途中に小規模な堰を設置していて、その上流が広くなっているためである。堰は杭は現存しないが杭の穴が一列に残っていて計4本が認められる。構造的には古墳時代のものと変わることはない。この堰は水田址19への水の調整と共に後述する水田址20への引水と考えることができる。水路の断面は図示した如くでU字形をなし、埋土は次のような層序関係を有している。上から第1層が粘質の少い明茶褐色土層で部分的に赤褐色のブロックを含む。第2層がやや粘性のある赤褐色で第1層のブロックの土と同じである。第3層が暗褐色上層で、さらに細かく三つに分類でき、a層は赤褐色土のブロックを含み、b層はブロックを含まないc層は粗砂を含み、a、b層ほどの粘性はない。

⑤ 水田址20

弥生時代の川の流路によって形成された中ノ島的にとりのこされた部分につくられた水田で、他の水田と大きな段差を有する。表土下すぐに検出したもので、後世の削平等によって耕作土のほとんどを残していないが、川あるいは付設水路に囲まれていてその区画は容易に想定

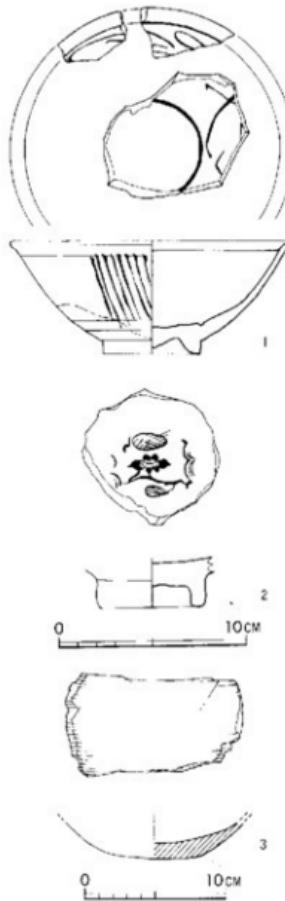
できる。水田区画の平面形は不整の長方形で面積は 47.7m^2 と小規模である。東・南・北の畔畔は削平のため痕跡も残っていないが、西側の畔畔は畔畔の補強のために打ち込まれた杭の穴が無数に存在していて、畔畔のある程度の復原は可能である。杭の穴は20数本あり、それから推定し、畔畔は段のきわに幅40cm前後でつくられていたものであろう。付設水路に設置された小規模な堰の存在から考えると水口は北側畔畔につくられていたことが想定できる。

⑥ その他の水田址

その他、水田址の存在は土層等から確認できるが、水田区画について不明な点があるものがある。水田址19に引き込まれた水路の北側も水田址20と同様に水田があったことは間違いない、一部杭の抜け穴も認めることができると、後世の擾乱、その他において水田区画を明らかにできない。水口は付設水路の堰の上流に求めることができる。また、この遺跡の主要水路である川が、長い年月の間に埋っていくが、その氾濫原にも中世の水田がつくられていることは、川の説明の中でのべたが、この水田は中世の水路の両側に展開するもので、水田幅は3m前後と極めて狭く、細長いものであったことが推定できる。以上のように中世水田の区画をつかんだのはごく一部であるが、後述する土層観察からすれば、中世水田はかなりの広がりとして認められることは明らかである。

② 出土遺物（第44図1～3）

中世の水田面およびそれを埋める砂層から出土した遺物は少く、第44図に示した3点以外数点の青磁、白磁器片があるのみである。1は3片に割れているが同一個体と考えられる青磁器である。復原口径15.2cm、器高6cm、高台径5.2cm、高台高0.7cmを計る楕円形品である。口縁は外反し、内側の口縁下0.5cm



第44図 中世水田出土遺物実測図

のところと見込みに一条の沈線をめぐらし、内面に草花文を描く。高台および底部附近は丁寧なヘラ削りを施す。釉はくすんだ青緑色を呈し内面と外面に厚くかけられるが底部にはおよんではない。外面には8条のカキ目が等間隔で配される。胎土は灰白色を呈する。2は底部破片で高台部分のみを残す。高台径5.6cm、高台高1.7cmを計る。見込み部分に蓮花文の壓押しがある。釉は淡緑色で厚く、底部までおよんでいる。胎土は乳白色を呈す。この図示した二点の青磁器以外に、小破片で図示できなかったが、玉縁をもつ白磁器、外面に鶴葉連牟をもつ青磁器、内面に草花文、外面に猫描き手をもつ、いわゆる珠斑青磁器、あるいは合子等、龍泉窯、同安窯、景德鎮窯産と考える青磁、白磁器がある。3は木製の椀の底部破片である。底部は不安定な平底で厚さ1.1cm、立ちあがっていく器壁部分は0.5cmと薄くなる。内外面には黒色顔料が付着していて、元来はウルシ塗りの椀と考える。素材としてスギを利用している。

7 第3付設水路と整地層

第3付設水路については前に詳述したが、本節では、付設水路の断面と第2調査区東南部分の整地面について詳述する。

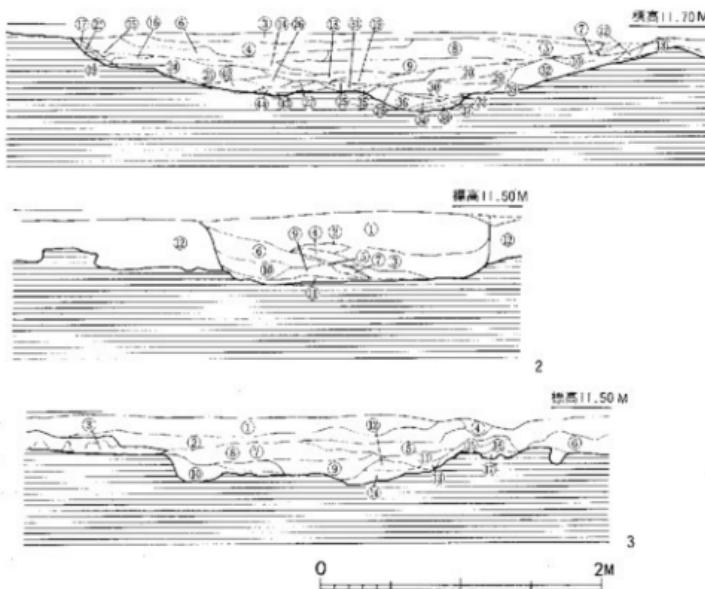
(1) 第3付設水路の断面

第3付設水路は古墳時代の水路であることは先述したが、ここではその断面について説明する。第45図に示した断面図は1が発掘区西壁に近い部分、3が付設水路の途中で整地層との関係を示すのに好都合である。

1の七層断面の部分は溝幅約4mでかなり広いが深さは最も深いところで65cmと比較的浅いがその中の堆積は複雑である。以下、上層より土層の説明を行う。溝上面の耕作土、水田床土を除去している。第③層は茶褐色混砂土層で、鉄分を含み、砂粒が多い。第④層、暗茶褐色混砂土層で、鉄分を含み上層より粘性が強く砂は少い。第⑤層、灰褐色土層、第⑥層、灰褐色砂質土層、第⑦層、茶褐色混土粗砂層、第⑧層、茶褐色砂質土層、第⑨層、きめ細かい灰褐色砂質土層、第⑩層、灰褐色混砂砂質土層、第⑪層、灰褐色混土細砂層、第⑫層、暗灰色混土細砂層、第⑬層、灰褐色混砂砂質土層、第⑭層、微砂を混入した暗灰褐色砂質土層、第⑮層、灰色砂層、第⑯層、灰色粗砂層、第⑰層、淡灰色細砂層、第⑱層、暗灰褐色混砂粘質土層、第⑲層、暗茶褐色細砂層、第⑳層、淡灰色、絹砂～微砂層、第㉑層、鉄分を含み、暗茶褐色混細砂土層、第㉒層、暗灰色混土粗砂層、第㉓層、暗灰色細砂層、第㉔層、暗灰色粗砂層、第㉕層、黄褐色極細砂層、第㉖層、暗赤褐色細砂層、第㉗層、暗灰褐色粘質微砂層、第㉘層、暗灰色粗砂層、第㉙層、灰色細砂～砂層、第㉚層、灰褐色粗砂層、第㉛層、暗茶褐色混土粗砂層、第㉜層、淡灰色粗砂～細砂層、第㉝層、黑褐色粘質土層、第㉞層、暗灰色細砂層、第㉟層、黄色～暗黄褐色細砂層、第㉙層、黑褐色粘質土層、第㉛層、暗灰色細砂層、第㉞層、黑褐色混細

砂粘質土層。第⑩層、黒褐色粘質微砂層。第⑨層、灰色粗砂層。第⑧層、暗灰褐色粗砂粘質上層。第⑦層、茶褐色細砂層。第⑥層、暗灰褐色粘質砂層。第⑤層、暗灰褐色粘質砂層となっている。

3は溝途中の断面である。上層よりその層序関係を示すと次のようになる。第①層は粗砂をやや多く含み、マンガン、鉄分の沈着がわずかにある暗褐色挟粗砂土層。第②層、マンガン、鉄分がわずかに沈着する暗褐色土層。第③層は第②層とほぼ同じであるが、鉄分、マンガンの沈着がやや多く、砂分が多い。第④層は粗砂、黄白色粘土を含む暗褐色土層。第⑤層が黄白色粘土ブロックを多く含む暗褐色上層。第⑥層、砂、粗砂を混入、黄白色粘土ブロックが多量に入る暗褐色土層である。以上の層位は粘土ブロックが混入し、明らかに人為的に埋め込まれたもので、須恵器、土師器等が含まれる。整地層で古墳時代の溝が埋め込まれていて、明らかに溝以後に行われた整地層とみることができる。第⑦層はやや土を含む暗褐色粗砂層。第⑧層は黄褐色粗砂を多量に含む暗褐色挟粗砂土層。第⑨層、暗褐色粗砂層。第⑩層、黄白色粘土のブロックを多く含む暗褐色粗砂層。第⑪層、砂をやや多く含む暗褐色土層。第⑫層、砂



第45図 付設水路および整地層断面測定図

粗砂を多く含む暗褐色土層、第⑩層。砂分を含む暗褐色土層。第⑪層、鉄分がやや沈着し暗褐色粗砂層。第⑫層、細砂粒を多くふくむ淡褐色土層。第⑬層、灰褐色粗砂層。第⑭層、黄白色粘土ブロックを多量に混入した灰褐色粗砂層。第⑮層、粗砂粘土の混入が多い暗褐色粗砂土層となっている。

(2) 整地層について

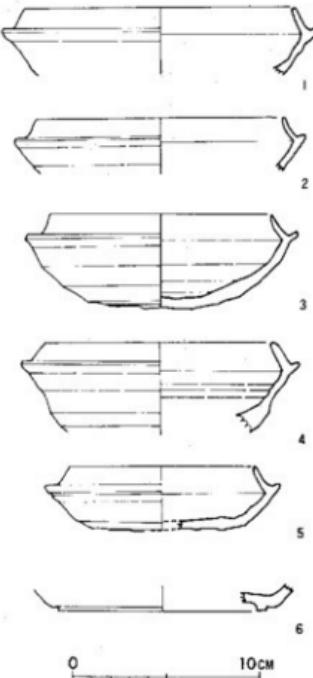
① 整地層の年代

第45図2にみるように黄白色粘土のブロックを混えた整地土層がみられ、この土層は先述したごとく古墳時代の溝をおおっていて明らかに古墳時代以降の所産であることは明らかである。また、上層には一部中世水田の床土と思われる層がおおっているためその下限は中世より古いことがわかる。この整地土層に含まれる遺物は土師器、須恵器が多いが、保存状態が悪いため図示できるものは少いが、大部分は古墳時代後期の遺物を含んでいる。一部須恵器坏に高台をもつものがあり、遺物としては最も下るものである。このような状況はこの整地を行われたのが少くとも古代（奈良・平安時代）に限られる事を示している。条理制との関連も考慮できるが今後の検討にまちたい。この整地層の広がりは第2調査区の川の東岸部から、東側に広がっていて試掘調査の結果では第1調査区の東側は、今回の学校予定地の大部分に認められ、その規模がかなり大きなものであったことが想定できる。

② 出土遺物（第46図）

整地層から出土した遺物は須恵器、土師器であるが、図示できるものは極めて少い。以下、代表的遺物について説明する。

図示したのはすべて須恵器の坏で、1は復原口径14.6cm 受部径17.2cm、蓋受けのたちあがりは1.3cmで内傾する。縁部は丸くおさめる。内外面共ヨコナデ調整、胎土に砂粒を含む、焼成は堅紙、青灰色をなす。2は復原口径1.3cm、受部径15.7cm、蓋受けのたちあがりは低く内傾する。内外面共にヨコナデ調整、胎土には砂粒を混入するが良質で、焼成は堅紙、青灰色をなす。3は口径



第46図 須恵器実測図

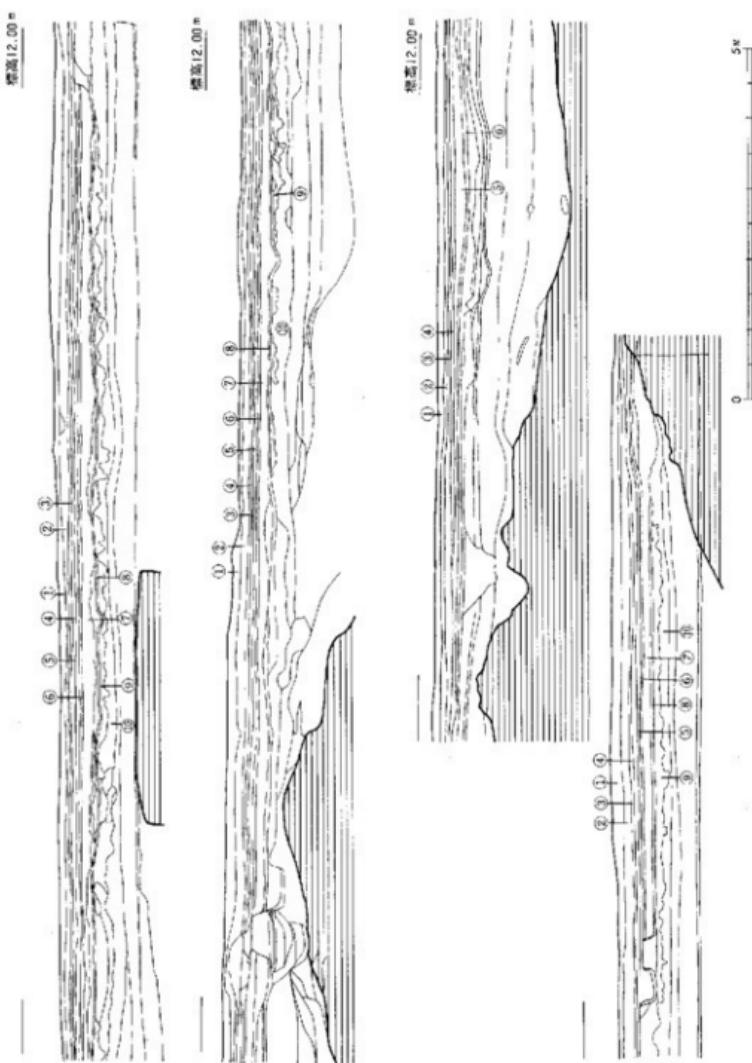
12.1cm、受部径14.7cm、器高5.1cmを計る。蓋受けのたちあがりは低く内傾し、端部はやや尖る。内底部には粘土紐の痕跡が残り、不定方向のナデ、体部はヨコナデ調整、底部は約3%の範囲が左まわりのヘラ削り調整、胎土には多量の砂を含む。焼成は堅緻、青灰色をなす。4は口径12.4cm、受部径15cm、蓋受けのたちあがりは低く内傾し、端部は丸くおさめる。内外面はヨコナデ調整で、底部に一部左まわりのヘラ削りがみられる。胎土には砂粒を含む。焼成はややあまい、青灰色をなす。5はややひずみがある。5は口径13.2cm、受部径16.9cm、器高4.7cmを計る。蓋受けのたちあがりは低く内傾し、端部は丸くおさめる。内底部には粘土紐の痕跡があり、不定方向のナデ、体部はヨコナデ調整、底部は約3%の範囲に左まわりのヘラ削りがみられる。胎土には多量の砂を含み、焼成は堅緻、黒灰色をなす。6は高台付の壺で、底部径15cm、胎土は良質で焼成は堅緻、青灰色をなす。

(3) その他の遺構

第2調査区の北東部に検出した遺構で前述した塗地層を切り込んでいる。直線的にならんで二ヶ所に存在する土塙である。東側の土塙は5.8m×2.2mの長方形で深さ約20cm、西側の土塙は5.8m×2mの長方形で深さ約50cmである。使用目的については不明。埋土より少量の土師器が出土した。第45図2に示したのは西側土塙の断面である。第①層は黄褐色～灰褐色の粗砂のブロックを含んだ暗褐色土層、第②層は砂質の暗褐色土層、第③層は黄褐色～灰褐色の粗砂ブロックが多く含む暗褐色挟粗砂土層、第④層は白灰色粗砂層、第⑤層は木炭質を含んだ灰褐色土層、第⑥層は暗褐色挟粗砂土層、第⑦層は白灰色砂層、第⑧層は砂粒が多く混入する暗褐色土層、第⑨層は暗褐色粘土層、第⑩層は暗褐色挟粗砂土層、第⑪層は砂を少量含む暗褐色土層となっている。

8 第2調査区の土層

以上、第2調査区における遺構について説明してきたが、ここで調査区の西壁の土層断面を説明する中で各遺構との関係をみていく。西壁の断面は第①層、粗砂を含む暗褐色土層、第②層、第③層よりやや粗砂が多い暗褐色土層、第④層、暗灰褐色土層、第⑤層、淡黄褐色土層で、第①層は現水田耕作土であるが、耕地整理の時の客土層で第②層は耕地整理以前の水田耕作土である。第③、④層は水田床土となる。第⑤層は灰褐色土層、第⑥層は淡黄褐色土層で、第⑥層が水田耕作土で第⑦層が水田床土となり水田を形成しているが、時期的には中世以降の年代が与えられる。第⑥層は南にいて幅約80cm、高さ約30cmの畦畔をつくっている。また発掘区の北端にも畦畔が認められる。第⑦層、砂を含む灰褐色土層、第⑧層、橙褐色土層となり第⑦層は水田耕作土、第⑧層は床土となる。北端の畦畔はこの時期につくられたもので、南側の畦畔は上の水田畦畔よりわずかに移動しているほぼ同じところにつくられ、幅70cm、高さ30



第47図 第2調査区土層断面実測図

cmをはかる中世の水田である。第⑩層は灰褐色土層で粗砂、砂層が多量にふくまれ、その下面は凹凸の激しい第⑨層の暗灰褐色粘土層となっており、これも中世の水田耕作土であろう。この時期には畦畔は上層と同様であるが南の畦畔の脇に幅60cm、深さ20cmの溝が存在する。第⑪層以下は川の堆積層である。第⑦～⑩層の水田の南側畦畔の下部は古墳時代の溝が存在する。この溝は幅1m、深さ約60cm、断面がU字形をしている。溝を埋めた堆積土は、下部より粗砂を含む暗灰色粘土層、砂分の多い暗灰色土層、黄灰色粗砂の薄い層をふくむ青灰色砂層、黄灰色砂をふくむ青灰色砂層、粘質がやや強く粘土、砂をふくむ暗灰褐色土層、褐色土層、細砂を多く含む灰褐色土層となっている。

北壁も西壁とはほぼ同様の状態であるが、第⑦層、第⑧層の水田に西端で幅40cm、高さ20cmの畦畔が認められ、その畦畔の脇には幅50cm、深さ20cmの畦畔にはさまれた小さな溝が存在する。東側の畦畔は川によって取り残された地山がその役目を果している。

第5章 総括

1 各時代の水田造構

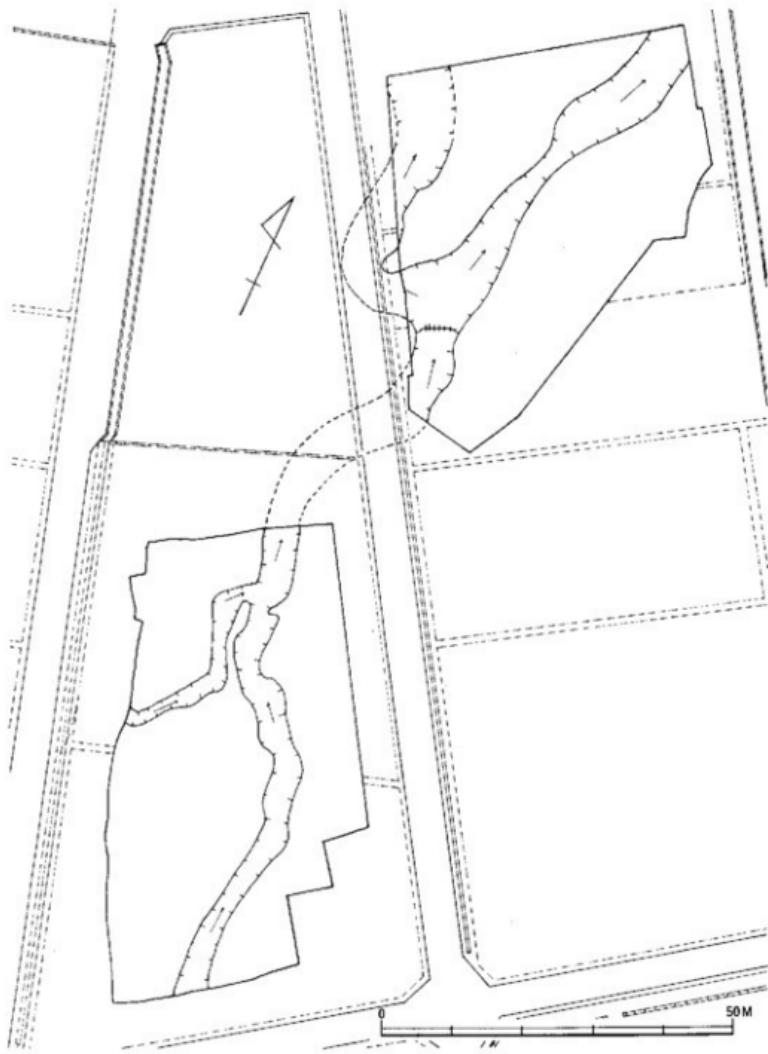
三筑遺跡についてその遺構と遺物について報告したが、ここではそれらについて若干のまとめをして総括にかえたい。本遺跡は縄文時代晩期末の夜臼式土器の頃よりはじまり現代まで継続しているが、大きくは弥生時代前期、古墳時代中期、中世(鎌倉時代)の三時期を中心としている。弥生時代については若干の遺構と遺物があるが、その状況は良好でない。古墳時代は最も保存状態が良好で遺物量も多い。中世については若干の水田造構とそれに伴うわずかな遺物があるに過ぎないが、いずれの時代においても水路とそれに伴う水田造構を検出したことは、その開拓技術あるいは水田の変遷を知る上での好材料である。以下、各時代の遺構の変遷をみていくことにし、その後に、特記すべき事について若干の考察を加える。

(1) 弥生時代の遺構 (第48図)

弥生時代の遺構は発掘区を対角線状に走る川を主としている。確実な水田造構を検出することはできなかったが、水路(川)における井堰(第5井堰)の存在からすれば当然のこととして水田が存在したことは疑いない。第1調査区北半部は擾乱が著しくその痕跡は見い出せなかつたが、水路を検出することができ、その中より弥生時代前期に属する木製農具を検出したことは特筆すべきである。これら木製工具は諸手鋤、八叉鋤で弥生時代初期より使用目的により分化していることを示している。柄つばのまわりには降起帯をめぐらし、後の木製農具とは明確に区別が可能で柄の装着について紐かけの突起をもつことは長崎県里田原遺跡、福岡県碧海遺跡と相通じるものであることは注目されよう。第1調査区南半部には古墳時代水田址の下層に弥生時代の水田耕作上と考えられる土層が広がっているが、土層断面において昭和の存在は認められず水田区画を明らかにすることはできなかったが、水田の存在は確認することができた。第1井堰下流の深みの底からは完形の石庖丁が出土しているが、これは農作業時に川に落とし込んだと見ることもできる。弥生時代の川の上手にはかなり大きな樹木が植わっていたことは、川にくずれ落ちた樹根によって推測でき、板付遺跡の川の土手と相似した姿を想定できる。

(2) 古墳時代の遺構 (第49図)

本遺跡を代表する遺構で5世紀代の水田造構として水路(川)、水田が有機的関連性の中で把握することができた。川は弥生時代の川を継承し第1調査区から第2調査区にかけて対角線状に約160m以上を確認している。川には集水用の井堰が設置されており、第1井堰、第2、3、4井堰、第6井堰が古墳時代の堰である。第2、3、4井堰は近距離内で改築されたもので、機能的には同一の井堰の改築とみることができる。第1井堰と第2、3、4井堰の間は約40



第48図 弥生時代の遺構全図

第1表 古墳時代水田比一覧表

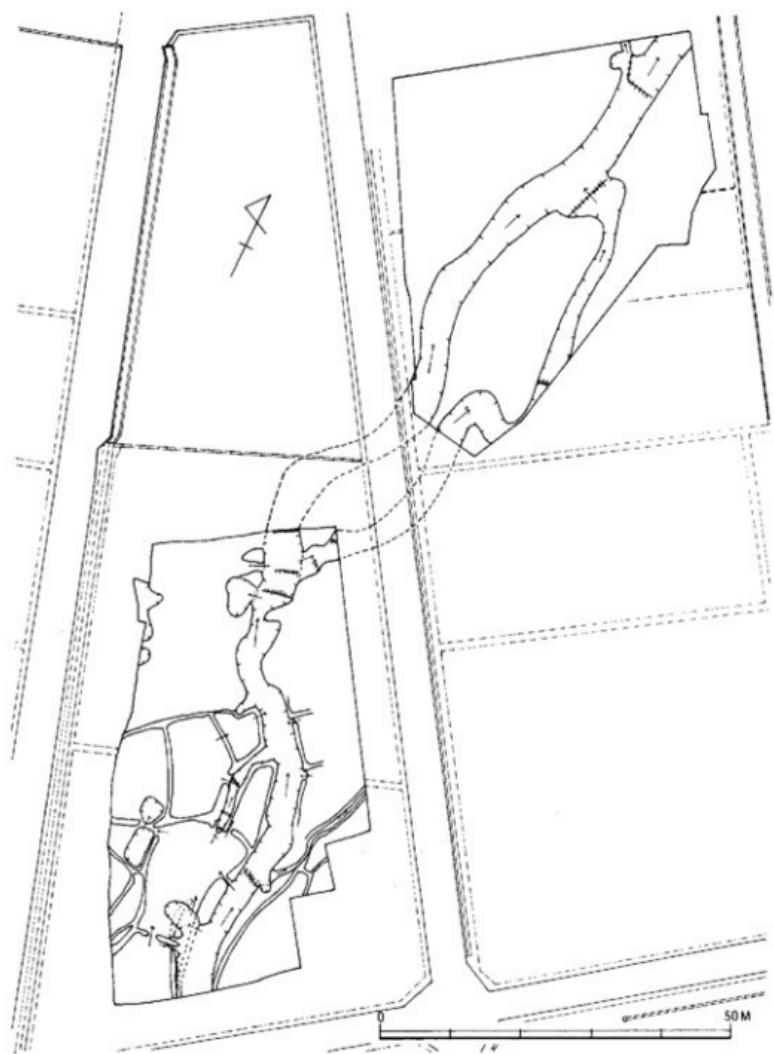
水田面積	面 積	時 期	水 口	水 尻	水溜状態	備 考
1	93.3+α	古 墳		2		1'より新しい
1'	107.6+α	古 墓		1		1より古い
2	3.5+α	古 墓		1(?)		
3	18.9+α	古 墓	1(?)			
3'	24.7+α	古 墓				2+3
4	14.7+α	古 墓				
5	140.4	古 墓	3	3		5'より新しい
5'	160.9	古 墓	3	3	○	5より古い
6	29.2+α	古 墓	1	1	○	
7	86.1+α	古 墓	1		○	
8	101.1	古 墓	1			
9	31.8+α	古 墓	1			
10	23.1+α	古 墓	1(?)	1		
11	88.8+α	古 墓				
12	11.0+α	古 墓				
13	29.5+α	古 墓				
14	50.7+α	古 墓		1		
15	57.6+α	古 墓		1		
計	1,072.9+α					
平 均	59.6+α					

(単位 m²)

m、第2、3、4井堰と第6井堰の間は約80mで水田における水がかりによる堰の間隔が想定できる。

古墳時代の水田区画は幅30~40cm、高さ10cm前後の畦界によって区画されるもので水田にはそれぞれ水口と水尻を兼ね備えている。水田区画は不整の方形ないしは長方形をしたもので整然とした水田区画ではない。畦界によって区画された水田および溝あるいは水尻の存在である程度水田区画が想定できるものをまとめたのが第1表である。水田面積は全区画を完掘したものが少く、完掘した水田址5、5'は140.4m²、160.9m²、一部破壊、あるいは不明な水田址7、8、9は86.1m²、101.1m²、31.8m²を有し各水田間にによって面積はまちまちである。最小31.8m²、最大160.9m²であるがいざれも小規模な水田区画を有していることは注目されよう。

ここで各水田における水がかりを検討してみよう。水田址1~4は発掘区外のさらなる上流

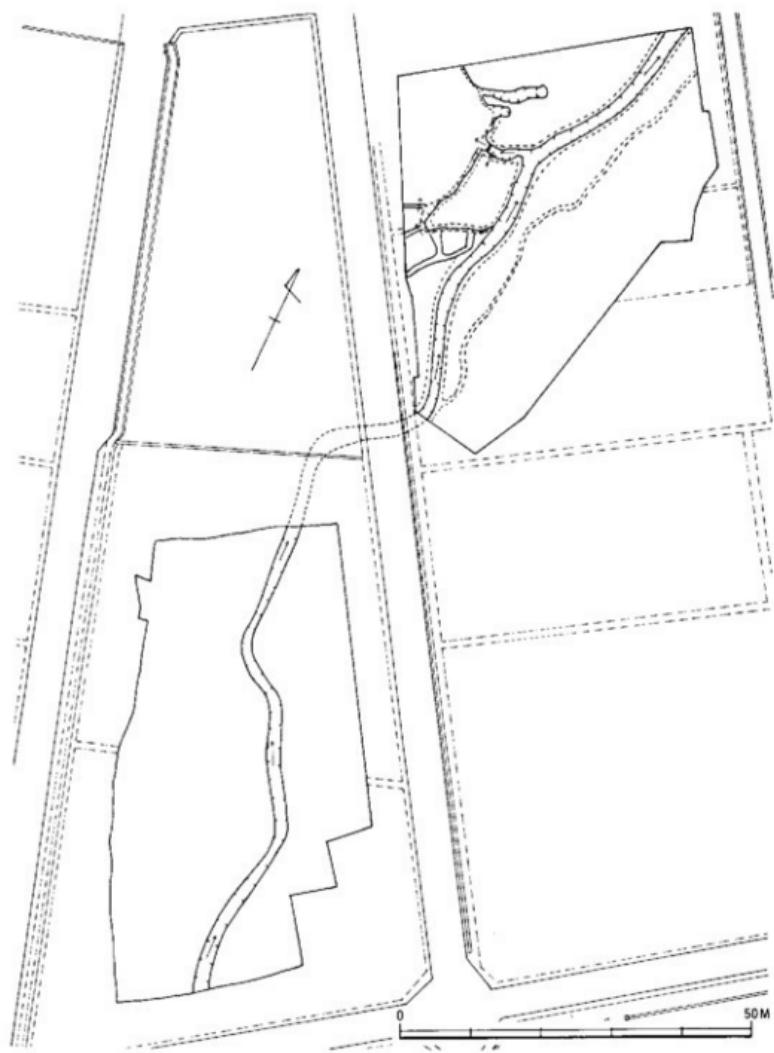


第49図 古墳時代の道構全図

に設置された堰より引水したと考えられる。水田址 1～4 の相互関係に発掘区内では把握できなかったか立地や他の例からみて同一の水がかりの関係にあったことは間違いないと考える。水田址 11～13 も発掘区外の井堰よりの引水であるが、水田址 1～4 へ配水する堰とはまた別である可能性が強い。水田址 1～4 と水田址 11～13 は川を挟んで立地しているものの、その比高差は約 50cm あり、水位を考えた場合、同一の堰からの引水と考えるには無理があろう。

水田址 5～10、水田址 14、15 および水田として確認できなかつたが、川の西岸水溜状造構 7 より上流部、川の東岸、第 3 付設水路の南は第 1 井堰よりの水がかりであることは発掘において確認することができた。川の西岸部の水田は第 1 井堰で集中された水を水田址 5、5' に引水し、この水田を鉢帶として他の水田へ配水する。水田址 5、5' の水口は堰の横、第 1 水溜状造構に存在し、一部水田址 1 よりの水口も存在する。水田址 5、5' からは水田址 9、水田址 6 への水尻が存在し、第 2 付設水路への水尻もある。第 2 付設水路には小規模な堰を設置し、ここで水田址 8 へ引水している。水田址 6 へ配水された水はさらに水田址 7 へと引水されている。水田址 7、8、9 の間での相互関係は略取の保存状態が悪く判別できなかつたが、水田址 8 と 10 の間に水口の可能性がある部分があり本来は水田址 7、8、10 の間にも水口、水尻が存在したことは充分想定できる。川の東岸については第 1 井堰より第 1 付設水路が設置されていて、この水路を鉢帶として配水が行なわれたことを知るが具体的には把握できなかつた。ただし、水田址 14、15 は川に向って水尻が存在している。

第 2、3、4 井堰も機能的には同一であり、設置場所に若干のずれがあるものの同一井堰として把握して良い。これらの堰から配水される範囲は水田址を具体的に把握できなかつたので確実なところは不明な部分もあるが、一応の想定は可能である。第 7 水溜状造構は、第 1 水溜造構と構造的にも設置場所も同じで、機能的には全く同じものであったことが推測でき、確認はできなかつたが、第 7 水溜状造構をとり込んだ水田が存在し、第 1 井堰における水田址 5、5' のように配水の鉢帶をなしていたと想定される。第 7 水溜状造構のやや下流にも水口が存在することからもその可能性が強く、川の西岸部においては第 7 水溜状造構より北部（下流域）の水がかりを考えることができる。川の東岸部においては第 3 付設水路が同井堰より設置されていて、川と付設水路の間および第 2 調査区の付設水路東側の水がかりを行っていたことが推測できる。この付設水路には 4ヶ所の小規模な井堰が設置され、各水田への配水に考慮がはらわれている。第 2 調査区北西部、弥生時代の川が流路を変え、中ノ島状にとり残された部分は地山層が高く、古墳時代には開田されていなかつた可能性が強い。このことは第 2、3、4 井堰と第 6 井堰の間隔が離れていることからも推測できるが、何よりも、その地盤面は高く水位との関係で、同地に水をあげる技術的問題によっていると考える。第 6 井堰による配水は、堰の横に設置された溝によっていたことは容易に推測できるが、発掘区外にのびているために充分に把握できない。川の北岸部の下流域に水がかりしていたことが想定できる。



第50図 中世の造橋全図

以上、各井堰と水田の関係を水がかりの問題によって推測したが、各水田への配水関係は発掘区内において5区分できることが判明した。このような各井堰ごとに異なる水利関係が社会的に、いかなる有機的関連性をもっていたかについては今回の調査では何ら手がかりはつかめなかつたが、今後、集落との関係において充分に検討されねばならない重要な問題であろう。今後の調査と検討に待ちたい。

(3) 中世の遺構（第50図）

中世の水田遺構も弥生時代以来の川（水路）を中心として展開するが、第1調査区においては、土層断面の観察において水田の存在を確認したのみで、平面的に水田区画を把握していない。第2調査区においては一部、水田址の区画を把握することができた。いずれも川の氾濫原に形成された水田でその区画の規模は地形的に制約をうけ小規模のものである。中世水田は第2調査区北西部において5区画を確認した。第2表に示したのが中世水田の面積および諸施設についてまとめたものである。構造的には弥生時代以来の水田と何ら変わることはないが、水田が形成された後は、従来は川であった湿地や古墳時代には諸々の条件で開田されていない地域まで開田され、拡大していることが注目される。本遺跡で確認した中世水田は、弥生時代以来の一般的水田とは異なり、中世においてもかなり特殊なものであったことが推測できる。このことは、今度検出した水田が、中世以前には諸々の事情によって開田されず取り残された川の氾濫原、湿地にその開発を拡大したことによる規模的制約があったことに注意しておきたい。中世においても一般的な水田は現代とあまり変わることのない水田区画を有していたことは、土層断面の観察によって知るところであり、既述の位置に大きな変化がないことから知ることができる。

第2表 中世水田比一覧表

水田番	面 積	時 期	水 口	水 尻	水溜状遺構	備 考
15	2.0	中 世				小あざによって 分離
16	1.4	中 世				
16'	4.7	中 世				水田址 15, 16 を含む
17	14.1+α	中 世		1		
18	8.2+α	中 世	1	1		
19	169.2+α	中 世	1			
20	47.7	中 世	1			
計	247.3					
平 均	35.3+α					

(単位 m²)

2 水溜状遺構について

本遺跡の水田遺構の中で最も特異な存在であったのが、水田址に伴う水溜状遺構である。発掘調査にあたって水溜状遺構と水田址について時期を異にするのではないかと精査したが、発掘調査における所見では時期的には違いを認めることができず、むしろ水田と同時期で水田址に伴う付帯施設であることが判明した。特にこの水溜状遺構が水口部分に集中して存在し、また井堰と強い関連性をもって存在することが注目される。いずれも不整の円形をしていて土師器の供献土器をもつものが多く、水田における特別の遺構であったことが知られる。ただし、第2水溜状遺構としたものは他と若干異なり、床も水平で浅く、これら水溜状遺構とは用途を異なるもので、苗床的ものではなかったかと考えている。

これら水溜状遺構についてどのような用途があったかを考慮し、民俗例等にあたっていた時、国学院大学教授の乙益重降先生より、「そのピットは単なる水溜ではないようで古くは『農政全書』にみえ、新しくは『成形図説』にみえる置資、または水勞というもののようです。水口に泥土が溜るのを防ぐため掘込み、これに堆肥や草、藁などをもって埋めるための pit のように思われます。」という有意義な御教示をいただき、さらに、『成形図説』のコピーと注釈をいただいたので先生の了承を得て以下、紹介しておきたい。

『成形図説』卷二

又一風の内にて水口の方を上晒といふ。溝詰高く印に注落す所なれば、淤泥あつまり動もすれば田面陥くなりやすし。一方隆くなれば、一方におのづから坳なることなり。一區の内にて地而陥陥あれば、水の浸す所均しからず。水溜かなわぬゆえ、上端の方は深さ三尺計鋪あげ、其土をは別所に運び、跡には表土、青草を削て壅とし、又、竹籠を編て承置などあり。是を置資といふ。農政全書に水勞とある是也。

◎句読点は乙益による。原文には濁音も句読点もなし。

◎『成形図説』は薩摩藩主島津直豪が家臣の曾榮、白尾国柱らに命じて編纂せしめた農業百科全書。その内容は博引多岐にわたり、美しい絵の効果と相まって、近世農書としては定評がある。とくに物品、植物名については著名まであげている。文化元年（1804）初版刊行。昭和8年日本出版社より複製本刊行される。本文は日本出版社本によった。

◎『農政全書』

明の徐光啓（1562～1633）の編纂したもの。内容は農本・農事・水利・農器・樹芸・蚕桑・同広類・種殖・牧養・製造・荒政の十二部門からなる。明時代の農業に関する最高の書。その手本となったのは王楨の『農書』（元時代）で、さらに『農書』は賀思誠の『齊民要術』によって執筆されたという。『農政全書』は欽定四庫全書総目、提要子部農家類一〇二に収

録されている。

- ◎ 尚、成形図説の漢字のふり仮名は片假名で付されている。」

以上の文献の他、三筑遺跡と同様の水溜状遺構をもった近世の水田址の例がある。福岡市南区野多目に所在する野多目前田遺跡において耕地整理以前の水田に径1.5mの円形のpitが伴う(第51図)。このpitは水口部分に設置されたもので、近くの人に聞き書きで資料の集成に務めたが、耕地整理そのものを知っている人も少く、耕地整理は明治年間に行われたもので、この水田は明治初期～末期に耕作された水田であることは疑いないが、付設されたpitについてのそのより名および用途についての手がかりをつかむことはできなかった。先に述べた置質であろうことは想像に難くない。

三筑遺跡の水溜状遺構についても『成形図説』にいう確實である可能性が強いが、文献的には16～17世紀や19世紀にしかみることなく、五世紀代の水田にこのような付帯施設が存在したことは、三筑の水田が極めて完成された域に達していることが想定できる。しかし、この水溜状付帯施設は現存のところ三筑遺跡のみに知られるもので他に例がなく、また近世の水田においても普通にみられるものでないことなどを考慮し、今後の資料の増加を待ちたい。

註① 福岡市教育委員会文化課が1979年度に調査した遺跡で、福岡その他については調査者山口謙治氏に便宜を計っていただいた。



第51図 野多目前田遺跡近世水田

3 水に対する祭祀

本遺跡で検出した大部分の土器類は主に川に設置された井堰あるいは水溜状遺構から検出したものである。これらの土器類はいずれも完形品に近く、その出土状態は、完形品のまま井堰あるいは水溜状遺構に投げ込まれたようであり、破片となって拵散することは極めて少い。また出土した土器類には小型の手づくね土器も含み、器種は圧倒的に小型丸底壺であることが指摘できる。水田地帯に出土するこれらの土器は、その出土場所から考えても日常生活における雑器が他から運び込まれたとするには不自然であり、水田地帯における何らかの行為の結果による遺物とみる方が妥当である。その出土位置が、川に設置された井堰、水田の水口に近い水溜状遺構であるというように一定してみられることは、これらの遺物が、水に対して行われた祭祀行為の結果とみると無理はなかろう。

三筑遺跡の調査を実施する以前に調査した板付遺跡のG—7 a、7 b調査区は日本における水稻耕作の開始期の最も古い水田を確認したが、ここでの取排水口においても多量の土器が集中して出土している。また、板付遺跡の中崩の川にも多量の定形土器が投げ込まれた状態で出土している。

このように、川あるいは水田の水口において多量の土器が完形品に近い姿で出土することは、水に対する祭祀行為が行われたことを知るのである。この祭祀行為の起源が日本において現出したかどうかについては今後の問題であるが、板付遺跡の水田址の水口にみられる土器祭祀はそれ以後三筑遺跡へ継続し、最近まで残存していた水口祭との強い関連性を考えることができるが、その系譜等については、今だ不明な点が多く、今後の検討を経て問題点を整理したいと思っている。

弥生時代から古墳時代にかけて特に水田祭祀が行われていたことを注意しておかねばなるまい。また、この水田祭祀に関連して注目すべき遺物の出土がある。第42図に示した木製鉗はその形において特異であり、両側にそれぞれ4箇の突起があり、古事記に記載されている八尋矛との関連性も考えられるが、この問題については別稿にゆずりたい。

図 版

PLATES



(1) 遺跡全景（西から）



(2) 遺跡全景（南から）



(1) 第1調査区全景（北から）



(2) 第1調査区全景（北西から）



(1) 第1調査区全景（北東から）



(2) 第1調査区全景（東から）



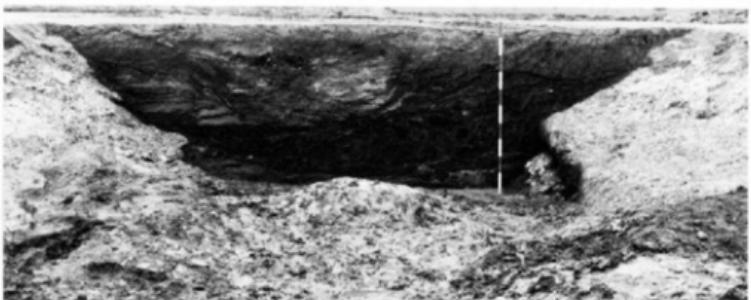
(1) 第1調査区全景（北から）



(2) 第2調査区全景（東から）



(1) 第1調査区川断面



(2) 第2調査区川断面①



(3) 第2調査区川断面②



(1) 第1調査区第1井堀



(2) 第1調査区第1井堀近景



(1) 第1調査区
第2・3井堰

(2) 第1調査区
第2井堰



(1) 第 1 調査区第 2 井堰



(2) 第 1 調査区第 2 井堰



(1) 第1調査区第2井堰遺物出土状況



(2) 第1調査区第2井堰遺物出土状況



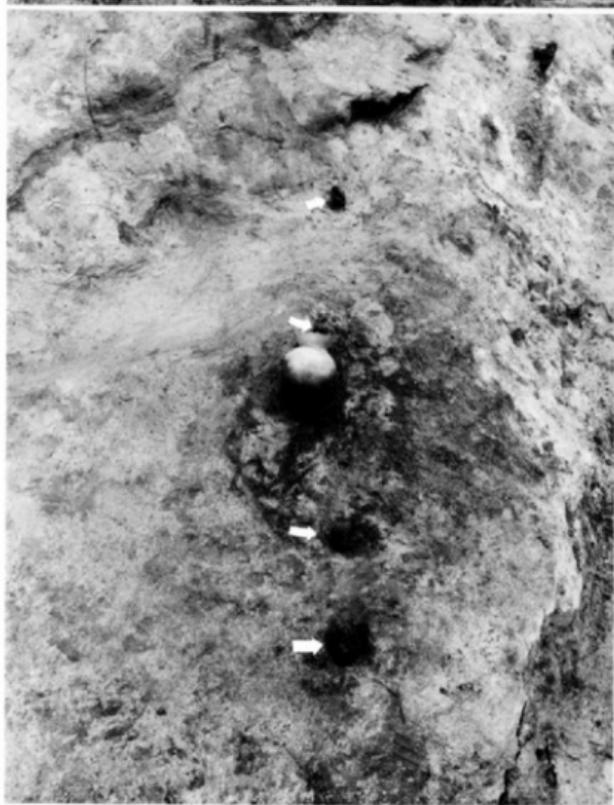
(1) 第1調査区第2井堰遺物出土状況



(2) 第1調査区第2井堰遺物出土状況



第一調査区第2井堰出土土師器と第2調査区川出土須恵器



- (1) 第1調査区第3付設水路
水口遺物出土状況
- (2) 第1調査区第3付設水路
水口と杭列



(1) 第1調査区第2付設水路全景



(2) 第1調査区第2付設水路（北から）



(1) 第1調査区第2付設水路水口（西から）



(2) 第1調査区第2付設水路水口（南から）



(1) 第1調査区第6水溜状遺構と遺物出土状況



(2) 第1調査区第5・6水溜と遺物出土状況



(1) 第1調査区第6水溜状遺構遺物出土状況



(2) 第1調査区第5水溜遺物出土状況



(1) 第1調査区第1水溜状遺構と水田址（東から）



(2) 第1調査区第1水溜状遺構と水田址（北から）



(1) 第1調査区第1水溜状遺構



(2) 第1調査区第7水溜状遺構と堰



(1) 第1調査区第1・5水田址横矢板列



(2) 第1調査区水田址横矢板列近景



(1) 第1調査区水田址5木器出土状況



(2) 第1調査区川の木器出土状況



(1) 第1調査区木器出土状況



(2) 第2調査区石包丁出土状況



(1) 第2調査区木器出土状況



(2) 第2調査区木器出土状況



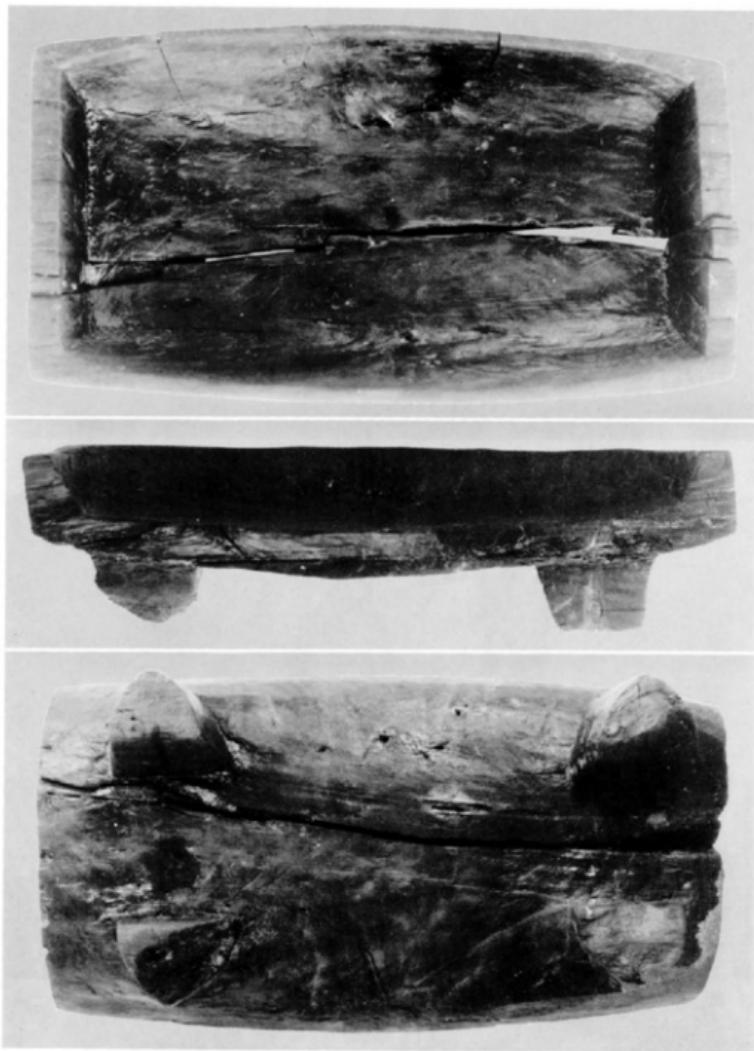
(3) 第2調査区木器出土状況



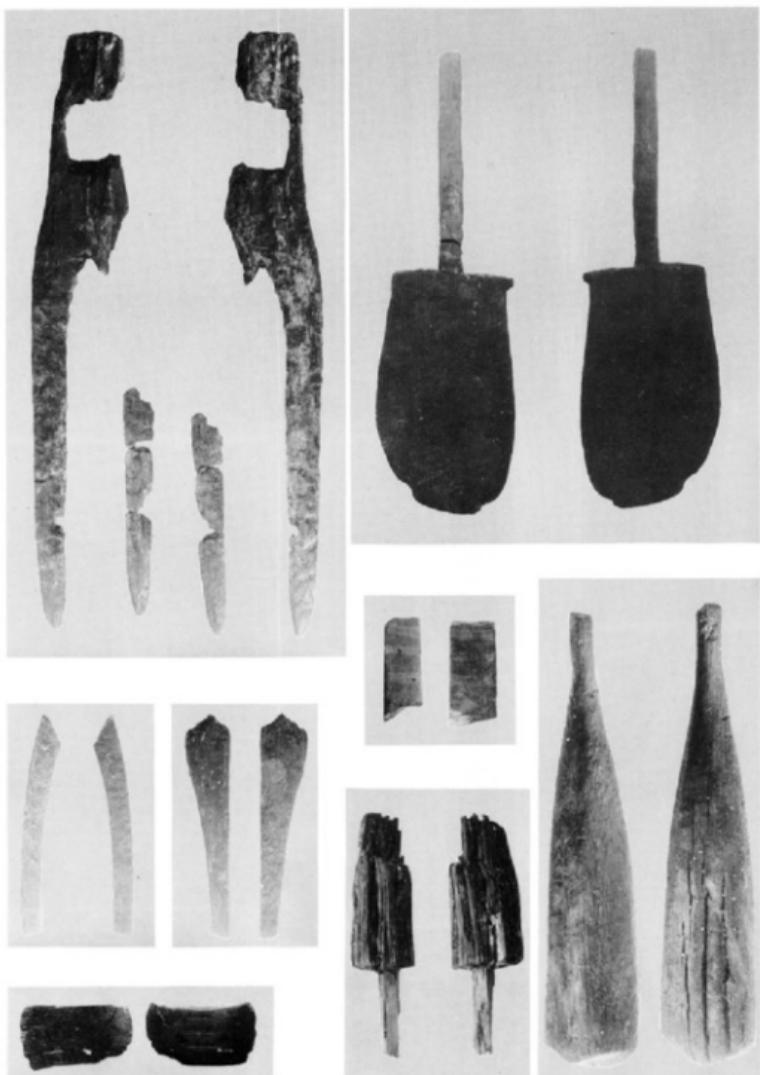
(1) 第1調査区木器出土状況



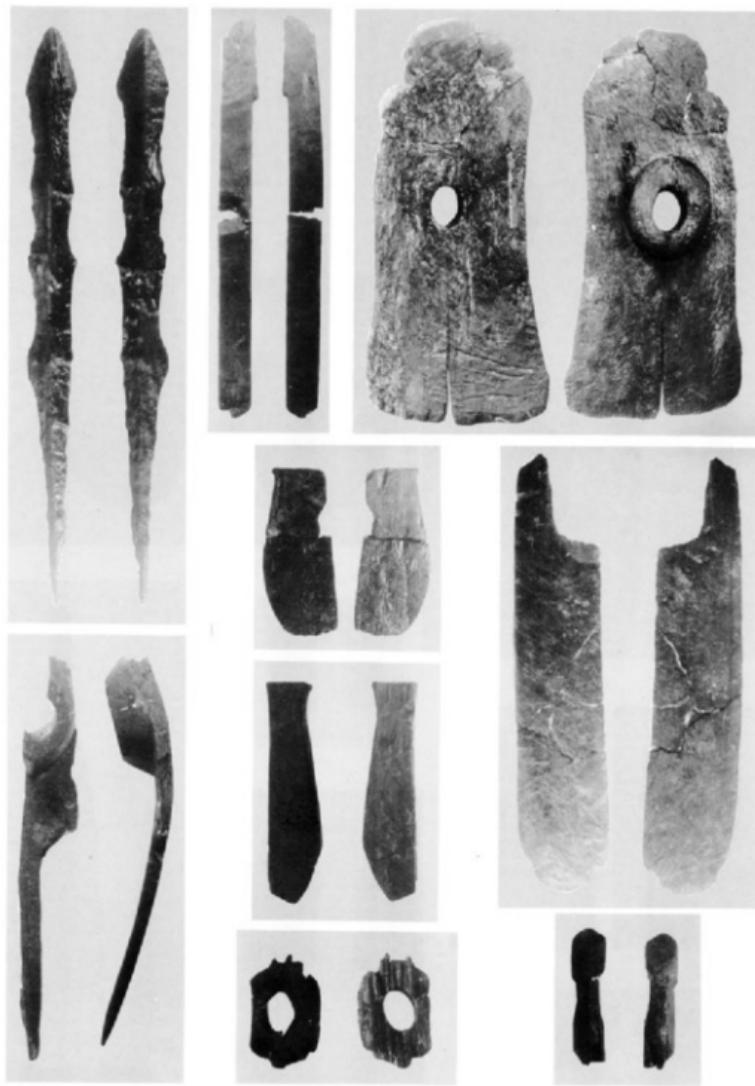
(2) 第1調査区第1井堰木器出土状況



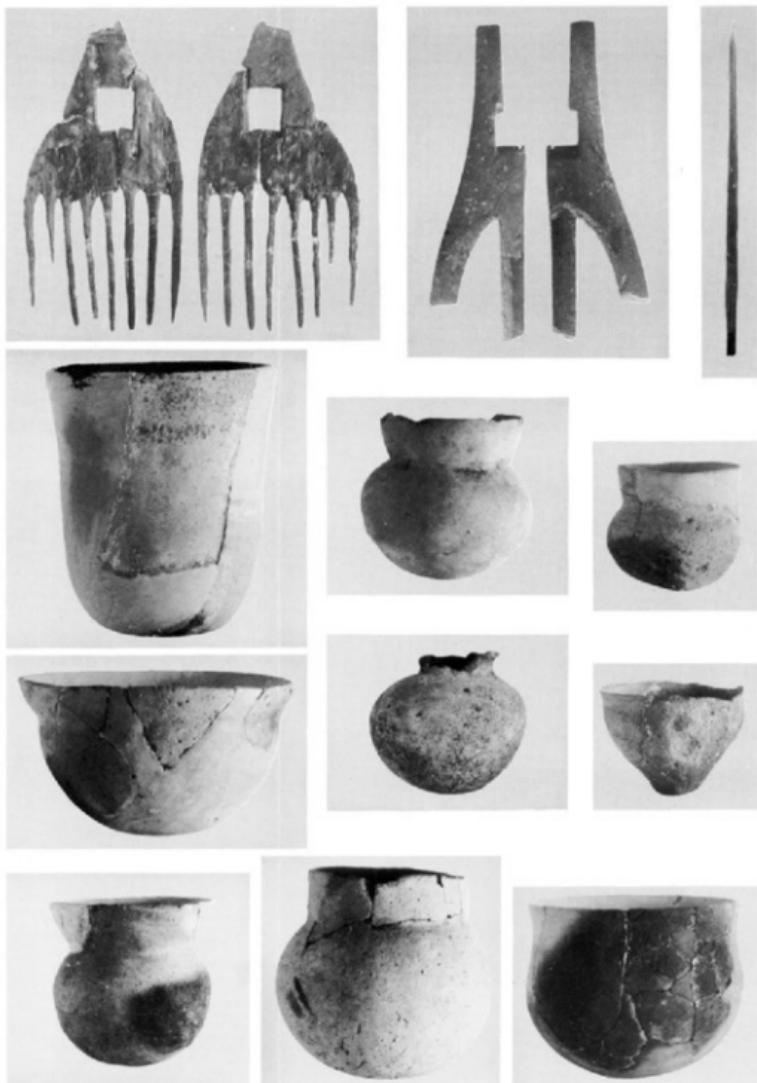
第2調査区水田址5出土木器(1)



出土木器(2)



出土木器(3)



出土木器(4) 川出土土師器



川出土土器（弥生式土器）



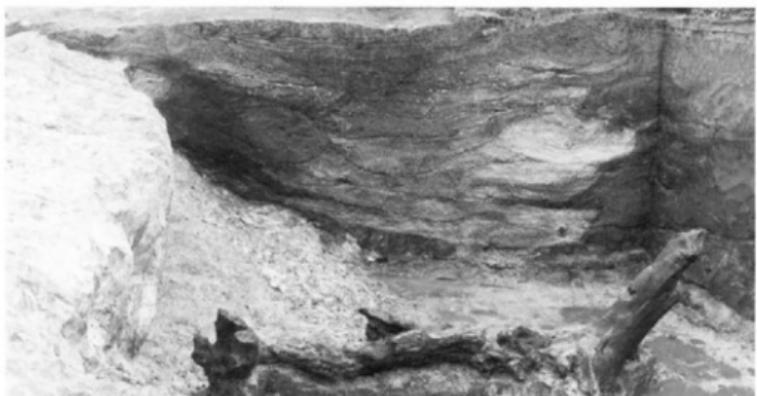
出土土器



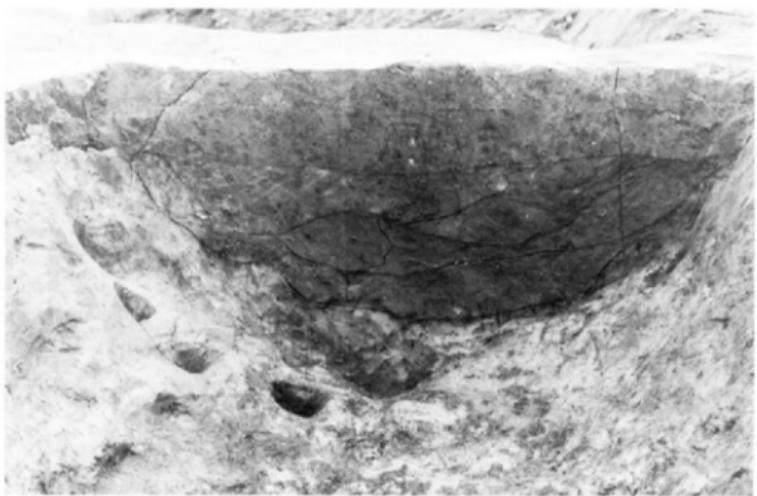
(1) 第2調査区第3付設水路堰



(2) 第2調査区第3付設水路堰



(1) 第2調査区川断面



(2) 第2調査区中世水田用排水口断面

福岡市
次郎丸高石遺跡

1981

福岡市教育委員会

本文目次

I	序 説	
(1)	はじめに	1
(2)	次郎丸高石遺跡の位置と環境	3
II	調査の記録	
(1)	調査概要	5
(2)	1区の調査	5
(3)	2区の調査	12
	溝状遺構	
(4)	3、4区の調査	18
	土坑の調査	20
	壁穴の調査	26
(5)	各区出土の石器	32
III	資料 1 2区溝出土種子類について	34
	2 次郎丸関係中世資料	1

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図	2
第2図	遺跡周辺地形配置図	4
第3図	調査区配置図	6
第4図	1区遺構全体図	(折り込み) 7
第5図	1、2区出土遺物実測図	10
第6図	1、2区出土遺物実測図	11
第7図	溝状遺構実測図	13
第8図	溝状遺構出土土器実測図(1)	15
第9図	溝状遺構出土土器実測図(2)	16
第10図	溝状遺構出土土器実測図(3)	17
第11図	3区遺構全体図	19
第12図	1号土塙実測図	20
第13図	1号土塙出土土器実測図(1)	21
第14図	1号土塙出土土器実測図(2)	22
第15図	1号土塙出土石器・土製品実測図	23
第16図	2号上塙実測図	24

第17回	2号土塙出土土器実測図	24
第18回	3号土塙実測図	25
第19回	4、5号土塙実測図	25
第20回	5号土塙出土土器実測図	25
第21回	1号堅穴実測図	26
第22回	1号堅穴出土土器実測図	26
第23回	2号堅穴実測図	27
第24回	2号堅穴出土土器実測図	27
第25回	3号堅穴実測図	27
第26回	3号堅穴出土土器実測図(1)	28
第27回	3号堅穴出土土器実測図(2)	30
第28回	3区ピット内出土土器実測図	31
第29回	各区出土石器実測図	33

図 版 目 次

本文対照頁

P L . 1	①調査前全景	1
	②1区遺構全景(西より)	7
P L . 2	①1区遺構全景(東より)	7
	②1区杭列出土状況	9
P L . 3	①1区遺構全景(西側)	9
	②第5号溝全景	12
P L . 4	①2区溝状遺構全景	12
	②2区溝状遺構遺物出土状況	12
P L . 5	①溝状遺構土層セクション(西壁)	12
	②溝状遺構土層セクション(北壁)	20
P L . 6	①1号土塙(3区)	24
P L . 7	②2号土塙(3区)	25
	③5号土塙(3区)	18
	④ピット群全景(3区)	31
P L . 8	①3区遺構全景	31
	②3区ピット群近景(3区)	26
P L . 9	①ピット群近景(3区)	26
	②1~3号堅穴全景	27
P L . 10	①1号堅穴	26
	②2号堅穴	27

第一章 序 説

1 はじめに

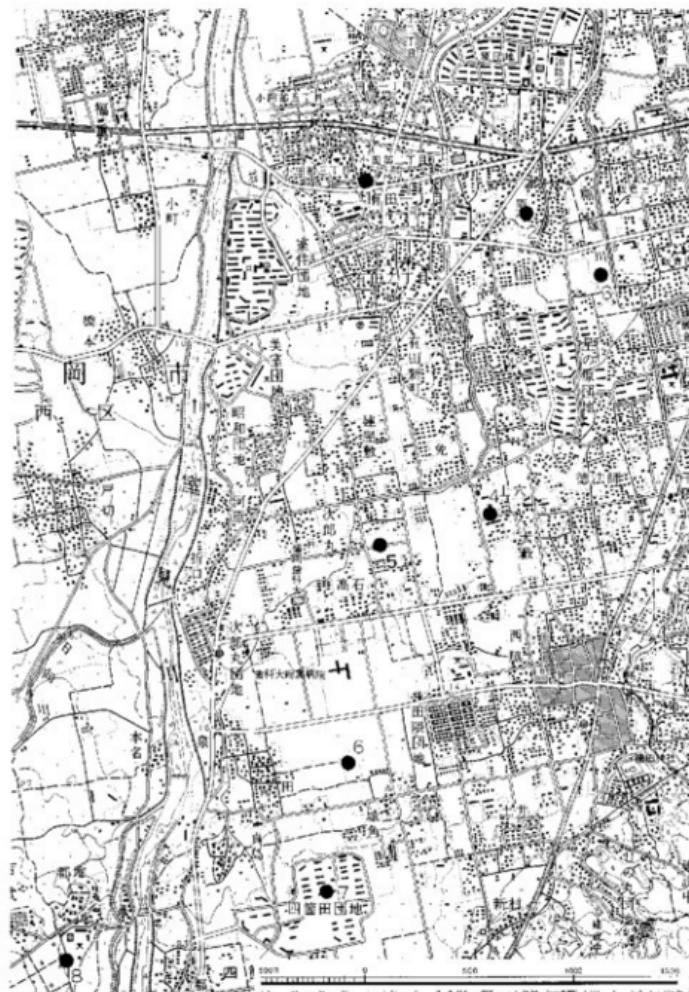
九州の中核都市としての機能を確めている福岡市への人口の流入は年毎に増加の一途をたどっている。中でも西部地区の開発発展には目を見張るものがある。畠畠を一面にたたえ、穀倉地帯であった早良平野が、所々に田地群を形成し生活の根柢と化しつつある。その様な状況の中にあり各地区で小中学校のマンモス化に伴い新設校の建設が実現されていた。西福岡中学校区でも新設校の必要に迫られ、次郎丸地区に建設される事になり、今回の調査を行った。教育委員会管理課より文化課に埋蔵文化財の調査依頼があった建設敷地は、23,000m²と広大な事と、近接する位置に鶴町遺跡（加茂小学校内）が調査されていたので、周知の遺跡ではなかつたが試掘調査を実施する事になった。（1979年7月13日～7月20日）

試掘調査は遺跡の有無を確認する事を主眼に置き、建設地内に20m方眼を組み、それにそって1mのトレングチを機械力を導入して掘削し、実施した。その結果遺構が多数検出され、本格的に発掘調査を行う必要が生じ、学校施設課、管理課、文化課と協議し10月より実施調査を実施する運びとなった。

発掘調査は1979年10月21日～1980年5月31日までの8ヶ月間実施した。調査にあたっては、教育委員会管理課、土地開発公社の諸氏に多大なる協力をいたしました。記して感謝の意を表したい。

調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会 文化部文化課埋蔵文化財第一係
	第一係長 三宅安吉
事務担当	岡島洋一
調査担当	沢屋臣 松村道博 二宮忠司（試掘調査）
補助員	原俊一 浜田昌治（遺物写真）
調査協力者	粉川昭平（大阪市立大学教授） 鷲倉巳三郎（元奈良教育大学教授） 福岡大学歴史研究部 福島建設 四郎喜俊（同志社大学）



- 1 有田遺跡 2 原談義遺跡 3 原深町遺跡 4 鶴町遺跡
 5 次郎丸高石遺跡 6 出村遺跡 7 四箇遺跡 8 郡地南遺跡

第1図 周辺主要遺跡分布図

2 遺跡の位置と環境

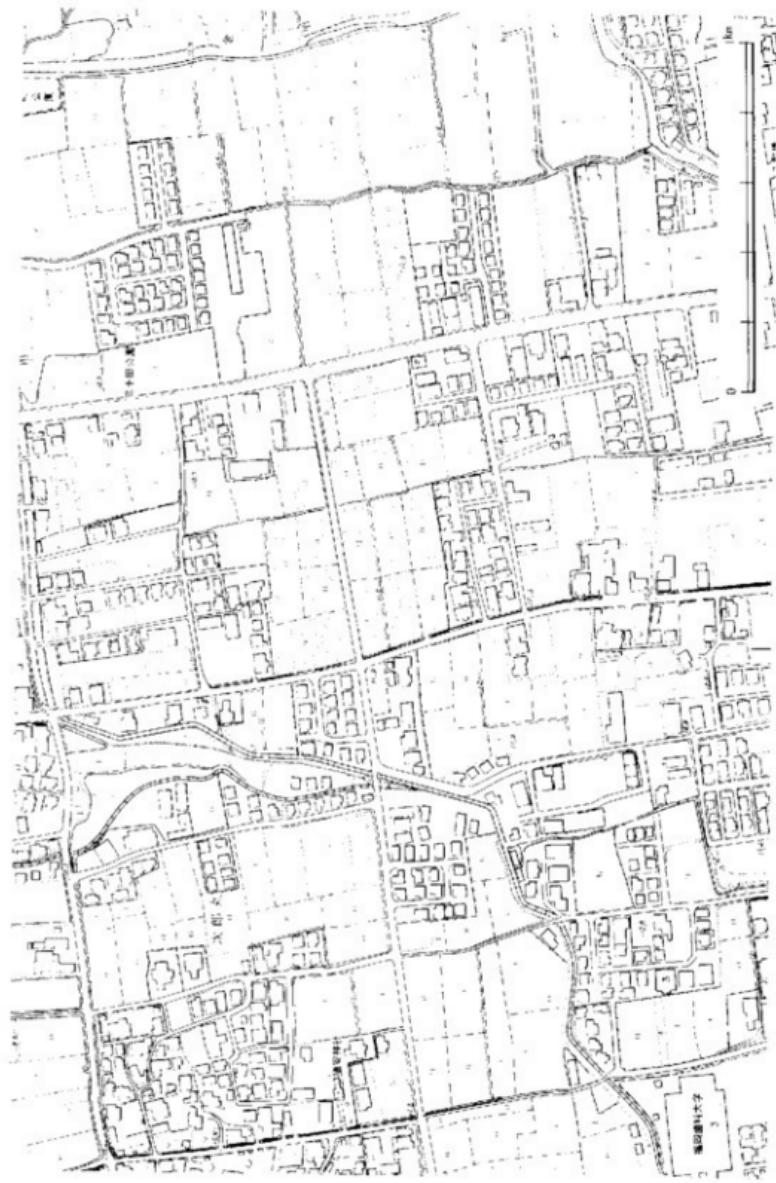
次郎丸高石遺跡は早良平野のはば中央部、福岡市西区次郎丸高石に所在し、国土地理院発行二万五千分の一地形図福岡西南部の北西隅より東へ31.9cm、南へ15.8cmの交点上に位置する。早良平野は西方を背振山系より派生し、北へ延びる長垂山塊により限られ、東側は袖山から北へ延びる飯倉丘陵により区画される。室見川を中心とし、十郎川、金屋川等大小の河川により開析される複合扇状地の平野で、博多湾に向って扇形に展開する。

本遺跡は室見川と金屋川に挟まれた標高約14mの位置にあり、汎系源ともいえる低平台地に占地する。周辺は開発が進み家屋が立ち並び、視界は悪いが、数年前まではかなり遠くまで見渡すことができた。室見川の東岸から約800mの所に位置する。

本遺跡を含む早良平野の周辺部は開発が大きく進むに比例して、埋蔵文化財の調査も増加の一途をたどっている。1967年の九州大学における有田遺跡の調査時までは数えるほどしか調査が行なわれていなかったが、近年では約60例もの多数にわたっている。各調査毎に報告書が刊行され、それらの中で早良平野の歴史的環境については詳述されているので省略し、それらの一覧を記載する。

— 参考文献 —

「有田遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集	1963年
「金武古墳群調査報告書」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集	1971年
「影塚1号墳発掘調査報告書」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集	1972年
「大谷古墳群」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集	1972年
「下山門遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集	1973年
「牟多田遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集	1974年
「西園周辺遺跡調査報告」(1)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集	1977年
(2)	"	47集
(3)	"	51集
「鶴町遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集	1976年
「広石古墳群」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集	1977年
「県道大野・二丈線関係埋蔵文化財調査報告書」I		
	福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集	1980年
「吉武・熊山古墳群」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集	1980年
「有田・小田部」第1集	福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集	1980年



第2图 遗跡周辺地形測量図

第二章 調査記録

1 調査概要

埋蔵文化財の調査終了後、校舎造成に着手する方法が望ましかったが、中学校の開校が1981年4月と計画されており、付換道路、水路、外構等の校舎建設に先行する工事箇所の発掘調査を実施し、順次、終了地区から工事を始めることになった。そのため、調査区域が変則的になったり、写真撮影を部分的に行い、全体の把握が理解しにくくなつた。



調査区の中を東西に道路が走り、さらに南北には水路で区切られていたので、調査は全体を四区に分割し、南西部を1区、北西部を2区、東南部を3区、東北部を4区と名称を与えて実施した。土層はI層・耕作土（約10cm）II層・床土（約10cm）III層・黄白色砂層（部分的に数cm残存）IV層・黒褐色粘質土層、V層・VI層・鳥栖ローム層ないし、八女粘土層となり、標高約13mの低台地を形成する。

各区から次のような遺構が検出された。〔1区〕溝5条とピット群、杭列。溝1、2から土師器皿の破片（実測不可能）が出土している。他の遺構は遺物が共伴しておらず、時期不明。〔2区〕溝状遺構が検出され、縄文晩期の突帯文土器が多数出土している。従来から知られている夜臼式土器とは異っている点が注目される。〔3区〕土塙が5基、方形の袋状竪穴が3基検出されている。竪穴は遺存状況は悪いが土器はかなり出土しており、中期初頭に比定される。土塙からは中期中葉の土器を出土しているものもある。他にピットが多数確認できたが、残りが悪く詳細不明。ピットの平面形確認時に多くの弥生式土器が出土しているので、おそらくその時期の住居址の壁面が削平されたものであろう。〔4区〕遺構、遺物は認められなかった。

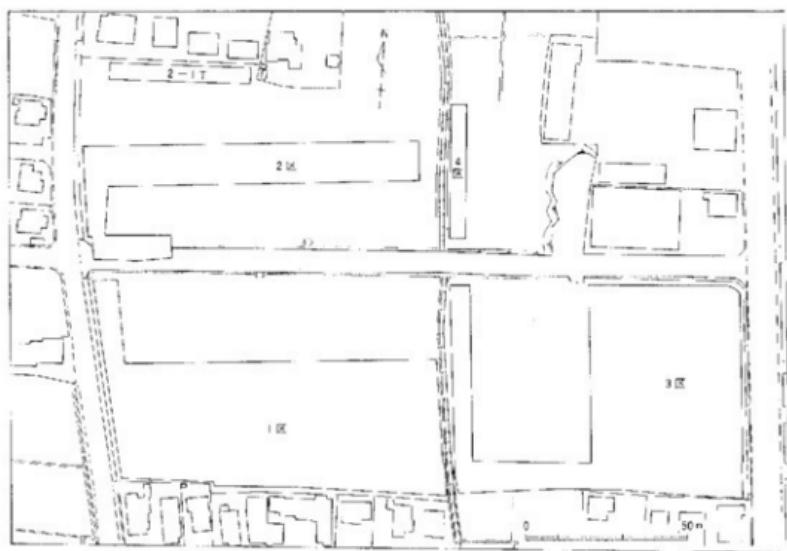
2 1区の調査（第3図）

この調査区は東西の両側が高まりをもち、中央部に凹部を形成する。溝は、この凹部に沿って、5条検出された。1～4溝は細砂～粗砂で被われ、5溝だけが黒色粘質土で埋っている。

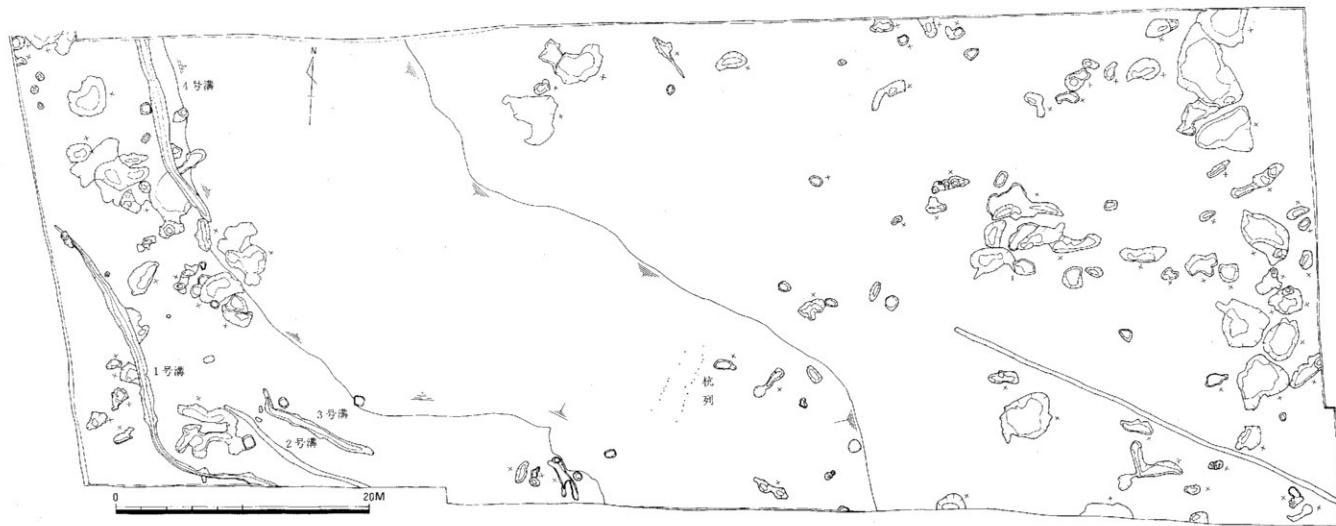
溝1 調査区の西側へ一旦のび、さらに直角に屈曲し、北側へ走る。先端はすばり消滅している。幅1.12～0.2m、深さ0.08m前後を測る。出土遺物は土師器皿破片がある。

溝2 南東から北西に向い直線的にのび、北西部で細くなり消滅している。断面皿状を示す。幅0.6～0.98m、深さ0.5～0.1mを測る。土師器皿破片出土。

溝3 溝2より東へ2.2m隔て平行して走っているが、長さ約9.5mで終る。幅0.6～0.98m



第3图 调查区配置图



第4図 調査区配置図

m、深さ0.1～0.5mを測り、断面皿状を示す。出土遺物はない。

溝4 溝3の延長上に北西に向ってのびる。溝3から約13.6m離っているが、本来一条の溝であったと思われる。幅1.12m、深さ0.15mを測る。

溝5 1区の調査区南西端から北東に直線的にのびる。幅約0.4m、長さ23.7m、深さ0.2mを測る。この溝は埋上が黒褐色粘質土となっており溝1～4の砂層と異なり、時期差をうかがわせる。溝底は南東部が最も高く、北西部へ向ってゆるやかな傾斜をもち、その比高差 120.1 cmを測る。出土遺物はなく、時期不詳。

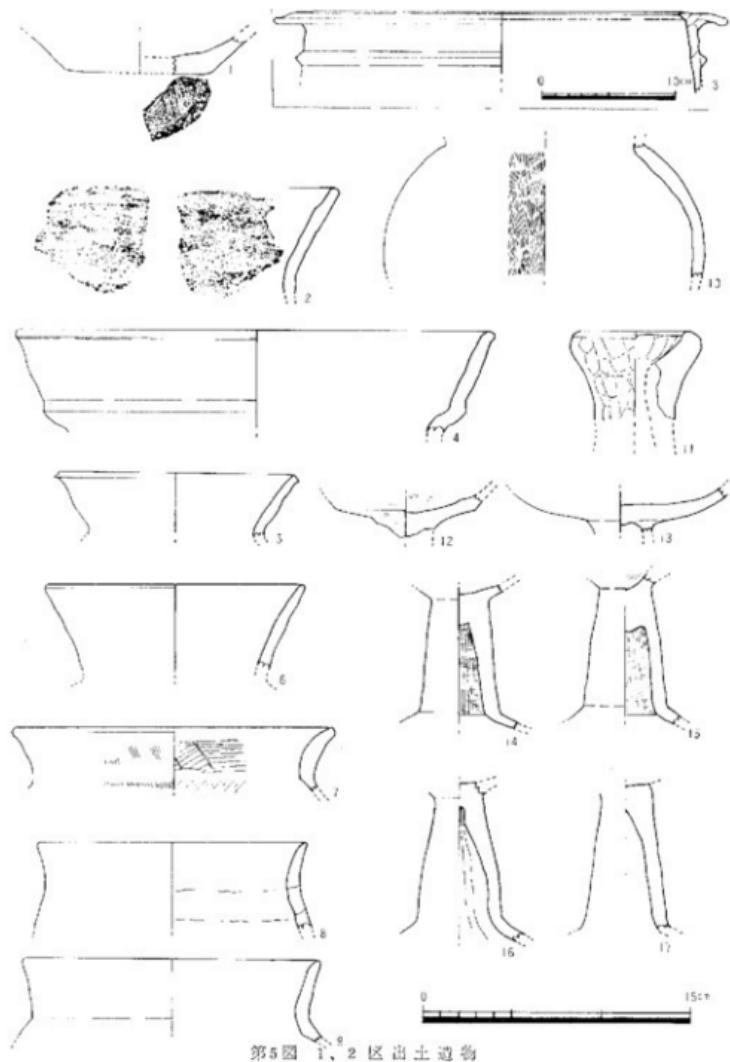
不定形土塁 塗辺約3m、長辺約4mの平面不整形土塁が数多く検出された。平面プランでは黒色セグドーナツ状を示し、それを掘り進めると下部で統合しており、不定形の土塁となる。壁面はゆるやかな傾斜をもつものや、垂直、あるいは内傾するのもみられる。当初造構と考えて調査したが、遺物の出土がないことや、埋土が經く跡していること、さらには、土塁内に樹根が検出されたことから、造構ではなく、自然の堆みであろうと考え、調査を行なわなかつた。

杭列（第4図、PL2②）調査区のほぼ中央部、四部と直交する状態で2列の杭列が確認された。またかも、西東の高まりを結ぶ様のように、2列が平行して打たれ、その間隔は1.6～2m、長さ約6mにわたっている。杭は5cm前後の丸杭が主体を占るが、一部板材、角材をも混じっている。遺存状況は悪く、約5cm前後残存しているに過ぎない。また遺物の検出もみられず、時期を明らかにすることはできなかった。

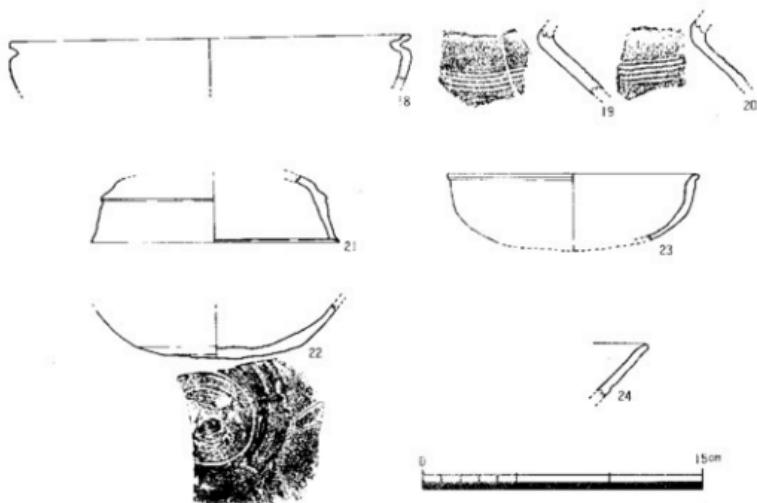
出土遺物（第5、6図1～24）

ここでは、各区より出土した遺構検出時の出土土器を一括して説明を加える。

2は縄文晚期の粗製土器である。頭部から直線的に外に開き、口縁部となる。器口は荒れているが、粗雑な条痕を横走させている。壁面が厚く、胴部内面ヘラケズリ。1、3～4は弥生式土器である。1は壺の底部で三角形状に刷毛目を残す。3は口縁から胴部にかけての破片である。口縁部の内面の張出しは大きく、口唇端部は下へ垂れる。口縁下に三角突帯をめぐらす。4は小型ではあるが、器台と考えられる。内外面に指頭の調整痕をとどめている。5～7、20は土師器である。5は二重口縁の壺の口縁部破片である。内側気味に開き、端部は肥厚し丸く収められ口縁部から頭部へ内側気味に続き、大きい稜線を形成して頭部となる。内外面もヨコナデを施す。色調暗褐色を呈する。器壁は厚い。6は口唇端部は尖り、口唇中央部はわずかに沈む。口縁中央部は丸くふくらみ、頭部へとすぼまる。全体にヨコナデを施す。7は頭部から直線的に開き、口唇部はゆるやかな角をもつ。内側の中央部に貼り付根の文様を施す。8～10は甌の口縁部破片である。



第5圖 1、2 区出土遺物



第6図 1、2区出土遺物実測図

福岡市次郎丸高石遺跡出土

木質遺物の樹種 一鶴倉巳三郎—

福岡市西区次郎丸高石の遺跡から出土した木質遺物の樹種を調査したが、その結果は次のようにになった。

試 料	検 査	備 考	試 料	検 査	備 考
II-1 東-1	—		西-1	タイシンタチバナ	
II-1 東-2	シイ?	欠	西-2	シイ	
II-1 東-3	—	欠	西-3	ヒサカキ?	
H-1 東-4	シイ?	薄片状、木口切 片不良	"	シイ	
東-5	タイシンタチバナ		タイシン タチバナ?		軟弱
東-6	—	欠	西-4	ヒサカキ	
東-7	クヌギ?		西-5	ヒサカキ	
東-8	シイ		西-6	シイ	
東-9	—	欠	西-7	ヒサカキ	
東-10	シイ		西-8	シイ	
東-11	シイ?	幼木	西-8'	—	
東-12	シイ		西-9	タイシンタチバナ	取縮材
II-1 東-13	(不明)	軟弱崩壊 早材部欠	"	シイ	
" 東-14	シイ		西-10	シイ	軟弱
" 東-15	シイ				

3 2区の調査

南西部から縄文時代晩期の溝状遺構が検出された。他に2-1T、2-2Tを入れて、遺構確認を行ったが、遺構は検出されず、トレンチ調査を実施したにとどまった。溝の遺存も悪く、現場プレハブの下までのびていたが、諸般の都合で、調査を実施しなかった。

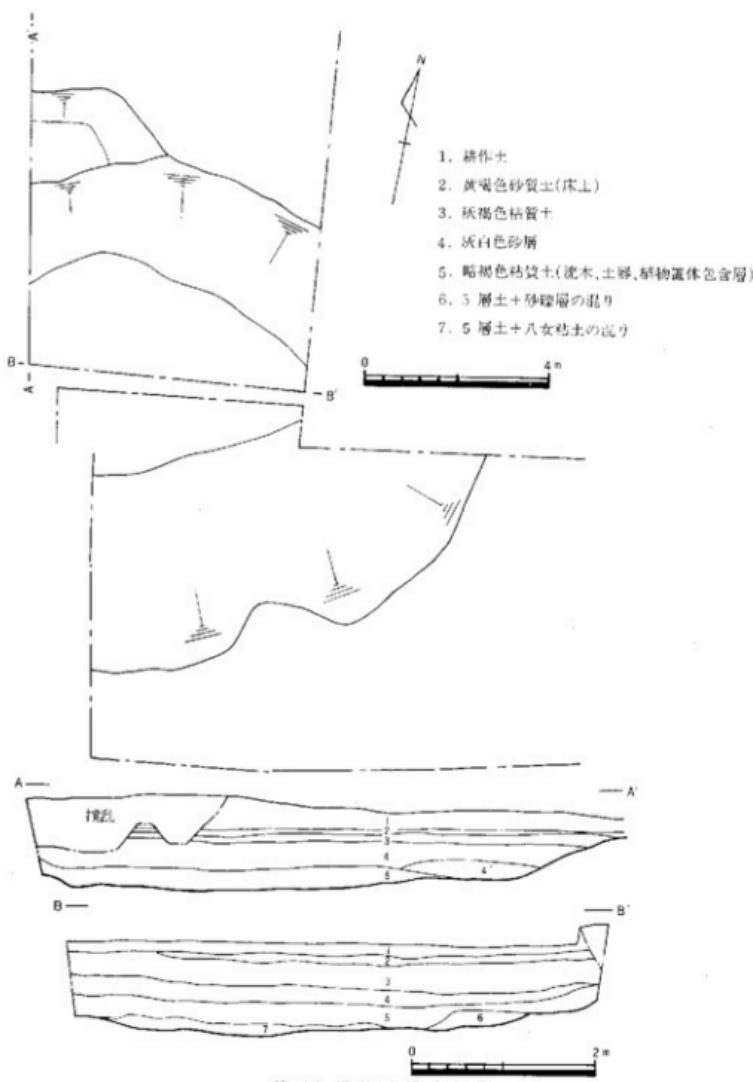
溝状遺構（第7図）

調査区の南西部に確認された。西端で最大幅12.39mを測り、東へ向ってすばまり、9.94mの位置で丸く収る。深さは最高部で1.98mを測る。平面プランは、横円形を半分にした形状を示す。遺構はさらに西側へのびている。地層は4層が一時期に堆積したと考えられる砂層で、厚さ約50cm前後を計り、粗砂層も一部混在する。洪水等によるものであろう。5層が遺物包含層で、溝底部近くに厚く堆積し、局辺部にいくにしたがい薄くなり消滅する。流木、木葉、種子、粘土を多く含み、暗褐色粘質上層で水が流下するのではなく、水溜り状を呈していたものと考えられる。上岩はこの層から出土しており、近くに生活遺構が存在すると考えられる。

溝断面を観察するとなだらかな傾斜を示し、表面も凹凸状態を示し、人工的なものと考えるより、自然の崖みと考えた方が妥当であろう。

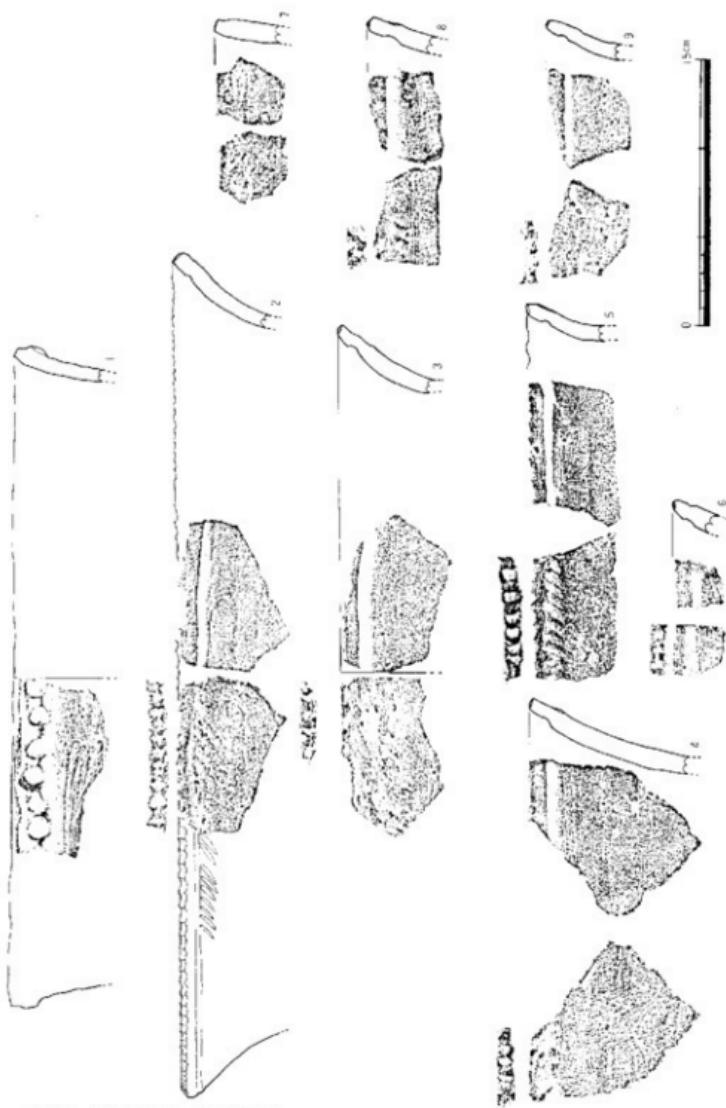
溝状遺構出土の土器（第8～9図）

出土土器はほとんどが縄文流沿の粗製土器である。2～6・8・9は口縁内面に一条の凹線が巡る。いずれも外反しており、口唇部に笠状の工具で刻目を施す。6・9を除き口縁外面直下にも浅い斜めの刻目がつけられる。2の外面は籠の擦痕。内面は籠の横なで調整。胎土に石英粒砂・雲母片を含み、焼成は良くない。外面暗褐色、内面黒色を呈する。3の口縁外側の刻目部位に一見突起の貼付部ともみえるが、貼り付けてはいない。外面は条痕、内面は籠の横なで調整。胎土に石英粒砂・雲母片を含み、焼成は良好。外面暗黄褐色、内面黒色を呈する。4は内外面とも横の条痕。胎土は石英粒砂・雲母片を含む。焼成はもろく、外面暗褐色、内面黒色。5は外面籠の擦痕、内面横なで調整。石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗褐色、内面黒色で、炭化物の付着があられる。6は外面の口縁直下に刻目が無く、凹線が巡る。外面は縦に籠調整で炭化物付着。胎土に石英粒砂・雲母片を混入。焼成は良くない。外面暗褐色、内面黒色。8は外面細い横条痕、内面は籠横なで調整。外面に炭化物付着。胎土に石英粒砂・雲母片混、焼成はもろい。外面暗褐色、内面黒色。9は外面籠の擦痕、内面は籠横なで調整。胎土に石英粒砂・雲母片を含み、焼成は不良。外面暗褐色、内面黒色。7・10～16は無文の口縁部であるが、7・10以外は口唇部に刻目をもつ。7は直立に近く、口唇部を押さえて整形している。内外面とも条痕で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面暗黄褐色、内面黒色を呈する。10は外反するやや薄手の土器で、口唇部を押さえているため、口縁外端が突端状にもりあがるが、刻目はつかない。外面は条痕、内面は籠の横なで調整。内外面とも炭化物が付着。胎土に石英



第7区 满状遺構実測図

粒砂・雲母片・滑石片を含むが、焼成は良くない。内面の一部暗褐色、他は黒色。11は外反する口縁の先端を箇あるいは棒状の工具で押さえて、細い刻目を施し、そのために、口縁外端が突帯状に膨らむ。外面は横条痕、内面も細い斜めの条痕。胎土に石英砂を含み、焼成はもろい。外面黒褐色、内面黒色を呈する。12は口縁内面に刻目。口縁外面は突帯状に膨らむ。内面は横の条痕か。外面には炭化物付着。胎土に石英粒砂・雲母片を混入し、焼成は良くない。黒色を呈する。13~16は口縁先端を鋭角に作る。いずれも外反する。13は内外面とも条痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成はややあまい。外面黒褐色、内面黒色。14は外面細い条痕、内面も条痕。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良好。外面暗黃褐色、内面黒色を呈する。15は内外面とも条痕の後、なで調整。胎土に石英粒砂・雲母片を混入し、焼成はもろい。外面暗褐色、内面黒色を呈する。16は外面条痕の後、なで調整。内面もなで調整。胎土に石英粒砂・雲母片を混入、焼成は良くない。外面暗褐色、内面黒色。1~17~29は刻目突帯をもつ土器で、27を除いていずれも口縁部である。刻目突帯はすべて口縁端から下がった位置につけられる。1は棒状の工具で押圧施文したやや大きめの刻目をもつ。外面は条痕、内面は箇あるいは箇状の工具で横なで調整。外面には炭化物付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。外面黒褐色、内面暗褐色。17はやや内窓気味の口縁で、外面条痕、内面横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗黃褐色を呈する。18は内外面とも条痕。外面に炭化物付着。胎土に砂粒を含み、焼成良好。黒色を呈する。19は口縁上面横なで調整。胎土に砂・長石を含み、焼成良好。黒色を呈する。20は器皿があれでいるため器面調整不明。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗淡褐色を呈する。21は外面条痕、突帯上部から内面は横なで調整。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。22は外面に炭化物付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成はややあまい。外面暗褐色、内面黒色。23は外面は横の条痕、内面は横条痕の後、なで調整。内外面とも炭化物が付着している。胎土に石英粒砂・雲母片を含み、焼成は良くない。黒褐色を呈する。24は内外面ともに条痕で、突帯の付く位置の裏は箇状の工具で押さえている。外面に炭化物付着。胎土に石英粒砂・雲母小片を含み、焼成良好、黒褐色。25は内窓気味で、内外面ともに横条痕、外面には炭化物付着。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、暗褐色を呈する。26も内外面ともに条痕、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、外面黒褐色、内面黒色を呈する。27は刻目が突帯の下部までつけられている。この土器片が胴部かどうかは不明である。内外面ともに条痕で、胎土に石英粒砂を含み、焼成やや不良、外面暗褐色、内面黒色を呈する。28・29は同じような器形をもつ。やや内窓気味の口縁から、「く」の字状に反転する胴部をもつ。胴部には刻目突帯はつかない。内外面ともに細い条痕で、外面には炭化物が付着。29は内面にも一部付着する。ともに胎土に石英粒砂・雲母片を含み、焼成良好。28は外面暗褐色、内面黒褐色。29は外面黒褐色、内面暗褐色を呈する。30・31はいずれも断面台形を呈する底部である。30は平底、31は上げ底で、いずれも内面条痕。外面には指か箇の押圧調整痕。底面はなで調整。胎土に石英粒

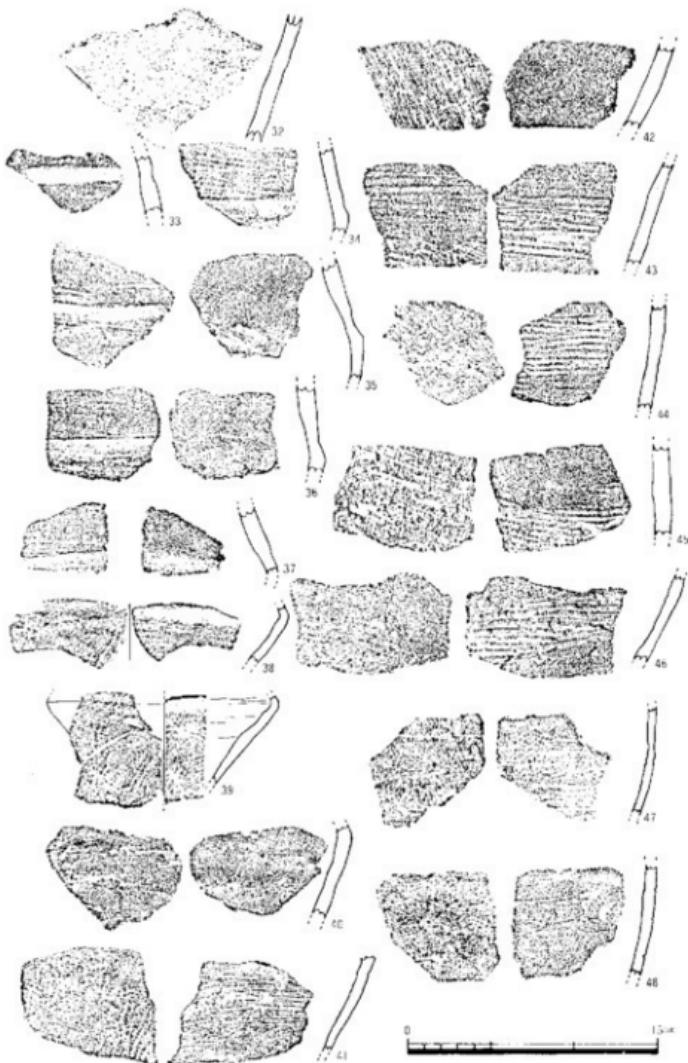


第8圖 滴状追構出土土器尖頭圖1



第9圖 漢代越文化七土器尖頭劍

第8圖 漢代越文化上层尖頭劍



第10圖 满状遺構出土土器実測図(3)

砂を混じ、焼成良好。30は暗褐色、31は外面暗褐色、内面黒色。32～48は胴部片である。器面
調査は条痕、鉢底研、鉢などがある。33～37は深鉢で、胴部最大径部の直下に凹線上のもの
のが巡る。37は内外面とも炭化物付着。38～41は胴部最大径から下の破片。38・40の外面、41
の内外面には炭化物が付着する。32・42～48の中には深鉢の頭部で天地逆になるものもあるか
かもしれない。胎土には33・38・39・43が砂、他は石英粒砂を混じるが32・35～41・43・46には
雲母小片も含まれる。焼成は良くないものが多いが、33・38・41は比較的良好。暗褐色、黒色
を呈するものが多い。

以上の土器は1・17～29の刻目突帯をもつものから縄文晚期終末の時期のものであろう。北
九州の縄文晚期終末の夜臼式土器は、近年板付遺跡の調査例からⅡ型式に分類されている。^(註1) また近年早良平野において夜臼式土器の出土例が増加しているが、本遺跡での2～6・8・9の
ような深鉢を伴う例はない。この深鉢は、33～37のような胴部をもつと考えられるが、このよ
うな器形はいわゆる御領式、黒川式などの系統を強くひいており、また刻目突帯の土器も、そ
れら口縁より下がる位置につけられ28・29にみられるように胴部屈曲部は、無文で放置してい
るなど、板付遺跡の夜臼Ⅰ式より先行する可能性もある。ただ、粗製土器のみの出土で、これ
だけで型式設定は無理であり、今後の類例の増加が望まれる。

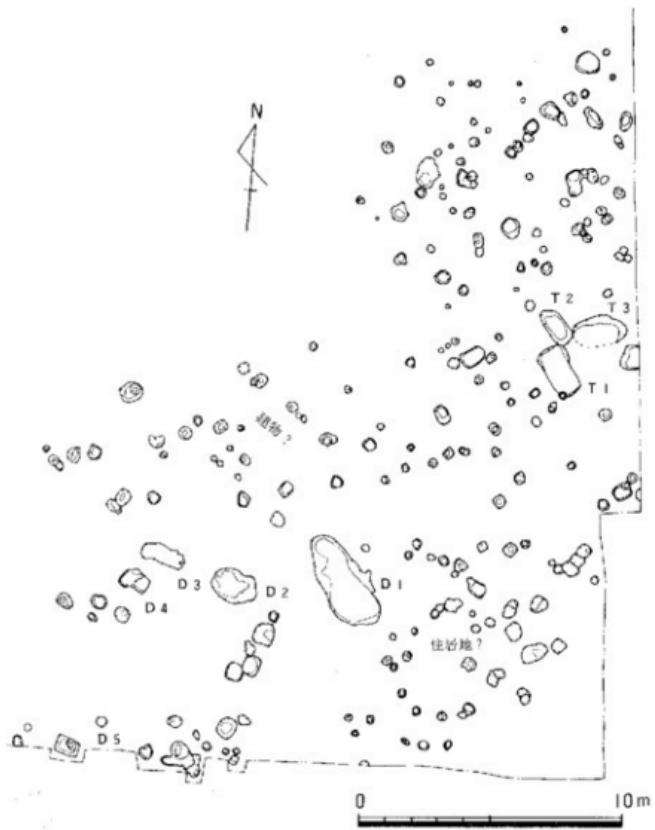
註1 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山弘先生古希記念 古文化論叢』1980

包含層出土の縄文土器（第6図18）

全面密研した黒色を呈する浅鉢である。短く外反した口縁部が、くの字状に反転して頭部を作り、肩部でわずかに角張って、胴部～底部へとすぼまる。口縁内側は、一条の沈線状の凹みがみられる。器面のあれが著しい。胎土に石英粒砂・長石を含み、焼成は良い。縄文晚期のものであろう。

4 3、4区の調査

東部が最も高く、北西へ向って、緩やかな傾斜をもつ。土塙、ピット群は高い部分に集中し、
北西部にいくにしたがい減少し、消滅する。土層は、耕作土の下に鳥栖ローム層、八女粘土層、
砂質土層となっているが鳥栖ローム層、八女粘土層が無い部分もある。弥生時代の土塙、
堅穴の他、ピット群が多数検出されその中に、堅穴住居址のピット群（南東部）と建物跡のピ
ット群（北西部）と考えられる一群がある。住居址は中央部に土塙をもち、直径4～4.5mの
円形状に配列する。建物跡は2間×1間、桁行2.59m、梁行1.97m、1.18mを測り、柱穴に二
段掘りのものが4個存在する、しかし、住居址、建物跡とも確証を得られないで、一応その
可能性があることを記すにとどめる。



第11圖 3区遺構全體図

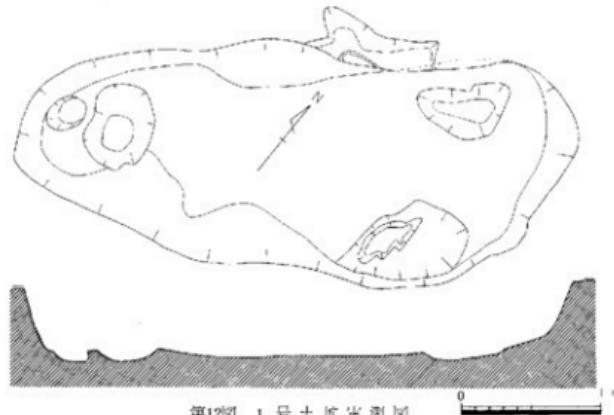
土塙の調査

第1号土塙（第12図）

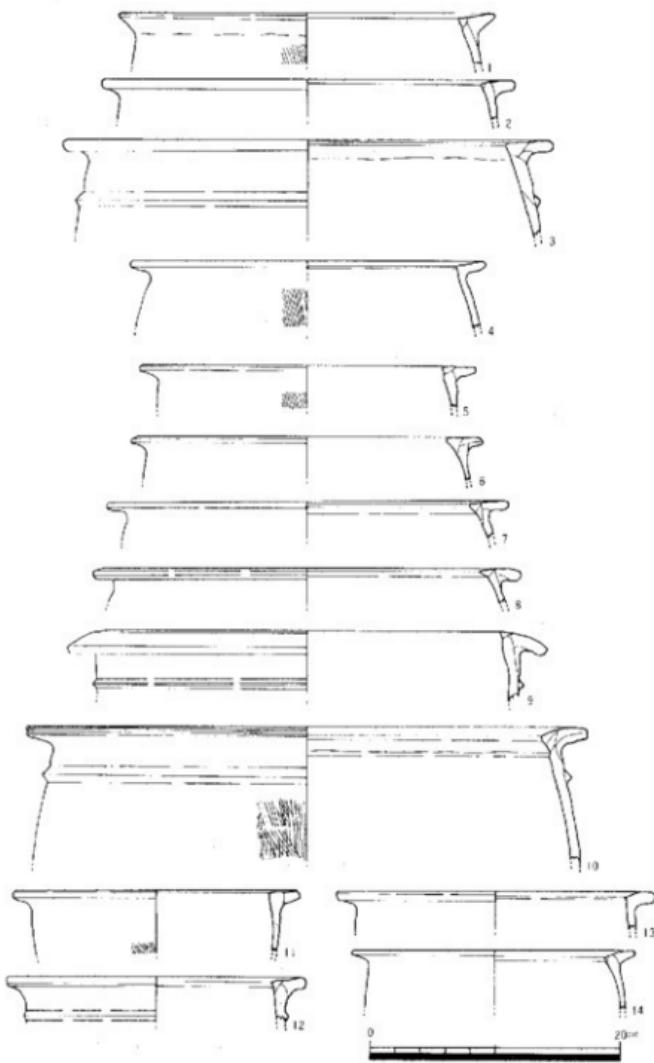
南北長軸約4m、東西短軸約1.6mで、北側がわずかに狭い船底状の大型土塙である。東辺中央付近でピット1個を切っている。底面はほぼ平坦であるが、北柄に2個、西南隅と東南隅に各1個の浅いピットがある。現存の深さ約49cmで、白色の八女粘土層まで掘られている。極土は黒色土および灰が充満していたが、壁は焼けていない。遺物は磨製石鎌、石庖丁片、投弾、錐石、黒曜石片、弥生式土器が出土している。

出土遺物（第13図・第14図15～33・38）

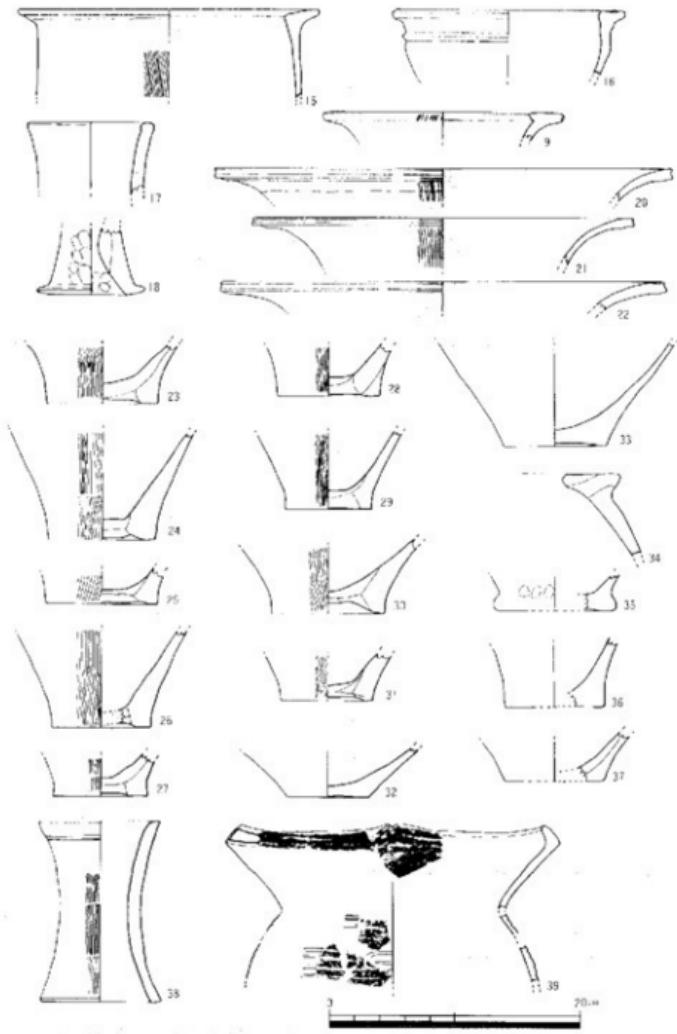
1～15は甕の口縁部である。ほとんどが逆字状口縁に近いが、1・16は口縁上面が凹み、突帯状に外端が張り出す。口縁内端は張り出さないもの、張り出しが弱いものが多いが、6～8はやや強い。口縁直下に三角突帯を一条巡らせるもの（3・9・10）がある。10は口唇部が沈線状に凹み、その上下に刻目がつけられる。すべて胎土に石英粒砂を含むが、靈母小片（1・3・8～10）や長石（4・7・11・15）を混じるものもある。焼成はすべて良好。暗淡褐色（1・4・9）、暗赤褐色（2・3・7・14）、赤褐色（5・11）、褐色（9・8・13）、暗褐色（10・12・15）を呈する。16は逆L字状口縁の外で、口縁下に一条の三角突帯が巡る。横なで調整で、内面に指の捺痕整形痕が残る。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。17・18・38は器台。18は内外面に指の捺痕痕が残る。38は完成品である。口縁下に棒状の工具で強く押さえて沈線上のものを二条巡らせる。すべて胎土に石英粒砂を混じ、焼成良好。17・38は赤褐色、8は褐色。19～22は甕の口縁部である。19は外反する口縁内面に粘土を貼り付け、口唇部には刻目を施す。20～22は朝顔状に單筋に外反する。いずれも丹塗磨研。外面には丹で強く暗文を



第12図 1号土塙実測図



第13圖 1號土塗出土土器實測圖(1)



第14圖 1号土塚出土土器実測図(2)

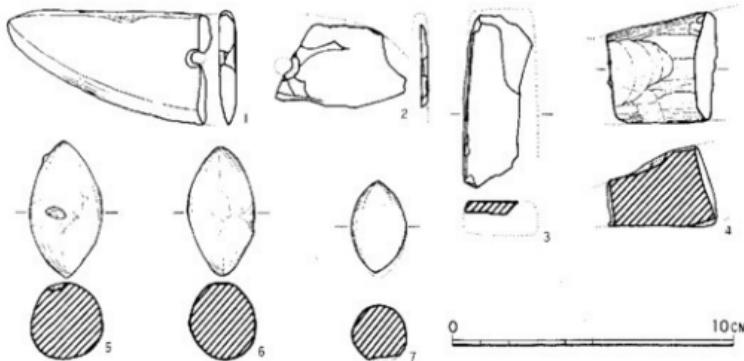
描く。19は胎土に石英粒砂を混じるが、他は良好。すべて雲母小片も含む。19は赤褐色、他は赤色を呈する。23~31は甕、32・33は壺の底部であろう。いずれも上げ底を呈するが、28は弱く、29は平底である。25の内面、26の外面、29の内外面のいずれも一部に炭化物の付着。すべて胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。赤褐色・暗褐色を呈するものが多い。

ピット群付近包含層の土器（第14図34~37・39）

24・26・27は弥生式土器である。24は大型の甕の口縁部で甕棺の破片とも考えられる。胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。暗褐色を呈する。37・38は平底を呈する底部で、いずれも器面のあれが著しい。胎土に石英粒砂を含み、焼成は良い。36は淡赤褐色、37は暗赤褐色を呈する。35は断面台形状を呈する底部で縄文晚期のものであろう。外面に指か、棒状の工具での押圧整形痕が残る。胎土に石英粒砂を混じ、焼成は良い。暗褐色を呈する。39は縄文後期の深鉢である。口縁部は4ヶ所で山形に隆起し、その頂部に切り込みが入る。くの字状に折れた口縁部から頸部へと窄まり、反転して球形の胴部へとつながる。口縁部には二条の沈線で文様を描くが、山形隆起の下で上下はつながる。唇消繩文らしきものも山形隆起の下でみられるが、不明。胴上部には列点文がみられ、その下には沈線と唇消繩文が施文される。頸部は磨研。胎土に石英粒砂を含み、暗褐色を呈するが、非常にもらい土器である。

石器（第15図）

1は、安山岩質凝灰岩ホルンフェルス（以下ホルンフェルスとする）製半月形石包丁で、敲打整形後直線的背部・体部には研磨を加えている。刃部は両刃で外彫り入念な研磨が加えられ、穿孔は表裏から行なわれている。2は、ホルンフェルス製の杏仁形石包丁と思われるが、背部の一部・穿孔部の一部が残っているのみである。3は、珪質シルト岩製の柱状（又は扁



第15図 1号上塙出土石器・土器品実測図

平) 片刃石斧片と考えられるが、刃部・頭部とも欠損している。4は、砂岩製の手持ち砥石と思われ、表面に鉛面が残っている。

5・6・7は、土製投弾で、5は茶褐色、6は黒灰色、7は淡灰褐色を呈し、7には黒斑が残っている。いずれも手型で整形し、胎土には、5が砂・石英粒を含み、6・7は砂・石英等の微砂粒を含んでいるが表面には出でていない。焼成はいずれも良く、5には、肩压痕が残っている。5は重さ27.8g、6は22.5g、7は8.9g+αである。

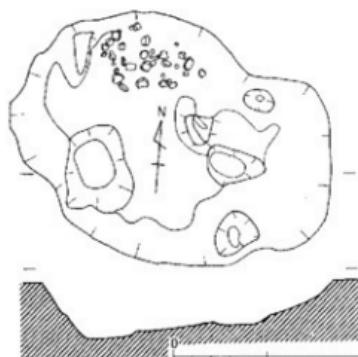
他には、石斧片1点、黒曜石製3点、ホルンフェルス製1点の剝片、黒曜石製の6点、ホルンフェルス製1点の削片・砾石1点等が出土している。

第2号土塙(第16図)

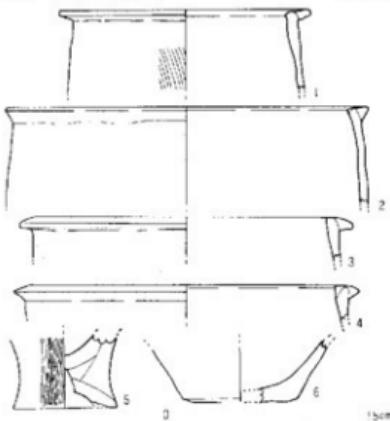
東西約1.7m、南北約1.3mの不整な円形プランをもつ。現存の深さ約34cmの皿状の形態を呈するが、内部に数個ピットが存在する。黑色土・灰が充満しており、焼縁が多数出土したが、壁面および床に火を受けた形跡はみられない。

出土遺物(第17図)

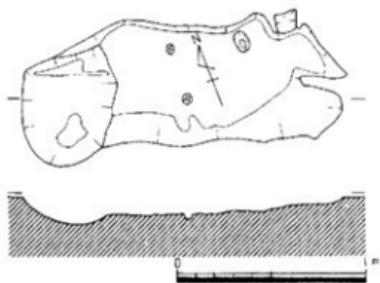
弥生式土器數点が出土した。1~4はいずれも口縁外端が短く張り出した甕である。5は窓台状の上げ底をもつ甕の底部である。いずれも胎土に石英粒砂を含み焼成良好。2~4が暗褐色。他は赤褐色を呈する。



第16図 2号土塙実測図



第17図 2号土塙出土土器実測図



第18図 3号土塙実測図

第3号土塙（第18図）

長軸約1.7m、短軸0.6mの長方形プランで、浅い。床面は不規則で、遺物も出土していない。

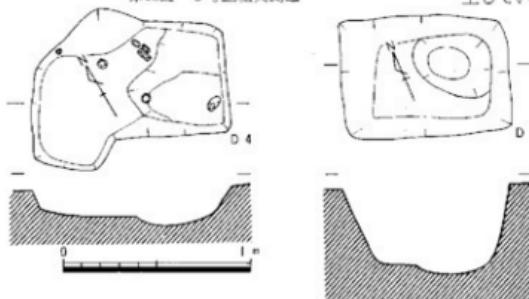
第4号土塙（第19図）

長軸約0.9m、短軸約0.5mの長方形プランと 0.6×0.5 mの方形に近いプランのピットの切り合いのような形をしている。遺物は出土していない。

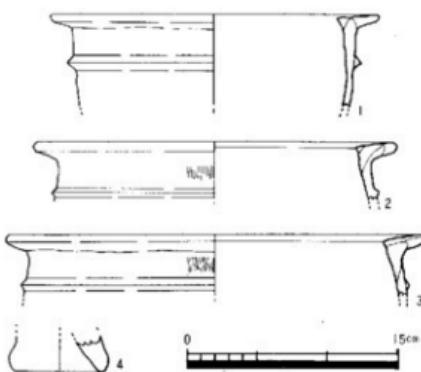
第5号土塙（第19図）

長軸約0.9m、短軸約0.7mの長方形プランをもつ。現存の深さ約25cm。東北隅が床面より約5cm深くなっている。

出土遺物（第20図）
弥生式土器数点が出土した。すべて壺で



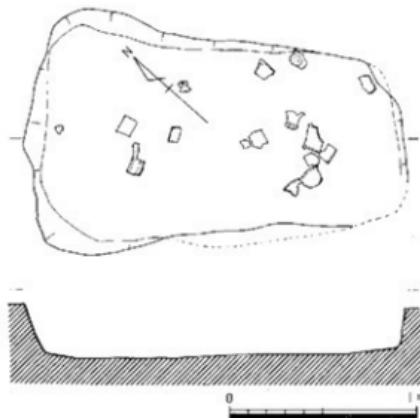
第19図 4、5号土塙実測図



第20図 5号土塙出土土器実測図

ある。1～3は縦L字状口縁である。内側の張り出しあは1以外は弱い。口縁内端が下がる。口縁下に一条の三角突帯を巡らす。4は高台状の上げ底を呈する壺の底部。いずれも胎土に石英粒砂を含み、焼成良好。3は暗褐色、他は赤褐色。

堅穴の調査



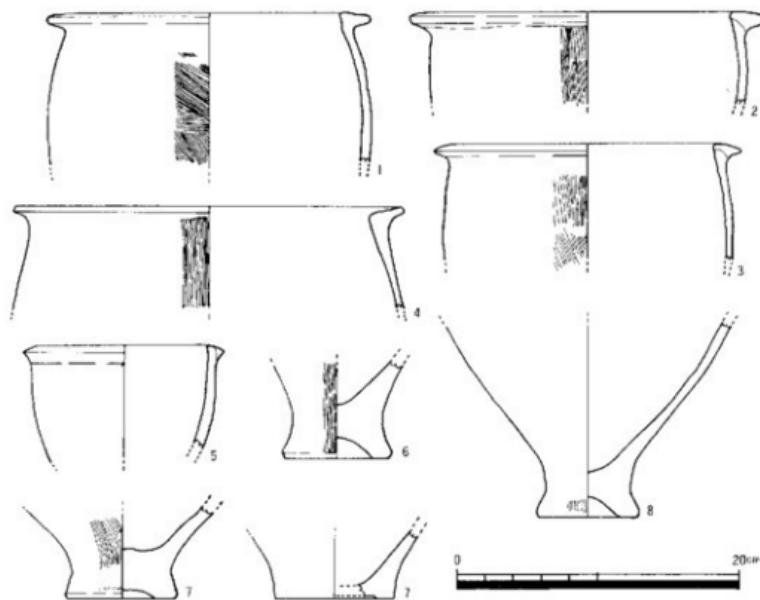
第21区 1号堅穴実測図

第1号堅穴 (第21図、P L10)

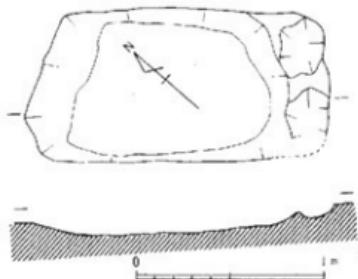
邊構は調査区の東端に位置する平面長方形の袋状堅穴で、長軸 2.0 m、短軸 1.0m を測る。

鳥栖ローム層から、八女岩土層に達して掘られている。北隅で 2 号土塁と重複し、南西隅はピットにより切りとられている。

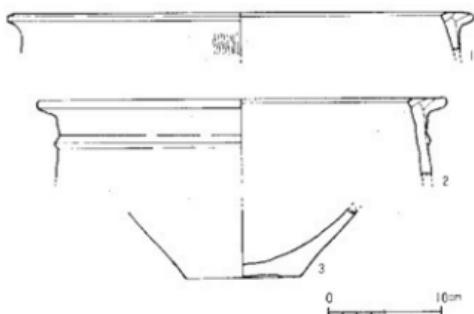
長辺は、南側が狭く北側部で大きく膨みをもつ。短辺はほぼ直線的である。南西部では、袋状を示す。床面は平坦で中央部が僅かにふくらみ、周縁部が少し高くなっている。



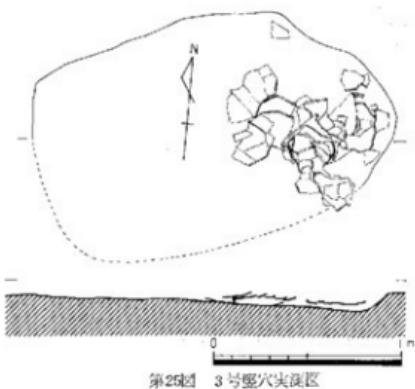
第22図 1号堅穴出土土器実測図



第22図 2号竖穴実測図



第24図 2号竖穴出土土器実測図



第25図 3号竖穴実測図

り、深さは、約25cmを測る。形状等が貯蔵穴と考えられ、本来はもっと深いものであろう。出土遺物は床面から、底部・口縁部破片が検出された。

出土遺物(第22図)

1～4は、壺形土器で、口縁～胴部にかけての破片である。1、2の口縁部は平坦で、少し外方に下る三角尖帯を貼り付いたもので、内側へ隆起は少い。口縁部の内側は刷毛目その後指でヨコナデを行う。

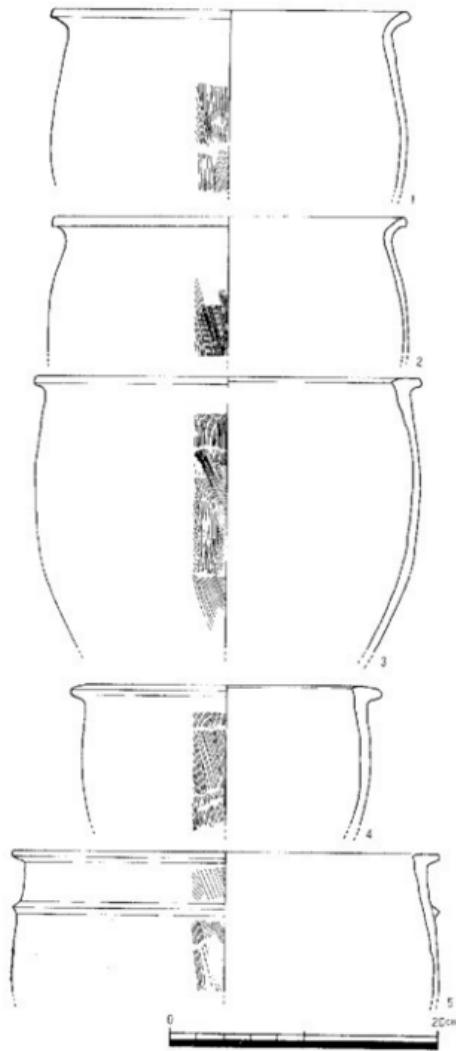
3は、口縁部外側が下り、三角形状を呈し、波浪をもつ。4は、逆L字状の口縁部である。端部は角張り、厚みをもつ頸部となる。1～4は、外面に縱斜方向の細い刷毛目を残す。

5は、小型鉢形土器である口縁部に広角な三角尖帯を貼り付ける。口縁部はヨコナデ、内面には下から上へのナデを行う。

5～9は、壺形土器の底部である。6～8は、肉厚な上げ底で外面に刷毛目を残す。内側は、ナデ調整を行っており、凹凸が観察される。9は、平底の底部で中央部が上げ底となる。

第2号竖穴 (第22図)

這様は第1号竖穴と南西部を隣接する。平面図は長軸1.2m、短軸0.8mを測る橢円長方形をなしている。床面は平面形が変形した長方形を示し、凹凸が著しく、南側二



第26图 3号窑穴出土器物剖面(1)

段になっている。深さは最深部で約13cmを測る。床面だけが残存し、上半部がほとんど消失しており、本来の姿は、とどめていない、おそらくは1号と同じく、長方形を呈する狩藏穴と考えられる。遺物は少い。

出土遺物（第23図 P.L.11）

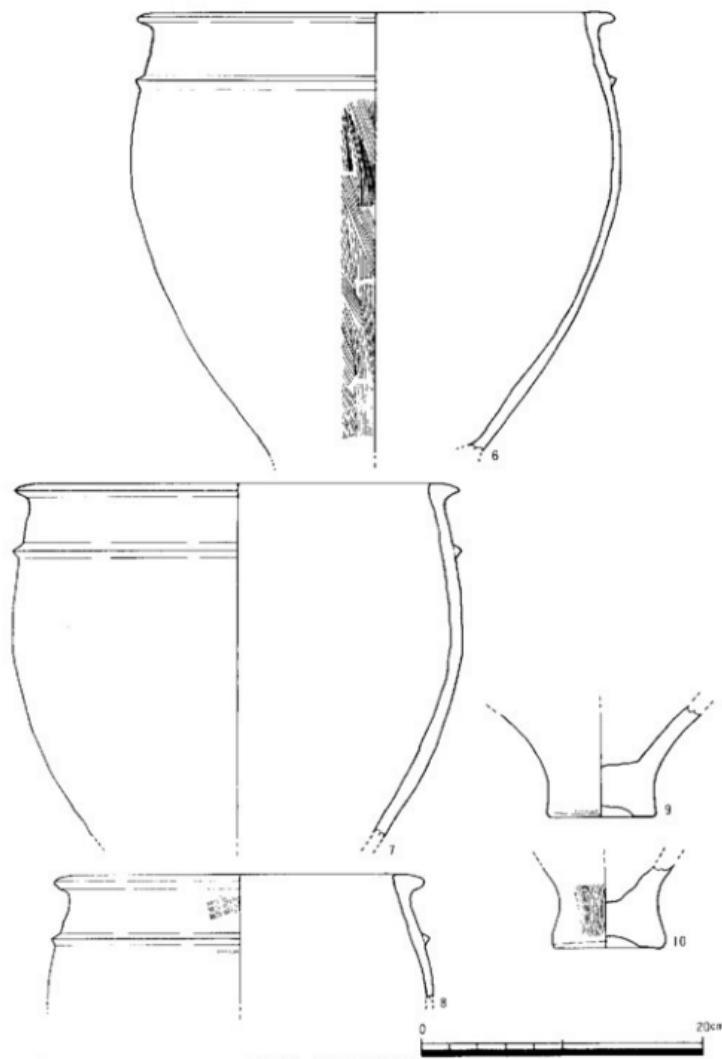
1、2は、壺形土器の口縁部である。1は口縁部上端が平坦で外側へ三角形に発達したものである。内側への発達は少い。外側には、縦方向の荒い刷毛目が残存する。胎土に石英粒砂を含み、色調暗褐色を呈する。2も平坦口縁で口縁下に三角突唇を貼付する。内側への張り出しありが最も多く、外側は、少し上へ跳ね上がり、丸く収る。3は、壺底部である。中央部が少し窪む。器面は荒れ、調整不明。

第3号堅穴（第24図、P.L.9）

遺構は第2号堅穴と西側で接し、主軸を東西方向に取る。平面形は長軸1.91m、短軸1.19mを測る。長辺凸形をなしている。東側は弧状をなし、西辺は直線的である。深さは約10cm前後で、遺存が著しく悪く、南側は消滅している。断面は皿状を呈する。底面は、なだらかな傾斜をもち、中央部が最も深む。この堅穴は底部の一部が残存しているだけで、おそらく、1、2号と同じく、長方形の袋状堅穴と考えられる。土器は東側に押しつぶされた状態で出土している。壺形土器がほとんどで、壺形土器の出土はない。

出土遺物（第26、27図）

1、2は如意形口縁をもち、胴部に最大径をもつ壺形土器である。口縁部に少し肥厚し、面を形成している。外面は縦方向の細い刷毛目を残し、煤が付着している。如意形口縁部を有する一群である。3は上面を少し波状に形成し、外側は隅丸形になる。内側への張り出しあり、小さいが稜線をもつ。胴部に縦方向の細い刷毛目をもち、口縁部はヨコナデ。内面はヘラ状工具で下から上方へ向ってナデが行なわれている。4は、口縁部の外側が下り、断面三角形を呈する。胴部外面には、細い縦方向の刷毛目が残り、内側はナデが行なわれ、コゲ状の焼物が付着している。4～7は、平坦口縁下に三角貼付突帯を有するものである。5は口縁部上面が平坦なもので、内側への発達が少い。外面には、口縁と突帯の間に荒い刷毛目があり、突帯以下には、細い刷毛目が施される。最大径は、胴部にあり、ゆるやかな彎曲をなす。6は底部近くまで遺存している。口縁部は、外側への発達が著しく、端部は丸く収る。胴部上半部が強く屈曲し、底部へと収る。口縁部と突帯の間は、刷毛目の後ナデを施し、突帯部はヨコナデ、突帯下半は縦方向の刷毛目が残る。胴部下半には煤が付着している。7は口縁部が外側へ三角状に引き出され、稜線をもつ。外面はナデにより調整され、刷毛目は残らない。胴部下半に煤の付着が著しい。9、10は上げ底状の底部である。器壁は厚く、底面中央部が窪む。9は底面の張りが小さく、直線的になるが、10は張りが強く、丸味を持つ。外面には縦方向の刷毛目が残り、端部はヨコナデを施す。内面はナデが施されている。



第27圖 3号竪穴出土土器実測図(2)

ピット群出土の土器（第28図）

1～9は、P.1より一括して出土している。1～5は平坦口縁をもつ変形土器群である。1～3は口縁部上面が内傾する。2は外端が垂れ、4は断面三角形を呈する。7は逆L字状の口縁で、直下に小さい三角貼付突帯をもつ。6は内外面丹塗で、口縁部上面が広い平坦面がく、内側への発達は大きい。7は壺形土器の口縁部で、内外面丹塗である。口唇上端部は角張って対む。9は器底の下半部で器壁は薄い。外面には荒い刷毛目調整が縦方向に走る。10～13はピットはピット検出時にその周辺部から出土したものである。10～12は、変形土器の底部で内面はナデ調整が施されている。10は、外面に刷毛目調整を行う。13は、平坦口縁で外端が垂れ、外面に丹塗を施す。



第28図 3区ピット出土土器

各区出土石器（第29図）

1・2・3は、黒曜石製で上下に打面を持つ縦長削片を素材として、尖端部・基部に削離加工を加えて製作された削片鑿である。1は素材打面を落として尖端部とし、2・3は素材打面に抉りを入れることによって基部としている。1・2は尖端部を尖らすという意図をもって製作されているが、3の尖端部は素材削片のエッジを殺したままである。これらは鉛植技法によって産み出された削片鑿である。1は1.4g、2は2.8g + α、3は2.7gである。5・6・8は黒曜石製・7は古銅輝石安山岩製の石鑿で、表裏とも入念な削離加工を加えている。5・6は平基式で、7・8は基部に抉りが入っている。5は1.1g + α、6は1.2g、7は0.5g + α、8は0.4g + αである。4は粘板岩製の有柄鑿製石鑿で、入念に研磨されている。表裏には稜線があり、断面は菱形（中空は方形）で重さ2.9gである。

9・10は、黒曜石製の縦長削片の縁辺に二次加工を加えた削器で、9は上下に打面をもつ削片を素材としている。10は、素材の打面・先端部を欠損している。

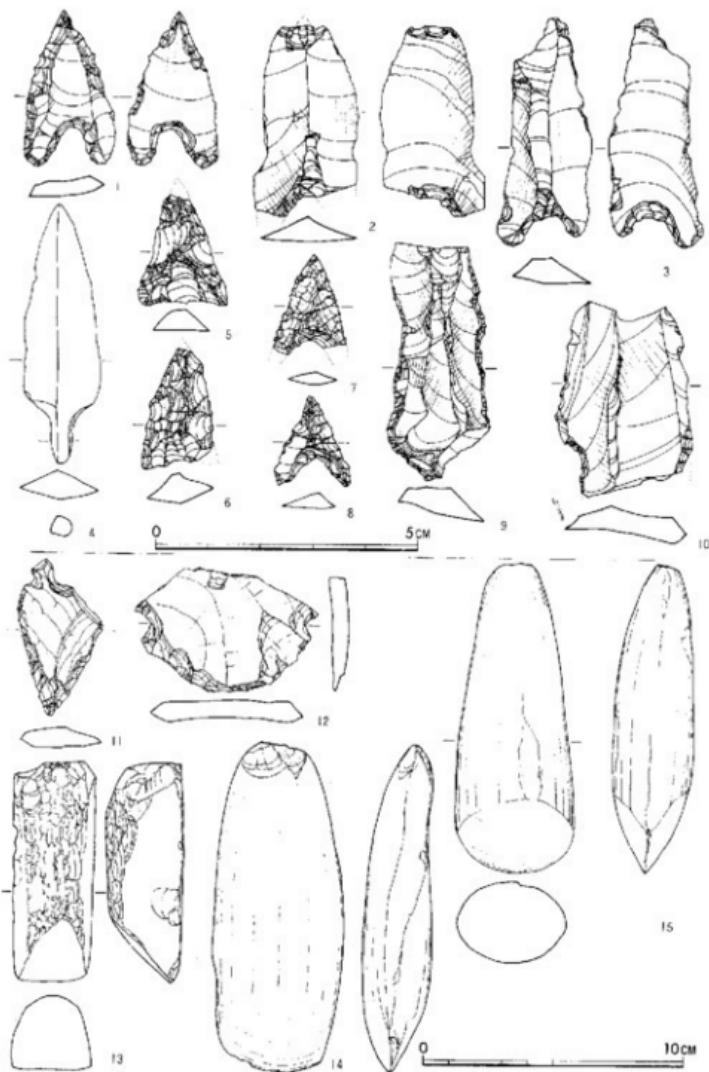
11・12は、古銅輝石安山岩製の石匙で、12は横長削片を素材として、縁辺に表裏から二次加工を加えて、逆三角形につまみをつけ加えた形を作り出している。重さは13.1gである。12も横長削片を素材として、自然面の残る素材の右縁辺を残して上として、打面と相対する位置に二次加工によって抉りを入れ幅広いつまみ部をつくり出している。素材の左縁辺には、表裏から粗い削離加工を加えて、刃部を作り出している。重さは22.9gである。

13は、硅質シルト岩製の片刃石斧で、削離敲打整形後、側面・裏面・刃部に入念に研磨を加えている。横断面は、蒲鉾形をなし、刃部の角度は約50°で、刃部には刃くぼれがみられる。

14は、黒灰色滑石片岩製、15は淡緑色蛇紋片岩製の磨製始刃石斧で、横断面は梢円形である。14・15とも刃部は65°の角度をもち、体面、刃部とも敲打整形後入念な研磨が加えられている。

他に緑色蛇紋片岩製石斧2点、古銅輝石安山岩製削器1点、安山岩製石包丁？2点、粘板岩製孤石1点、黒曜石製の上下に打面を持つ石核から剥いたいだ縦長削片1点、普通の縦長削片1点（黒曜石製）、黒曜石製削片2点等が出上している。

以上の石器中、削片鑿（1～3）・削器（9・10等）・石匙（11・12）・磨製始刃石斧（14・15等）は、形態から縄文時代後期の石器と考えられ、第14区39の土器期のものであろう。片刃石斧（13）は、形態等から弥生時代前期、磨製石鑿（4）は弥生時代中期前半期のもので、第1号窓穴使用器のものであろう。打製石鑿（5～8）については、縄文時代から弥生時代中期中葉まで製作使用されているが、本遺跡出土の遺物から縄文時代後期から弥生時代中期前半期に時期を限定しても良いだろう。



第29圖 各区出土石器实测图

資料 I 2 区溝出土の種子類について

粉川昭平

水濱けの状態の種子類と、それを含んでいた黒色粘質土を、試料として預り調査した。今回は前者の同定結果のみを報告する。保存状態は、きわめて良好であった。年代は縄文後～晩期である。

イチイガシ (*Quercus gilva*) 穀果 2 個、完熟大形で、1 個は完全、他の 1 個は先端部が欠けている。幼果、大小 4 個。

クヌギ? (*Quercus acutissima*) —— 中程度の熟度の殻斗（いわゆるお椀）1 個、中には堅果の果皮、種皮の一部を保存している。

ムクノキ (*Aphanauthe aspera*) —— 種子 1 個。

クスノキ (*Cinnamomum camphora*) —— 種子 5 個。

ノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata*) —— 種子 1 個。

エビヅル (*Vitis thunbergii*) —— 種子 1 個、背面のみで、腹面は穴欠している。

ムクロジ (*Sapindus mukrossi*) —— 種子 1 個、完熟したもので、核状のヘソも保存している。一部には、果皮ものこっている。

アカメガシワ (*Malkotus japonicus*) —— 種子 3 個。

ヤツツバキ (*Camellia japonica*) —— 果実 3 個、1 個は、半分のみで、リスなどのけっ歯類によって、かじられ、齒型がのこっている。他の 1 個は、表面が全体にわたってかじられ（？）、やゝコルク質の果皮が露山している。最後の 1 個は、かじられた形跡はないが、果梗もなくやや歪形で、先端が微突で、偏圧され、横断して 3 室の構造をしる迄は、ヤツツバキとは思えなかつた。いずれも未熟の種子を保存している。このような未熟果（おそらく色はまだ緑色であったろう）が、自然に落下する事は考えられず、リスなどによって、落されたものとみられる。このような例は、春日市門田遺跡谷地（山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告一第 11 集 1979. P 157）で知られている。

リョクトウ? (*Phaseolus aureus*) —— 木炭化したマメ科の種子が、破片も含めて、20 個ばかり出土している。大きなもので、 4.5×2.5 mm 程度の大きさがあり、一部に脐点（ヘソ）も残るものがあり、ケツルアズキ (*Phaseolus mungo*) のようにもり上ってはいないようである。似たものに、ヤツツバキ (*Ph. angularis fujipponensis*)・ツルニメ (*Glycine soja*) などがあり、さらに検討を要する。しかしこれらにしても、史前帰化人里植物や、アズキ畑の雜草であるのであり、純野生で、地質時代から、日本にあったものとは考えられないようにも思われる。リョクトウは、インド原産である。このような綠豆類似のマメは、最近各地の縄文遺跡から出土して注目されている。福井県三方町鳥浜貝塚（縄文前期前半）。岐阜県益田郡萩原町桜洞遺跡（縄文後期）。福岡市西区四箇遺跡 A 地点（縄文後期後半）。鳥取市桂見遺跡（縄文後期前半）。長野県下伊那郡豊丘本伴野厚遺跡（縄文中期後半）。福岡県糸島郡二丈町

広田遺跡（縄文後期末）などの他、埼玉県岩槻市真福寺記炭層遺跡よりも記録がある。アズキ (*Phaseolus angularis f. angularis*) のような大型のものは、縄文時代よりはまだ出土していないようである。アズキは、中国北部が原産地とされている。

キカラスウリ属の一種 (*Trichosanthe sp.*) ——種子1個。ややそりかえり変形している。

エゴノキ (*Styrax japonica*) ——種子13個、大型で13個のうち3個は、果皮の一部ものとなっている。以上10科11属12種類があった。

イチイガシ、ムクノキ、クスノキ、アカメガシワ、ヤブツバキ、ムクロジなどは暖地性の樹木であり、西日本遺跡よりはしばしば出土する。リョクトウ類似のマメは、すでに北九州では、縄文後～晩期に3ヶ所しられた事になり、注目に値する。

卷六
料
2

次郎丸関係中世史料

1 萬萬領所務職補任狀案 石清水文書五〇九

御判

萬萬領次郎丸名愛染精羅西鄉那珂郷中田町等所務職事、所被仰付候也。御年貢以下不法辦公司被致當沙汰、但背本所御命、現不思時者、非此限之狀、依仰執達如件、

文明六年六月廿七日

少別當生輝

對馬守職

2 對馬新左衛門尉爲義亮券案 石清水文書五一一

永代相傳、二買給候狀之案文

依有月々永代、うり漢申、早良郡内次那丸社家分之事、つもり候て

合百石一、御門駕御一通相副、あ所務代瑞之事、箱田木工允方過

置候處實也、於彼在所、社役進斗升一、每年御奉米四石八斗、（通）木錢兩百文、年々京通米拾石、（通）三貫文、堅固、御駕走可

有御知行候、又者社家事務政與行候共、相違候僕有間敷候、仍一

筆如件、

永正三年十月一日

為親子書

賣券案文

箱崎對馬新左衛門尉

續日興長之封裏之也

3 片岡常俊奉書案 石清水文書五一二

五智輪院口御割分多捨石、相副粉質九貫文、院家御一期之間故進

隅田多門法嗣殿

讀上者、自官年乙卯難無御奉書候、每年體可被直進中之由、被仰者也、仍執達如件、

明應四

片岡左衛門督

常俊子書

六月一日

留守新次郎殿

4 開田興秀請文案 石清水文書五二三

〔文書〕

〔案文〕

另山御領筑前國早良郡次郎丸（通）御代官職之事、（通）依申御内貢納御

御付候、大慶候、然者御正税米（通）船貨參貫文加之、每年可

送丸納候、若又有不法辦者老、（通）可被召放者也、仍詩狀如件、

遂丸納候、若有不法辦者老、（通）可被召放者也、仍詩狀如件、

正十八年

卯月十四日

〔文書〕

按察法樞御房

5 大内家奉行人奉書案 石清水文書五二一

御打渡之御奉書文

父大膳進秀一跡事、被成績日御判畢、然者興秀爲當知行筑前國

早良郡次郎丸名柳原郡西領頭所、并管轄敷地等事、任本家補任之旨、以前被成御裁許之上者、無他坊進止不可有相違之由所被仰出也、仍執達如件、

大永五年三月七日

〔文書〕
兵部少輔有
兵部助佐書

按察法橋奏禪契狀案 石清水文卷五
第南國旱良郡之內次良丸代官職之銀，對馬守已來所持候由候，然者于今被相拘正候之事，拾石某文之，并領參貢文，無相述，厥貢候對納候，就其御補任之事承候，遇上候者，源公可曰遇候，其間之候正說於非無沙汰者，御為尊一候者也，仍而狀如件、

大水六年卯月五日

按察法橋

奏禪在附

稻田木工尤服

著着御奉苦對形狀後守殿候

御奉苦對形狀後守殿候

早良郡次郎丸名或捨町地事 可被打渡兩田多門法師代之由、去八

月八日被成奉苦候處、十月八日晴文、并籍田飛驒守歲按察法橋裁

判如行由、彼是八道案文並到來候、則令被候、雖然不帶本家

補任、只內々美次侯、恐止對馬守新左衛門尉事跡他之候、

門跡上使片岡人守候、後藤石京之進四人事、是又為活若殿方御當

家御下如遂背之仁候、不被及御付用之由被候出候、岡田總文事

者、多門法師父子本家巡守之補任、并御利奉書等正文諸候佛上真

候、以上十一道案文封裏照下處之候、如此御裁許發重候處、不拘

御下知、悉數年押領之候、餘故改末盡之至、不可然候、

當主頃云、可打渡早運多門法師代之由、對郡代大村兵庫助被成奉

書候、可被得其候、猶委細長忠被仰含候、恐々謹言、

大水七年十一月廿八日
兩田多門法師

奏禪在附
(元)十一月廿一日

興重書判
(元)十一月廿一日

興重書判
(元)十一月廿一日

御補任攝目案文

御判

八幡宮領筑前國唐屋郡之內敷地分御代官職事、親父與秀任清文之

8 按察法橋奏禪奉書案 石清水文卷五

御補任攝目案文
(元)十一月廿一日

杉豐後守販

御判

封御代大村方御奉書同議文之案
當郡八幡領内次郎丸求拾町事、任本家補任、對鷗田多門法師、被成御判候、下地云、當主賣云、對彼代早速可被打渡候山坂仰出候、恐々謹言。

(二月廿一日)

興方判
大村兵庫助殿

11 杉興長請文案 石清水文書五二七

從杉國後守殿御請文案

男山 八幡領内夷良作者稻田飛鹿守相向正稅所、當國早良郡次郎丸名事、對鷗田多門法師、被任本家補任之旨、被成御判之由、御奉書并請文案、對彼代早速可被打渡候、就彼地之儀、去年被仰下候、委細令當上候才猶以難可申上子細候、重而御下如之止者、只今可致言上事、相似遠背候之間、對多門法師代可被打渡之由、郡代大村兵庫助與景中道候、先年於當國中所々從本家契約之地候、以其准據逐而可申上候、此由可有御披露候、恐々謹言。

(二月廿一日)

興長立

野田兵部少輔殿
杉三河守殿

八幡領早良郡次郎丸名、興長被官籍田飛鹿守相向正稅所事、對鷗田多門法師即任種任旨、被成御判由候等、只今不及旨趣候、逐而以御傳據可申上候、然者對多門法師代可被打渡候、恐々謹言。

(二月十六日)

興長書
大村兵庫助殿

14 大村興長請文案 石清水文書五二〇

(二月十六日)

興長立

御奉書諭而令拜見仕候、抑當郡次郎丸之内社家分之事、對鷗田多門法師可被打渡之通存其貿、則對多門法師代打渡侯由、可然之様可頂御披露候、此之由可得御意候、恐懼謹言。

(二月八日)

興長書

野田兵部少輔殿

杉二河守殿
御報

親父大膳准劉秀一疏事、任漢云院禮度々諭旨、調田多門法師
領掌不可有相違候狀如件、

亨祿三年九月十七日

15 片岡家後他二名連署狀

石清水文書五二五

於八幡稻田中請御奉行三人之御一道案御手封奉給候案文
次郎丸證文事、何^モ拜見候、殊無耳之時取共無余儀存候、然者證
文共無紛様存候、御院家無御存知候哉、以此旨御墨形様ニ可有御
申儀肝要候、恐々謹言、

享祿三

六月十九日

片岡左衛門屬

家後^主

香庭修理道

後廣口

飛騨入道番對馬原左衛門尉家曾相續蒙狀、越許令廳山之條、重而
奉行衆、被成御尋之處、設新元衛門尉尋、就斷絕、從本家對馬田
被補任之上者、非沙汰限、況細田者不特本家補任、多門法師證文
者、父子連帶本家補任、殊兩度獨判并奉書為屢然之間、理更無疑
之由各言上、仍知享祿二年十一月廿一日御下知、仁嘗知行之旨、
被付沙汰於多門法師事、然者追止不可有相違之由、依御執達如件、

天文二年五月十五日

武助^主

則興^主

賴輝^主

五智輪院御藏掌

(前) 「號秀刊

(後) 賴道判

18 大内氏奉行人連署狀

田村文四

(前) 欠

候之條被知行、至下作職者、如元對箱田可被渡付之由候、恐々謹

16 大内義隆安堵狀
石清水文書五二四

義隆様積日案文

御判

(前) 武助(花押)

後六月三日

17 大内家奉行人奉書

石清水文書五一四

早良慶次郎丸名領拾可地事、嗣田多門法師与箱田張驥入道相論之
儀者、享祿二年十一月廿一日被付沙汰於嗣田之處、去年天正元春、
飛騨入道番對馬原左衛門尉家曾相續蒙狀、越許令廳山之條、重而
奉行衆、被成御尋之處、設新元衛門尉尋、就斷絕、從本家對馬田
被補任之上者、非沙汰限、況細田者不特本家補任、多門法師證文
者、父子連帶本家補任、殊兩度獨判并奉書為屢然之間、理更無疑
之由各言上、仍知享祿二年十一月廿一日御下知、仁嘗知行之旨、
被付沙汰於多門法師事、然者追止不可有相違之由、依御執達如件、

造物大官司設

眞程（花押）
國重（花押）

職知行然々なく候、又地下者守護被官之儀候之間、彼方も不及
了簡候間、無其儀候様、御意候通者可申候、
一次郎九事、家儀子ニ御扶持候由承候、目出度存候、さりながら
御正視方然々不納候處、御用却爾不足あるべく候間、給計まで
に候、何も能々可預御坡露候、恐々謹言、

19 按察法眼奏擇書状 石清水文書五六七

按察法眼

九月十八日

奏擇（花押）

小篠六郎兵衛附候

奏擇

小篠六郎兵衛附候

御返報

御返報

猶々、當所之儀、地下各為實いたるまで、守護其外方々被官ニ

被成、萬木家御被官ハ一人も見ず候、暮々間別之儀當留守ニ可

白候、我々申候矣地下承引申聞候候、殊御風形様より當所へ御
用報申、此一兩年御懸候、其外又深々、三千貫文及錢御懸候
間、書請へも被御付候間、地下衆足をためかきよし申事候、
御札參照耳見令申候、仍密御空宿之儀、承候之間申付候、一日
も遺留候へ之由申候へ共、急候申致候之間、無其儀候、

一 倍侯御頭之由承候、尤存候、御頭役を被御候てこそ、外間實儀
可然候之處、勝事までに候

一 御正視方少事様、承候、尤存知候、乍去去春下京五井次郎三郎、
替り合上候時、正視方事申候間、杉原道神代彦四郎方次郎丸取

合、六七拾石金〔源〕岐岐升にて納候内、我々も給分給候、以知
候、然共少將候の上落も左様之様に候つる處、むき／＼と御懸
候て、此方へも無下向候、當而留守より人を上司申候へ共、當

20 大村國景書状 石清水文書五一八

〔源〕次郎丸之儀御代大村方書状案文〔天文九
月十一日〕

嗣田方与被御御子續候之候、次郎丸當土貢事、可拘置候由、對百姓
等被御付之應、先度預御案内候、御丁寧之至候之由及御報候つ、
然處還城坊有御登城、以證跡改道之上承候候、不及支賣候、爲御
屈候間、一筆申候恐々、

十月十一日

〔天文九月十一日〕

按察刑部卿殿

御同宿御中

21 按察刑部卿殿擇書状 石清水文書五

〔天文九月十一日〕

次郎丸刑部卿押被申一道
大村縣にも此分申渡候、當土貢事落着候間、各かゝへをかるへ

當所一郎丸事、八幡櫛住役之儀、開田藤二郎方無沙汰候、於京都御
かハシし仕候へ共、千今無禰法候間、彼ニ郎丸土貢事、可被押擣候、
諸料十二貫文被渡遣候者、彼方可被任所務於、開田方催促候とも、
不可有承引候、柔細此便可申候、恐々謹言。

候，仍就霜曉析之儀，被中儀候問，對兩三人以書狀令申候，此之條可彼得其心候，恐々。

十二月十四日

卷之三

天文九

十月六日

一
郎君名士集

勝利
(花經)

御宿所

卷之三

三

天文書

御宿所

22毛利房庶吹舉狀 石清文六百五十三
重卿參上候時、房庶吹舉狀案一通同御
一通、

一所二被召置御奉書之案

閩田務次鄭方寧，確爲御家人，筋目近奸中諛候，以先達之旨，筋口之段度々薦言上奏，一恩封被相支於之後，終子細不被知召相處候，此即前々寫照之旨偏上賣，於御分別者，高尊居御職者相勸度侯山，對房顧熟說候之策，唯今遂注過候，先以無足候，御奉公可遂其節候之由候，於子祖老隔出方參上侯事候間，可被成徇辱等候，此錄宜預制候緣候，恐々。

十一月四日

毛利總部允

23

石澗水文書五三

隅田藤次郎方之事、皆御吹累状參上候、被召臣御一所候、尤日出

25 後藤則定書狀 石清水文書五一六

25 後藤則定書狀 石清水文書五一六

「二郎丸かがらの事」

天文廿一年正月四日記下候時 知音も合ハ貰文之事 わりとも

拾貳貫文にて候を、嗣田方へ切々難申候、わり之儀者、於此國該申上者、承引申ましき由候て、出不申候、左様ニ候とて、請取不申候へは、替かた猶々爲分ニ成候儀候間、先八貫文の分請取候て、助四郎かたへ渡申候、わりの分残而四貫文、わり貳貫文加拵可申候、然者去年之儀者、嗣田方と申事候て、一圓所務調候ハす候、殊助四郎もいま程渡唐中候間、其前に渡分一みち調候て可見候、爲御心得申候、聊以無由斷之儀候如件、

某合

正月十九日

則定

片開与八郎殿

まいる

此御替爲之事、今度ニ法方下向之^事之儀候、不可有御不審候、爲御心得候、此外不申候、

26 後藤則定書状
石浦水文書五二七

(第二回) 天文廿二三法下候時貳貫五百貫之儀、付對助四郎^事、
今度被下候時、豈貫五百文之替錢事、且陳馳走と候へ共、書狀無之候、雖然不可有別儀候之際、對助四郎方可被相渡候、可心安候、
悉惶謹言、

後藤則定後守

八月十八日

則定

智恩院殿
人々御中

図 版

PLATES



① 調査前全景



② 1区遺構全景（西より）



① 1区遺構全景（東より）



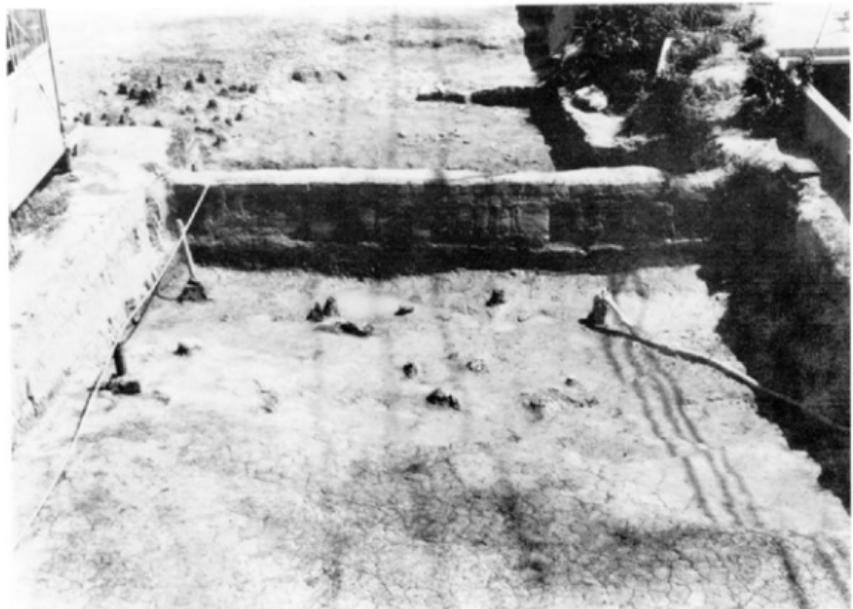
② 1区杭列出土状況



① 1区遺構全景（西側）



② 第5号溝全景



① 2区溝状遺構全景



② 2区溝状遺構遺物出土状況



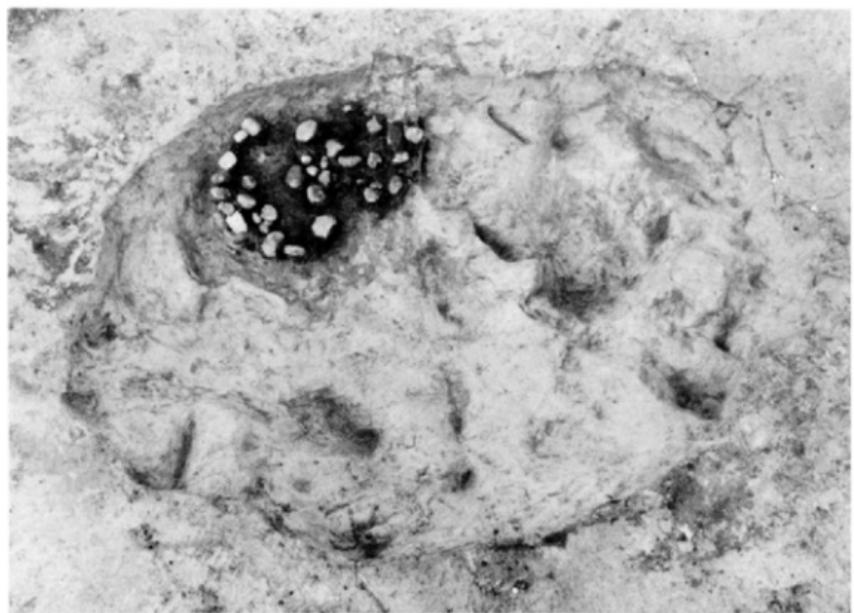
① 溝状造構土層セクション（西壁）



② 溝状造構土層セクション（北斜面）



① 1号土块 (3区)



② 2号土块 (3区)



① 5号土塊（3区）



② ピット群全景（3区）



① 3区遺構全景



② 3区ピット群近景（3区）



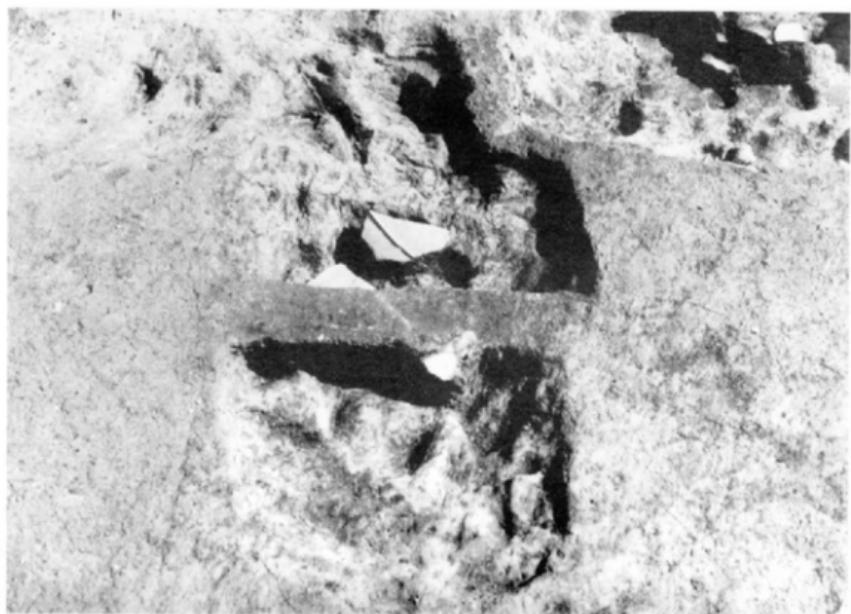
① ピット群近景（3区）



② 1～3号堅穴全景



① 1号竖穴



② 2号竖穴



(第3区出土)



堅穴出土土器

福岡市学校建設地内遺跡調査報告書
三筑遺跡・次郎丸高石遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第69集

1981年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
印 刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎埠頭六丁目4-4

三筑遺跡・次郎丸高石遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第69集

一九八一

福岡市教育委員会